京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS

FACULTY OF FINE ARTS
FACULTY OF MUSIC
GRADUATE SCHOOL OF ARTS
GRADUATE SCHOOL OF MUSIC

京都市立芸術大学

大学案内 2024-2025

KYOGEI TERRACE

まちにひらかれた テラスのような大学へ ようこそ

2024-2025

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

芸術は新しい時代を切り拓く力

少人数教育で学ぶ実技と理論 ── 社会への広い関心と柔軟な思考を育む

京都市立芸術大学（京都芸大）は、今年、創立144周年を迎える、日本で最も長い歴史を持つ芸術系の大学です。1880年、幕末からの戦災や遷都により衰退していた明治初期の京都で、復興を目指す若い絵師たちの思いを集めて、京都府画学校が設立されました。そして1952年、戦後の復興期に京都市立音楽短期大学が誕生しています。本学は、真に厳しいとき、苦しいときにも変わらず芸術教育に力を注いできた京都の人々の想いに応え、創立以来芸術を志す学生たちの夢や思索をかたちにし、世界の人々に届けてきました。伝統文化を守りつつ、常に新しいものを取り入れて、まちを活性化させてきた京都。その土壌に学び、さらに新しい価値観を示しながら、本学は日本の近現代芸術の屋台骨を支えるアーティストたちを脈々と輩出してきました。

本学は、常に「創造の現場」です。私たちが学生に求めているのは、芸術や文化に対する好奇心、表現することへの強い意欲、柔軟な思考力、あふれる個性です。一学年が両学部合わせて200人の小規模な大学ですが、この規模だからこその「質の高い少人数教育」と、学部や専攻、実技と座学の「垣根を越えた横断的教育」を行っています。作品制作や演奏のためのテクニックや感性を磨く「実技教育」と同時に「理論教育」も重視します。学生が感性や直感のみに頼らず、広く社会に関心を持ち、思考するように導き、潜在的な表現力をさらに輝くものに育てていくのが本学の教育です。

2023年10月、本学のキャンパスは、京都の玄関口である京都駅近くへ移転しました。京都市民や企業・団体、そして差別を受けた複雑で重い歴史があるここ崇仁地域の人々、卒業生や本学関係者など、多くの人々のご理解とご支援で、この移転が実現いたしました。コロナ禍の影響や世界中で起こる分断や対立、地球環境など、簡単に解決しない複雑で困難な課題を抱えるこの時代に、「厳しいときにこそ、芸術は新しい時代を切り拓く力」と考え、美術や音楽の力で人や街を育てようとした京都の先人たちの思いを引き継ぐ移転となりました。

新しい校舎には、オーケストラや室内楽など多様な編成に最適な音響空間を確保できるサイズの異なる音楽ホールや、金属や木材などさまざまな素材の加工が可能な工房も整備するなど、学生が持てる力を存分に発揮できる環境を用意しています。

また、キャンパス移転に伴い、未来に向けた新たな大学像を「TERRACE」と定めました。まちに開かれたテラスは、地域の歴史や文化と緩やかにつながりながら新たな「創造の現場」となり、さまざまな人々や機関との交流を通して、その刺激や情報を教員や学生が作品や演奏、研究に昇華させていく。そんな活発な芸術の拠点になります。

学生は本学で、高い志を持った仲間たちと出会い、アーティスト、音楽家、研究者として活躍している教員たちと出会います。お互いを高め合いながら芸術を学び、京都の街に溢れるエッセンスを吸収して創造力を磨く、そんなすべての体験は、社会に出てからの自信なり強みになります。人生を豊かにする方法を考え、将来の可能性を探っていく大切な学生時代、ぜひ京都市立芸術大学でしっかりと学んで、皆さんの夢の実現につなげてください。

学長　赤松 玉女

【あかまつ・たまめ】 画家。1959年兵庫県尼崎市生まれ。1984年に京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻（油画）修了後、国内外の美術館やギャラリーでの展覧会を中心に活動。油彩、水彩、フレスコ技法など、画材や技法を組み合わせた絵画表現の可能性を研究。イタリアでの創作活動などを経て、1993年に本学美術学部美術科油画専攻教員に着任。2018年度から本学美術学部長。2019年4月から現職。2020年度尼崎市民芸術賞、2021年度亀高文子記念―赤艸社賞。

©REETING

京都市立芸術大学
大学案内
2024-2025

学長挨拶 …… 02
卒業生インタビュー …… 04
在学生インタビュー …… 10
客員教授／特別授業 …… 12
客員教授一覧 …… 13
専任教員一覧 …… 14

幸野楳嶺像

美術学部 …… 15
美術科
日本画専攻 …… 22
油画専攻 …… 24
彫刻専攻 …… 26
版画専攻 …… 28
構想設計専攻 …… 30
デザイン科
総合デザイン専攻 …… 32
デザインＢ専攻 …… 34
工芸科
陶磁器専攻 …… 36
漆工専攻 …… 38
染織専攻 …… 40
総合芸術学科
総合芸術学専攻 …… 42

大学院 美術研究科
修士課程 …… 44
博士（後期）課程 …… 45

作品展 …… 46

音楽学部 …… 47
音楽学科
作曲専攻 …… 52
指揮専攻 …… 54
ピアノ専攻 …… 56
弦楽専攻 …… 58
管・打楽専攻 …… 60
声楽専攻 …… 62
音楽学専攻 …… 64

大学院 音楽研究科
修士課程／博士（後期）課程 …… 66

定期演奏会 …… 67

全学部・大学院共通
教職課程 …… 68

研究センター …… 69
日本伝統音楽研究センター …… 70
芸術資源研究センター …… 72

大学情報
大学施設 …… 74
国際交流 …… 76
キャリアデザインセンター …… 78
社会連携事業 …… 80
学生生活 …… 82
歴史・沿革 …… 84
教育・研究理念 …… 85
教育方針 …… 86
入試情報 …… 88
進路一覧 …… 90
学費・奨学金 …… 92
本学へのアクセス …… 96

本学ウェブサイトでは、50件を超える
これまでの卒業生インタビュー記事の
長編バージョンをご覧いただけます！
https://www.kcua.ac.jp/

CONTENTS

INTERVIEW WITH GRADUATES 1

在学生による
卒業生
インタビュー

映像作家/株式会社ギャラクシーオブテラー代表取締役
合田 健二（ごうだ けんじ）さん

PROFILE

合田 健二 ｜ GODA Kenji

京都市出身。1996年京都市立芸術大学美術研究科修士課程絵画専攻（造形構想）修了。映像作家として作品を制作するとともに、映像制作プロダクション株式会社ギャラクシーオブテラーの代表取締役として、広告映像やエンタテインメントコンテンツ、博物館コンテンツなど幅広い分野の映像の企画・制作を行う。大学院時に制作した短編作品『PERSPECTIVE OF POWER』（豊永政史と共同監督）が、トランスメディアーレ98（ドイツ・ベルリン）ビデオ部門グランプリ受賞、第43回オーバーハウゼン国際短編映画祭（ドイツ・オーバーハウゼン）州都市開発文化スポーツ省賞（準グランプリ相当賞）など、国内外で多数の賞を受賞。その後、脚本・編集・監督を務めた長編映画『アナライフ』が劇場公開、ロッテルダム映画祭（オランダ）など世界各国の映画祭で招待上映される。

インタビュアー
林 ののこさん（左）
山本 絢さん（右）
（構想設計専攻3回生 ＊取材当時）

取材日・場所
2024年1月16日
株式会社ギャラクシーオブテラーにて

映画監督を夢見て

幼少期はどのようなお子さんでしたか？
絵が好きでよく描いていました。オリジナリティがあるものというよりも、マンガや景色、車などの模写がメインでしたね。それと、小学校４年生くらいから映画を好きになり、特に洋画を積極的に観に行きました。

京都芸大を受験しようと思ったきっかけは何だったんでしょうか？
中学校、高校の頃は部活で映画を作ったりバンドをやったりしていましたが、高２の頃に真剣に進路を考え始めて、やっぱり映画を作りたいと思ったんです。映画関係の仕事をするなら、日大の映画学科や映画の専門学校などに行くのが一般的ですが、その頃、ナム・ジュン・パイクなどのビデオ・アートが脚光を浴びたり、CGの技術の進化も話題になっていたので、アート表現全般を学んだ方が将来的な可能性があるのではないかと思い、京都育ちであることもあって、公立大学の京都芸大を第一志望にしました。

映画監督になることをその時点で思い描いておられたんですね。
自分の映画を撮って、世界中の人に観てもらいたいというのが漠然とした夢でしたね。

実際に入学されて、大学の印象はどうでしたか？
自由な校風に驚きましたね。基本的には自分のやりたいことをやればよい雰囲気でした。でも逆に言うと、ぼーっとしていたら時間が無駄になってしまうので、自分で積極的に動くことを意識するようになりましたし、やる気のある学生には、先生方のフォローも手厚かったと思います。

大学で学んだ映像表現

大学ではどのように過ごされましたか？
学部時代は、大学のほぼ目の前に部屋を借りていたせいでよく友だちが来て、飲み会などをして、いろんな話をしていました。今やっている会社も、極端に言えば気の合うみんなで集まってワイワイやるというノリで、当時の延長のような気がします。一番印象に残っているのは、４回生のときにMacのコンピューターが大学に入ったことですね。制作のためにコンピューターを使うのは初めてだったんですが、特に興味深かったのは、画像の合成ができることでした。寝る間を惜しんで、大学でフォトコラージュを作っていました。

学生時代には、どんなことを考えて制作されていましたか？
少し恥ずかしい話ですが、自分には良い作品が作れるという根拠のない自信はあったんですよ。でも、実際には何もできていないし、まだ何者でもない、という葛藤のようなものがずっとありました。４回生になってコンピューターを触ったときに、もしかしたらこのツールを使えば自分の頭の中にあるものが具現化できるんじゃないかと思ったんです。

大学院２回生時（1995年）に制作した『PERSPECTIVE OF POWER』のビジュアル

在学中、教員や友人はどのような存在でしたか？
担当教員に「映像表現をするからには、彫刻や絵画に負けないものが画面に映っていないといけない」と言われたことを覚えています。極端なことを言えば、カメラの録画ボタンさえ押せばだれでも映像を作ることができる、つまり、手を抜こうと思ったらいくらでも抜ける表現でもあるからこそ、「手を抜くな」ということをそのとき言われたような気がしたんですね。だから、教育や発表の場などが確立された絵画や彫刻などのアートに対抗するための「価値」を創り上げることを強く意識して、これまで実践してきたつもりです。
学生時代、夜な夜な語り合ったり情報交換した友人たちは、ある意味で京都芸大に行って得た一番の財産だと思っていますし、その後の人格形成にも大きな影響を与えたと思います。今の会社にも、その頃の同級生の友人が役員や経理担当として在籍しています。

修士課程に進まれた理由は何でしょうか？
４回生からコンピューターを触りだして自分がやりたいことの方向性と表現方法が見えた気がしたんですが、学部で残された１年では時間が足りなかった。だから修士課程に進もうと思いました。修士の２回生の時にデジタルムービーの短編作品を友人と共に制作して、それが国内外の映画祭やアートコンペで賞をいただき、今後も映像をやっていこうという意志が固まりました。

『PERSPECTIVE OF POWER』がオーバーハウゼン国際短編映画祭で受賞したとき、会場で撮った写真

映画制作と会社設立

大学院修了後、これまでの活動状況をお聞かせください。
大学院を修了して、しばらくは大学や専門学校で非常勤講師をやりながら、大学院の時に撮った短編映像を膨らます形で、長編映画の構想を練りました。脚本が完成し、撮影も行ったのですが、その頃ウェブサイト制作や映像ディレクションの仕事をいただくようになり、そちらが忙しくなって、映画の仕上げがなかなかできない状況が続きました。
一方で、それらの仕事で3DCGデザイナーの友人とたくさん出会えたんです。そこで、自宅とは別に部屋を借り、3DCGデザイナーの友人たちと一緒に作業ができる環境を整えました。
作りかけの長編映画は、５年ほどほったらかしになっていたんですが、何とか『アナライフ』という作品に仕上げました。2005年に運よく劇場公開が決まったうえに多数の海外映画祭に出品され、DVDも発売されました。作品が縁になって、さらに作業場をシェアする3DCGデザイナーの友人も増え、仕事も増えていき2010年には、集まったメンバーで会社を作ったんです。

特に印象に残っている仕事はありますか。
大学の先輩であり、友人でもある石橋義正さん（美術学部構想設計専攻教授）が監督した『ミロクローゼ』で商業映画のVFX※に深く関わったことですね。いわゆる「映画業界」のことを、今まで以上にいろいろと経験することができましたし、有名な俳優が出演し、全国公開される商業映画のメインVFXに会社になるという貴重な経験が得られたのは、大学時代に石橋さんと知り合い、友人になったことが大きいと思います。
もうひとつは、SWERYという友人のゲームディレクターと共同で脚本を書いた『レッドシーズプロファイル』というゲームの仕事です。カルトゲームとして世界中で話題になり、ギネスブックに「最も評価の割れたサバイバルホラーゲーム」として登録されました。

昨年公開された、石橋監督の映画『唄う六人の女』での仕事についてお聞かせください。
『ミロクローゼ』から10年経って、石橋さんの表現したい内容にも変化があり、派手なCGはあまりなく、CGをCGと気づかせない技術が必要になったんですが、非常にハードルが高く、かつ、やりがいのある仕事でしたね。うちの会社の3DCGデザイナーも海外に出向してハリウッド映画の大作を多数経験してきたので、そのノウハウをいろいろと生かすことができました。

今後の活動や目標をお聞かせください。
さらに安定した経営基盤を作り、同時に社員にとってやりがいのある仕事ができる会社にしたいと思っています。それから、今だからこそできる作品、例えば技術の面ではハリウッドレベルで、内容は実験的な作品を短編でもいいので制作したいと思っています。その後、会社にさらに体力がついたら、長編かシリーズ物の商業作品を手掛けたいですね。

技術よりも思いや意識を大切に

京都芸大を目指す受験生に向けたメッセージをお願いします。
自分が受験生だった頃を思い出すと、「大学に合格するための技術を身に付けたい」とだけ考えていたときには、なかなか上達しなかったように思います。でも、浪人時代にある映画を観て非常に感銘を受け、その映画がずっと頭の中に残っていて、その状態でデッサンや色彩構成などをすると、なぜかいい感じに仕上げられるようになったんです。受験とはいえ「表現」なわけですから、根源的なモチベーションをしっかり持たないと上達しないんですよね。もちろん技術の勉強は必要ですが、それに加えて将来何を作りたいかをしっかりと意識して、受験勉強中であってもできる限りいい作品を観て、自分のモチベーションを上げていくことが重要なんじゃないでしょうか。

時々受験生から、アニメーションやCGの技術を学べるかという質問が寄せられます。本学では特定の技術を掘り下げるというより、広く学ぶことによって、自分のベースを作ることを重視しているように感じます。
作品を作るにあたっては、広い視野を持ち独自のビジョンを描けることの方が大切だと思います。今の時代、技術は独学でも勉強できますし、必要なら技術を持った人に手伝って貰えばいいわけですから。

在学生へのメッセージをお願いします。
京都芸大の規模感や自由な雰囲気、学生と教員同士の適度な距離感には、他大学にはない独特の気持ちよさがあると思います。思い返すと、人生で一番心地よい日々を送れたのが大学にいたときだったような気がします。将来のことなどいろいろ悩みもあるでしょうが、「京都芸大生である今」を大切にして、日々を噛み締めながら学生生活を送ってもらえたらと思います。そうすれば自ずと将来への道も開かれていくのではないでしょうか。

大学時代にMacに触れたことが大きかったというお話でしたが、今は生成AIがそれにあたるのかもしれません。生成AIについてはどう感じておられますか。
僕が思うのは、生成AIをはじめ、どんな便利なツールを使うにせよ、作り手である自分の芯がしっかりとあることが大切だということです。技術はどんどんアップデートされていくので、まさに永久に続く追いかけっこのようなものです。そんな中、例えば、自分が本当に気持ちいいと思えるものを人に伝えたいという欲求を強く持つとか、自分が語りたい「物語」を持つとか、何かを表現する人間としてプリミティブな部分を大切にしないと、本当に技術の奴隷のような人間になってしまうのではないかと感じています。

※VISUAL EFFECTSの略。映像作品において、CGによる合成など、現実にはあり得ない特殊な効果を作り出す技術

INTERVIEW 2

WITH GRADUATES

在学生による
卒業生
インタビュー

日本画家
村山 春菜（むらやま はるな）さん

PROFILE

村山 春菜 ｜ MURAYAMA Haruna

2009年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻（日本画）修了。日影圭氏に師事。2019年「ドキドキフォルダー」（日本橋三越）、2022年「ぐろーばる☆わーるど」（同時代ギャラリー）など精力的に個展を開催。2008年「第40回日展」初入選を皮切りに、2009年「第41回日展」特選、2013年「京展」京都市美術館賞80周年記念特別賞、2014年「京都府美術工芸新鋭展」読売新聞社賞、2016年「改組 新 第3回日展」京都新聞社賞、2017年「第1回新日春展」日春賞、2021年「第8回日展」特選、2023年京都府文化賞奨励賞、京都市芸術新人賞、2024年「第9回東山魁夷記念日経日本画大賞」大賞など、受賞多数。

インタビュアー
森川 深雪さん（左）
藤原 華豊さん（右）
（日本画専攻3回生 ＊取材当時）

取材日・場所
2023年12月8日
本学にて

母に勧められて京都芸大へ

幼少期はどのようなお子さんでしたか？
幼少期から絵が好きでした。当時人気だったキャラクターを友だちに描いてあげて、それを喜んでくれたり、上手だと言われて嬉しかったりしたのが、小さな出発点だったという気がしますね。

京都芸大を受験しようと思ったきっかけは何だったんでしょうか？
関西の出身ですが、元々は特に京都芸大を志望していたわけではありませんでした。でも母から「関西にある芸術系の公立大学だし、どうせだったら目指してみたらどう？」って言われて、じゃあ目指してみようかな、という感じでした。

お母様の後押しが大きかったんですね。
そうです。絵を描くのは好きでしたが、芸術系の大学に入りたかったわけではなく、画家になりたいと思ったこともなかったんですよね。小さな絵画教室に通っていたので、そこで時々デッサンを教えてもらっていましたが、将来のことは自分の中ですごくふわっとしていました。でも、母から「どうせ目指すなら関西で一番難しい大学」と言われて、「なるほど」と思いました。ほかにそれほど好きなものがなかったせいで進路に迷うことがなかったのが、逆によかったのかもしれないですね。

それと、高3の夏休みに京都芸大で3日間ほど上村淳之先生（日本画家・本学名誉教授）にデッサンや着彩を見ていただける機会があったんです。そのとき、先生はきっと軽い気持ちで仰ったんだと思いますが、「来年会えたらいいね」って言われたんですよ。それで、「じゃあ絶対会ってやろう」と思ったことも受験の後押しになったのかもしれないですね。

スタイルを模索した学生時代

大学生活をどのように過ごされましたか？
こんなことを言うとよくないんですが、学部時代はほぼサボって遊んでしまっていました（笑）。日本画はすごく奥深くて、3回生の終わりか4回生になった頃に、このままだと日本画のことを何も分からないまま卒業してしまうと思って焦りだしたんです。それで火がついて、大学院に行こうと思って、3回生までで描いた3倍くらいの枚数を1年で描きました。それまでは本当に描いてなくて、ポートフォリオに載せる絵が全然なかったんです。

小池一範准教授（当時）の点前を受ける（大学院時代）

俯瞰で見た建物の絵を描いておられますが、その頃から似た雰囲気の作品を描いておられたんでしょうか？
ああいう作風になったのは修士2回生の夏くらいです。だから修士課程も終わりが見えかけていたんですよね。そのときもやばいと思って焦っていました。

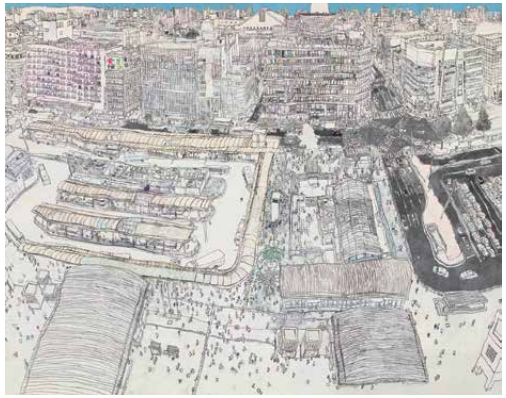
どういう過程を経て、あの作風になったんでしょうか？
たまたま東京に遊びに行って、高い建物の展望台に上がったときに俯瞰で見た都市が本当に面白いなと思ったんです。私たちの住んでいる街だけれども、上から見ると全然見え方が違うし、明かりの分だけ知らない人の生活があって、車のライトが移動するのが見えて、生きているな、街が躍動しているなって感じたんですね。それで、これを描くとして、どうやったら画面からこのドキドキやときめきが伝わるんだろうかということを考え始めました。四角や直線で構成される建物を普通に描いたら冷たい印象を与えるものになったんですが、いろいろ試行錯誤する中で、利き手ではない左手で描いてみたらうねうねした線を出しやすく、自分の制御できない線が描けて、「あれ、ちょっと近いかも」と思って楽しくなり始めました。右手だったら意思が入りますが、左手で描いたら意思が入り切らないんです。自分が制御しきれない線で描いた街は、自分が表現できる範囲をちょっと超えたような気がしましたし、自分の感じたドキドキやときめきを表現したものに近いような気がしたんですね。今のスタイルは、そこからずっと続いています。

在学当時、友人や同級生はどのような存在でしたか？
大学に入学したとき、同級生はみんな上手に見えました。銅駝美工（現京都市立美術工芸高校）を卒業した人もいて、すでに日本画の扱いが上手な人もいたし、みんな写生力が高くて、いつも引け目に感じていましたね。でも、周りを見て、「なんで自分はこんなに下手くそなんだろう」と思うことは絶対に必要だと思います。そういう意味ではよかったなと思いますね。

昔のゼミはどんな感じだったんでしょうか？
自分から先生に見てもらいに行かないと見てもらえませんでした。先生方から何か奪いたいというか、獲得したいという思いでいましたね。学部のときは、日本画を始めてせいぜい3〜4年といったところですが、先生方は何十年もやられているので、経験値が違うわけですよね。だから、学生はどんどん先生に聞いて、盗んでいかないといけないと思います。

大作に挑戦する

日本画家として活動していくことを決意されたのはいつですか。
大学院でゼミを担当していただいた日影先生に、「修了してからも絵を描く気はあるか」って言われたんです。そんなことを言われたら「特に描く気はないです」とは言えなくて、「はい、描きます」って言ったんですよ。そう言ってしまったら、言葉の呪いを自分にかけたというか、「言っちゃったし、描かなあかんわ」と思って、本当にもうその一言がきっかけだったと思います。


《記録：kyoto》2014年制作

これまでで印象に残っている仕事についてお聞かせください。
やっぱり大作を描いたことですね。最初に150号以上のサイズで描いたときは、横が5mほどあって、描いても描いても終わらない気がしました。描き上げたときにはとても感動したし、すごく心に残っています。小さいサイズの絵を描くときとはやっていることが180度違うというか、別のことをしているような感覚で、チャレンジしてみてよかったと思いました。

大きい作品は高いところから描いて、小さい作品は近いところから描くというようなことはありますか？
そうですね、対象が大きければ大きな絵が描けます。例えば、最近の個展に出した作品ですが、海沿いにあるような生コンの大きい工場を描いたんですよ。実際に行ってみたらあまりに巨大なので、100mずつくらい移動しながら全体を描きました。でも、それほど巨大なモチーフを4号のサイズで描いたら「すごい！デカい！」みたいな感覚が出ないですよね。例えば、キリンを描くときに20mくらいの見上げるサイズで描けたら楽しそうじゃないですか。見る方も楽しいと思うんですよ。

大学時代に培ったことで、今に生きていることはありますか？
大学の課題で地面を描かされたとき、最初は地面を描くことに意味はあるのかと思いましたが、いざしっかり観察してみたら、いろんな質感があって面白いし、別に何を描いてもいいんだと思いました。多分、私たちには思い込みがあって、日本画とはこういうものだとか、こういうものは絵になって、こういうものは絵にならないとか、そういった固定観念のようなものが邪魔をするんですが、そこから何を描いたっていいんだと思うようになりましたね。

《コンクリート城ランドマップ》2022年制作

好きなことは否定しない

京都芸大を目指す受験生に向けたメッセージをお願いします。
受験のときは不合格になっても仕方ないと思えるくらい頑張ったと自分では思っていますが、そういう風に思えると楽でしたね。だから、不合格の場合はどうしようとか考えていませんでした。中途半端にやってだめだったら、もやもやした気持ちを抱えていたかもしれません。だから、落ちても仕方ないと思えるくらいまで自分なりに必死になってみることが大切ではないかと思います。

在学生へのメッセージをお願いします。
自分の好きなことを否定しないでほしいですね。「こんなものを好きでもどうしようもない」と思うことがあるかもしれませんが、何かを好きになることはひとつの才能だと思っています。だから、好きなことに時間をかければいいし、好きなものを描けばいいんです。例えば日本画らしさという固定観念のようなものや、女性らしさという呪いのようなものは、すべて取り払うことは難しいかもしれませんが、何かを好きなことを否定しなくてもいいということは頭の片隅に置いておいてもらいたいです。絵に関係のないことでもそうです。本当に何かを好きだったら、それを貫き通してほしいと思います。

INTERVIEW 3

GRADUATES

在学生による
卒業生
インタビュー

京都コンサートホール
プロデューサー
高野 裕子（たかの ゆうこ）さん

PROFILE

高野 裕子 ｜ TAKANO Yuko

京都市出身。京都市立音楽高等学校（現京都市立京都堀川音楽高等学校）、京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業後、同大学大学院音楽研究科修士課程、博士（後期）課程を修了。博士（音楽学）。2009～13年フランス政府給費留学生およびロームミュージックファンデーション奨学生としてトゥール大学大学院博士課程・トゥール地方音楽院古楽科第３課程に留学。2017年４月より京都コンサートホールに勤務し、現在 京都コンサートホールプロデューサーおよび事業企画課長。

インタビュアー
前田 依泉さん（左）
小峯 羽叶さん（右）
（音楽学専攻2回生 ＊取材当時）

取材日・場所
2024年1月15日
京都コンサートホールにて

音楽の才能を見抜いた母

幼い頃から音楽に親しみがあったのでしょうか？

３歳からピアノを習い始めました。そこが音楽人生のスタートだったと思います。

どうしてピアノを習い始めたのでしょうか？ご両親に音楽の経験があったのでしょうか？

父も母も音楽とは無縁の人です。母が言うには、私はテレビから流れてくるBGMの主旋律でなくバックコーラスをずっと聴いていたらしく、きっとこの子は耳がいいんだ、と気づいてピアノをやらせてくれたみたいです。

そこで音楽を習わせてくれたお母様、素晴らしいですね。

目の付け所がいいですよね。子どもの才能がどこにあるのかを注意深く見ていたんじゃないでしょうか。

京都芸大を受験しようと思ったきっかけはありますか？

高校の隣に京都芸大がありました。近いところに日本屈指の芸術大学があるのに、わざわざ遠くの大学に行くことはないかなと思ったんです。大きなきっかけがあったわけではなく、必然でしたね。

入学前に思い描いていた大学生像はありますか？

とにかく隣の京都芸大生が自由にキャンパスライフを謳歌していて、私もそんな風に楽しめるだろうと思っていました。美術学部もあるので、自分の視野が広がるかもしれないと期待もありました。

４年間真剣にピアノに向き合って

実際に入学してみて、想像どおりの大学でしたか？

はい。のびのびと自由な雰囲気でしたね。芸大祭で友達と一緒にコンサートに出演したり、実技試験の後にみんなで打ち上げをしたり、充実したキャンパスライフを送っていました。けれど、ずっと楽しかったかと言われたらそうではなくて、もちろん苦悩もありました。

柿沼ゼミのパーティー（右から２人目）（2013年）

学部時代はアルバイトなどもせず、ほとんどの時間を授業やレッスン、ピアノの練習に充て、真剣にピアノに向き合った４年間を過ごしました。そこで「私、人前でピアノ弾くの好きじゃないな」って気づいたんです。練習やリハーサルではうまく弾けるのに、いざ本番になってステージに上がると、我を失うくらい緊張してしまって。おそらく自分の実力以上のものを求めてしまって、固くなってしまったのだと思います。結局自分の実力も出し切れず、本番でうまく弾けないことが続き、コンクールでも大失敗して、もう辞めようと思いましたね。

パリ留学時代（2010年）

それでも、音楽を辞めようという気にはならなかったんですね。

音楽が好きすぎて、離れられないことをわかっていました。ピアノは自分に向いていないと思う一方、３歳から続けているわけですし、当時は相当悩みましたね。悩みすぎたせいか、ある時のピアノ専攻のコンパで、お酒に弱いくせに飲みすぎてひどく酔いつぶれてしまい、周りの友達に迷惑をかけてしまったこともありました。

周りの友人や同級生はどんな存在でしたか？

すごく大きな存在でしたね。同志でもあり、ライバルでもあり。たくさん助けられたり、刺激を受けたりしていました。

ピアノ専攻から音楽学専攻へ

悩んだ末にピアノは辞めて、修士課程から音楽学を専攻されたのですね。

はい。当時音楽学専攻におられた柿沼敏江先生との出会いが大きなきっかけでした。先生の「西洋音楽史」の授業がとても好きで、単位は取得していたのですが４年間毎年受講しました。柿沼先生はアメリカの現代音楽の研究をしていらっしゃって、音楽評論家としてもすごく活躍されていました。私も先生のような研究者になりたいと思ったのです。

音楽学専攻ではどのような研究を？

ピアノの知識や経験を生かした内容の研究がしたかったのと、フランスの古い時代の音楽が好きだったので、17〜18世紀のフランス鍵盤音楽、特にクラヴサン（チェンバロ）に関する研究をしていました。修士課程２年目でようやく自分のやりたいことがくっきりと浮かび上がってきて、その一部を修士論文にしました。その残りは博士課程で極めようと思い、研究に没頭しました。博士課程３年目でフランスに留学もして、本当に濃い学生生活でした。

大学院を修了された後はどのように過ごされていたのでしょうか？

修了後は青山音楽記念館バロックザール※の主催公演のプロデュースを任されたり、京都芸大の非常勤研究員を務めたり、どんなことでもクオリティの高い仕事をしようと意識して、いろんなことに取り組んでいました。その後、大学の非常勤講師の職を得て、授業を担当しながら論文も書いていました。週４日のバロックザールの仕事に加え、３つの大学で５コマの授業を持っていたので、ほとんど一週間働き詰めだったと思います（笑）。

ただひたすら音楽が好きな思いで突き進んでいましたが、研究をしながらプロデュース業もする中で、あるときから自分にはどっちが向いているんだろうと天秤にかけ始めました。柿沼先生のような研究者になりたいという気持ちもありましたが、自分は音楽をプロデュースする方が向いていると気づいたことで、音楽マネジメントをやっていく方向に舵を切りました。

※公益財団法人青山音楽財団が運営する音楽ホール

現職である京都コンサートホールのプロデューサーになられたきっかけを教えてください。

バロックザールは音響が素晴らしいホールで、コンサートを作るのはすごく楽しかったのですが、200席の小規模なホールではできることが限られているように次第に感じ始めました。例えば、オーケストラやパイプオルガンといった、大きなホールでしかできない仕事をしてみたかったのです。それと同時に、私は幼い頃からずっと京都で音楽を学んできましたので、生意気ですが「自分の学んできたものを京都のクラシック音楽界に還元しながら、自分の手で発展させていきたい」とも思っていました。ちょうどそのタイミングで「京都コンサートホールで働いてみないか」とお声がけいただき、ずいぶんと悩みましたが、思い切って自分を求めてくれる場所に身を委ねてみました。

今までで印象に残っているお仕事は？

私のコンサートホールでのデビュー企画は「スペシャル・シリーズ　《光と色彩の作曲家　クロード・ドビュッシー》」でした。ドビュッシー没後100年の年に、段階的に彼の音楽を知ることができるよう、全3回のシリーズで構成しました。音楽以外にもさまざまな工夫を施しました。例えば、京都のベーカリーである進々堂さんとコラボして、３回それぞれの演奏会のイメージに合ったお菓子を作っていただき、来場者全員に配ったり、府立図書館で自ら講師として出張レクチャーを行ったり、演奏会のプログラムもすべて自分で書きました。入社当初からずっと温めてきた企画でしたし、チケットも完売し、特に思い出に残っています。あとは2023年４月から開催している「Kyoto Music Caravan 2023」ですね。京都芸大のキャンパス移転と文化庁の京都への移転を記念して、京都芸大ゆかりの演奏家に出演してもらい、京都市内11区の名所でコンサート行う企画です。それぞれの会場に合う楽器の編成を考えなければならないなど、調整がかなり大変でした。今年の3月にはファイナルコンサートとして、京都芸大の堀場信吉記念ホールで、市内でクラシック音楽を学ぶ子どもや青少年が一堂に会する公演を控えており、そちらも今からとても楽しみです。

京都コンサートホール事業企画チーム（前列中央）（2024年）

コンサートホールではないところでも演奏会をするのが新しくていいなと思います。

そうですよね。クラシックが好きな方はホールに足を運んでくださるけれど、こちらがホールを飛び出せば通りすがりの普段クラシックを聴かない方にも耳を傾けていただけます。

ホールに来ていただけるきっかけになれば嬉しいですね。

ほかのホールでは聴けないような演奏会を

演奏会を企画する上で意識されていることはありますか？

近年、国際的なコンクールなどで日本人が活躍するシーンが増えた影響で、それまであまりクラシック音楽とは縁のなかった方々にもコンサートに来ていただけるようになりました。もちろんメディアで宣伝されるような有名アーティストのコンサートも素敵ですが、私たちの近くにも素晴らしい音楽家がたくさんいるということをお客さまに伝えられるような演奏会を開催したいです。特に、京都の公共ホールとしては、地元で活動している演奏家や若手音楽家をどんどん紹介し、京都ならではのコンサートを今後も継続して開催していきたいと考えています。

今後の夢や展望はありますか？

やっぱり、京都をクラシック音楽に満ちた街にしたいですね。音楽の都と呼ばれるようなウィーンやパリのような街にできたらという思いがあります。その第一歩として、世界に自慢できるような音楽祭を開催するのが夢です。

京都と音楽に対する愛がすごく伝わってきました。最後に京都芸大を目指す受験生や在学生へ向けたメッセージをお願いします。

私自身、学生時代にうまくできなかったのですが、音楽だけの人間にならないように、時には思い切り遊びに出かけて自分の視野を広げてください。いろんな経験を重ねた方が、音楽に深みが出ると思います。それから、常に夢と目標を持ってください。目標はいくつかの段階に分けて設定することが大切で、時々振り返って、自分が今どこまで達成できているか、どうやったら夢に近づけるかを定期的に確認してください。たとえ夢を実現できなくても、その過程でがむしゃらに頑張っていれば、必ずどこかで誰かがその姿を見てくれていますし、自然と道が拓けるはずです。

在学生インタビュー
INTERVIEW WITH CURRENT STUDENTS

取材日：2023年12月15日

美術学部
彫刻専攻3回生
柏木春菜（かしわぎ はるな）さん

京都芸大を目指した理由は何ですか？

独自の視点から世の中を眺めている人がたくさん集まるんじゃないかなと思って。そういう人たちに出会いたくて目指しました。

なぜ彫刻専攻を選んだのですか？

彫刻専攻は、いわゆるアカデミックな彫刻の素材や技法(塑像、木彫など)をひと通り扱った後は、なんでも好きなもの使って創作できます。その分、その素材を選ぶ理由やコンセプトを問われますが、表現ということについてすごく根本的なことを考えたり、思考を鍛えることができます。

京都芸大の学風についてどう思いますか？

真面目な子が多いなという印象。それが作品に反映されていて、お互いに考えていることを話したり聞いたりするのが楽しいです。

京都芸大の教員はどのような存在ですか？

学生の考えた取り組みに一緒になって楽しんでくれて、後押ししてくれる先生が多いです。パワフルで学生より元気だなと思うこともあります。

大学の友人・同級生等はどのような存在ですか？

悩んでいたら話を聞いてくれたり、遊びに行ったり、集まる会を企画したり…いろんなことを一緒にしてくれます。

インドネシアの民族音楽のガムランを動かしながら演奏する「モバイルガムラン」の活動にも参加。第31回東九条マダン（2023年11月）にて

今、好きなことはできていますか？

物事への関心の的が広いので、時間が足りないなと思いながら過ごしています。

現在、どのような制作に取り組んでいますか？

周囲からのイメージを通して、自分の中で視覚的に想起される「私のイメージ」と、それを実際に行動にしたときに感じる感覚の違いをどのように表現できるかを模索しています。

例えば「隙間を通る」ということ。自分の中の自分のイメージは思っているより軽やかに映りますが、実際には質量を持った物質なんだということを、いろんな感覚を通して感じることができます。その違いを表現しようと模索中です。

気分転換の方法は何ですか？

ストレッチです。運動する前に筋肉をほぐしておいたら少し気持ちが軽くなったり、動かした後に痛みが少ないとか、見えない体の中を感じることができるので、会話しているみたいで楽しいです。やりすぎて逆に痛めることもあるのですが。

新キャンパスでの授業や制作環境はどうですか？

移転してから学部生も院生も一つの大部屋になり、よりコミュニケーションを取りやすくなったような気がします。

京都駅ビル芸術祭（2023年11月）でのパフォーマンスの様子

授業や制作以外の時間はどのように過ごしていますか？

アルバイトもしていますが、いろんな公演や美術館、ギャラリーでの展示を観に行くようにしています。

将来の目標などについて教えてください。

これから先もいろんな人や物と出会って、自分の知らない世界を体験したいです。いろんな体験の中から振り返って自分が感じることを作品にしていきたいと思っています。

在学生インタビュー
INTERVIEW WITH CURRENT STUDENTS

取材日：2023年12月15日

音楽学部
管・打楽専攻3回生
澤田和華（さわだ のどか）さん

京都芸大を目指した理由は何ですか？

吹奏楽部に所属していた高校生時代、顧問の先生が京都芸大出身で、在学時の面白いお話や経験談などを聞く機会が多かったので、もっと音楽を専門的に学んでうまくなりたいという気持ちが芽生え、志望校として興味を持つようになりました。

京都芸大の学風についてどう思いますか？

学生数が少なく、アットホームで温かい雰囲気。これは京都芸大の魅力の一つだと思います。

好きな授業、印象深い授業について教えてください。

オーケストラと管・打楽合奏。
吹奏楽にしか触れてこなかったので、入学して初めてオーケストラの中で演奏をしたときは感動しました。管・打楽合奏の授業では、吹奏楽や金管アンサンブル、オーケストラスタディなど幅広く、毎週新しい曲に取り組みます。多くの曲を研究でき、毎回新しい学びがあり、とても楽しいです。

京都芸大の教員はどのような存在ですか？

すごく親切で、信頼しています。悩んでいることがあれば、演奏面だけでなく、学生生活での悩みなども親身になって話を聞いてくださいます。

早坂宏明非常勤講師による
マンツーマンレッスンの様子

大学の友人・同級生等はどのような存在ですか？

努力家ばかりで、お互いを高め合える存在。とても刺激になっています。落ち込んでしまうときやネガティブになってしまうときでも、励まし合える仲間がいてとても心強いです。

現在、どのような作品に取り組んでいますか？

後期の実技試験で演奏する曲や、ベートーヴェンの交響曲、プッチーニの『ラ・ボエーム』などです。

新キャンパスでの授業やレッスン、練習はどうですか？

練習室が増え、より練習に取り組みやすくなったように感じています。

大学の最寄り駅・京都駅周辺は
飲食店がたくさん！

授業や練習以外の時間はどのように過ごしていますか？

早朝にアルバイトをしています。ほかは大学にいることがほとんど。練習の合間に友人と話したり、学校近辺を散歩したりして気分転換をしています。食べることが大好きなので、休日に美味しいものを食べに出かけたりもします。

今、好きなことはできていますか？

はい。辛いこともありますが、励まし合える友人や尊敬する先生や先輩方がいる環境の中で、音楽に取り組めていることを幸せに思います。

将来の目標などについて教えてください。

プロのオーケストラ奏者になること。今はまだ合奏や本番のたびに緊張してしまいますが、いつか自分の伝えたいことが伝わるような音楽をしたいです。

GUEST PROFESSORS & SPECIAL LESSONS

客員教授 / 特別授業

総勢30名の客員教授ほか特別講師による授業

01
能楽金剛流26世宗家の金剛永謹客員教授が、本学のキャンパス移転を記念して堀場信吉記念ホールで上演された「祝賀能〈翁〉付〈高砂〉」に出演しました。祝賀には欠かせない能楽の「翁」「高砂」が、江戸時代に幕府、宮中そして本願寺でのみ行われていた特別な演出により上演され、多くのお客様にご来場いただきました。(2024年5月3日)

02
美術学部「教職実践演習」の授業において、東良雅人客員教授による特別講義を実施しました。教職課程(P68)を履修する美術学部の学生に対し、「これからの美術の授業づくり」と題し、中学校美術科の授業におけるコンピテンシーベース(知識・技能を活用するための思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度などの資質・能力を身につけることを重視)を起点とした指導と評価の重要性について講義していただきました。(2023年11月9日)

03
美術学部テーマ演習(P.19)「写真について」の授業において、筑波大学准教授でメディアアーティストの落合陽一客員教授による特別講義を実施し「今日の非物質的な(質量のない)イメージとしての写真」について、ご自身の作品を織り込みながらお話しいただきました。(2023年7月20日)

04
世界的なピアニストであるアレクセイ・グリニュク氏によるマスタークラスを実施しました。受講した音楽学部ピアノ専攻の学生9名一人ひとりに丁寧な演奏指導をしていただき、学生たちにとって大変貴重な機会となりました。(2023年6月7日)

05
美術学部デザインB専攻と陶磁器専攻の合同授業として、茶道家の木村宗慎客員教授による特別講義を実施しました。「京芸生が世界と戦うために必要なこと」をテーマに、侘び寂びやつしなど、日本社会が発達させてきた価値がどのように生まれたどんなものなのかについて、茶の湯を通して解説するだけでなく、そうした価値について、自分なりに言葉にしていくことの重要性が説明されました。(2023年6月5日)

客員教授一覧

大学で芸術を学ぶうえで、芸術分野はもちろん、その他の幅広い分野に関する素養を高めることが重要です。そのため本学では、世界を舞台に活躍するアーティスト・演奏家・研究者をはじめとする多彩な方々を授業にお招きしています。客員教授や特別講師から技術指導や研究への助言を受けたり、専攻を越えて開催される講演会に参加したりすることは、学生にとって視野を広げることができる貴重な機会となっています。

五十音順・敬称略

彬子女王
美術史学者

秋山 和慶
指揮者

安積 伸
プロダクトデザイナー

今藤 政太郎
長唄・三味線方

インゴマー・ライナー
音楽学者（歴史的演奏法研究）

大友 直人
指揮者

尾高 忠明
指揮者

落合 陽一
メディアアーティスト

木村 宗慎
茶道家

久能 祐子
社会起業家

金剛 永謹
能楽金剛流26世宗家

篠原 資明
美術評論家・詩人

須川 展也
サクソフォニスト

建畠 晢
美術評論家・詩人

時田 アリソン
音楽学者

富田 直秀
医療工学研究者・医師

中岡 司
文化庁機能強化特別アドバイザー

中坊 壮介
プロダクトデザイナー

中村 功
パーカッショニスト

パスカル・ドゥヴァイヨン
演奏家・教育者

ハンスイェルク・
シェレンベルガー
オーボエ奏者・指揮者

東良 雅人
元 文部科学省
初等中等教育局 視学官

広上 淳一
指揮者

外囿 祥一郎
ユーフォニアム奏者

森田 りえ子
日本画家

森村 泰昌
美術家

門内 輝行
建築家

山極 壽一
人類学・霊長類学研究者

ヤロスラフ・トゥーマ
オルガン・チェンバロ奏者

横山 幸雄
ピアニスト

FACULTY MEMBERS

専任教員一覧

美術学部/美術研究科

日本画専攻 P.22

教授	川嶋 渉	KAWASHIMA Wataru
教授	翟 建群	ZHAI Jianqun
准教授	奥村 美佳	OKUMURA Mika
准教授	小島 徳朗	KOJIMA Tokuro
准教授	正垣 雅子	SHOGAKI Masako
講師	谷内 春子	TANIUCHI Haruko
講師	三橋 卓	MITSUHASHI Taku

油画専攻 P.24

教授	渡辺 信明	WATANABE Nobuaki
教授	法貴 信也	HOKI Nobuya
教授	金田 勝一	KANEDA Shoichi
教授	伊藤 存	ITO Zon
准教授	谷澤 紗和子	TANIZAWA Sawako
講師	唐仁原 希	TOJINBARA Nozomi
特任教授	谷本 天志	TANIMOTO Takashi

彫刻専攻 P.26

教授	松井 紫朗	MATSUI Shiro
教授	小山田 徹	KOYAMADA Toru
教授	中原 浩大	NAKAHARA Kodai
教授	安藤 由佳子	ANDO Yukako
准教授	金氏 徹平	KANEUJI Teppei

版画専攻 P.28

教授	田中 栄子	TANAKA Eiko
教授	大西 伸明	ONISHI Nobuaki
教授	吉岡 俊直	YOSHIOKA Toshinao
講師	王 木易	WANG Muyi

構想設計専攻 P.30

教授	石橋 義正	ISHIBASHI Yoshimasa
教授	木村 友紀	KIMURA Yuki
准教授	田中 功起	TAKANA Koki
特任准教授	人長 果月	HITOOSA Kazuki

総合デザイン専攻 P.32

教授	滝口 洋子	TAKIGUCHI Yoko
教授	楠田 雅史	KUSUDA Masashi
教授	舟越 一郎	FUNAKOSHI Ichiro
教授	島田 陽	SHIMADA Yo
准教授	長谷川 江利子	HASEGAWA Eriko
特任講師	土井 亘	DOI Wataru

デザインB専攻 P.34

教授	髙井 節子	TAKAI Setsuko
准教授	牛田 裕也	USHIDA Yuya
講師	谷川 嘉浩	TANIGAWA Yoshihiro

陶磁器専攻 P.36

教授	森野 彰人	MORINO Akito
准教授	若杉 聖子	WAKASUGI Seiko
准教授	上田 順平	UEDA Junpei
講師	西條 茜	SAIJO Akane

漆工専攻 P.38

教授	栗本 夏樹	KURIMOTO Natsuki
教授	安井 友幸	YASUI Tomoyuki
教授	笹井 史恵	SASAI Fumie
准教授	大矢 一成	OYA Kazunari

染織専攻 P.40

教授	藤野 靖子	FUJINO Yasuko
教授	日下部 雅生	KUSAKABE Masao
准教授	藤井 良子	FUJII Ryoko
准教授	安藤 隆一郎	ANDO Ryuichiro
特任教授	上野 真知子	AGANO Machiko

総合芸術学専攻 P.42

教授	吉田 雅子	YOSHIDA Masako
教授	加須屋 明子	KASUYA Akiko
教授	田島 達也	TAJIMA Tatsuya
教授	礪波 恵昭	TONAMI Keisho
教授	飯田 真人	IIDA Masato
教授	畑中 英二	HATANAKA Eiji
教授	竹浪 遠	TAKENAMI Haruka
准教授	深谷 訓子	FUKAYA Michiko
准教授	砂山 太一	SUNAYAMA Taichi

保存修復専攻 P.44

教授	宇野 茂男	UNO Shigeo
教授	竹浪 遠	TAKENAMI Haruka
准教授	高林 弘実	TAKABAYASHI Hiromi

共通教育 P.19

教授	飯田 真人	IIDA Masato
教授	上 英俊	UE Hidetoshi
准教授	玉井 尚彦	TAMAI Naohiko
准教授	磯部 洋明	ISOBE Hiroaki
准教授	中村 翠	NAKAMURA Midori
准教授	堀田 千絵	HOTTA Chie
講師	戸澤 幸作	TOZAWA Kosaku
講師	村上 裕美	MURAKAMI Hiromi

音楽学部/音楽研究科

作曲専攻 P.52

教授	岡田 加津子	OKADA Kazuko
准教授	中村 典子	NAKAMURA Noriko
准教授	酒井 健治	SAKAI Kenji

指揮専攻 P.54

教授	阪 哲朗	BAN Tetsuro

ピアノ専攻 P.56

教授	砂原 悟	SUNAHARA Satoru
教授	上野 真	UENO Makoto
教授	三舩 優子	MIFUNE Yuko
准教授	田村 響	TAMURA Hibiki
講師	髙木 竜馬	TAKAGI Ryoma

弦楽専攻 P.58

教授	豊嶋 泰嗣	TOYOSHIMA Yasushi
准教授	戸上 眞里	TOGAMI Mari
准教授	上森 祥平	UWAMORI Shohei

管・打楽専攻 P.60

教授	村上 哲	MURAKAMI Satoshi
准教授	加瀬 孝宏	KASE Takahiro
講師	森本 瑞生	MORIMOTO Mizuki

声楽専攻 P.62

教授	久保 和範	KUBO Kazunori
准教授	北村 敏則	KITAMURA Toshinori
准教授	日紫喜 恵美	HISHIKI Emi
准教授	上野 洋子	UENO Yoko
特任教授	小濱 妙美	KOHAMA Taemi

音楽学専攻 P.64

教授	太田 峰夫	OTA Mineo
教授	川端 美都子	KAWABATA Mitsuko
教授	池上 健一郎	IKEGAMI Ken'ichiro
講師	正田 悠	SHODA Haruka

教職課程 P.68

教授	飯田 真人	IIDA Masato
准教授	堀田 千絵	HOTTA Chie
特任講師	清水 久莉子	SHIMIZU Kuriko

研究センター

日本伝統音楽研究センター P.70

所長	細川 周平	HOSOKAWA Shuhei
教授	藤田 隆則	FUJITA Takanori
教授	竹内 有一	TAKEUCHI Yuuichi
准教授	武内 恵美子	TAKENOUCHI Emiko
准教授	田鍬 智志	TAKUWA Satoshi
准教授	齋藤 桂	SAITO Kei

芸術資源研究センター P.72

所長	小山田 徹	KOYAMADA Toru
副所長	森野 彰人	MORINO Akito
	岡田 加津子	OKADA Kazuko
教授	佐藤 知久	SATO Tomohisa

＊ 客員教授一覧は P.13 をご覧ください。

教員情報の詳細はこちら
https://www.kcua.ac.jp/professors/

FACULTY OF FINE ARTS

美術学部

美術科	日本画
	油画
	彫刻
	版画
	構想設計
デザイン科	総合デザイン
	デザインB
工芸科	陶磁器
	漆工
	染織
総合芸術学科	総合芸術学

「京都市立絵画専門学校」
創立当時の実技授業風景
1909（明治42）年

GRADUATE SCHOOL OF ARTS

大学院美術研究科

修士課程 / 博士（後期）課程

大学院のみの専攻／研究領域	保存修復
博士（後期）課程のみの研究領域	産業工芸・意匠

国際的な芸術文化都市・京都の資源を生かし、独創的で多様な研究を背景に、専門的で横断的な教育を通して、優れた芸術家や独創的な人材を生み出しています。

CURRICULUM

4年間の学び

本学美術学部は、美術科・デザイン科・工芸科・総合芸術学科の４つの学科から成ります。入試は、この４つの学科ごとに募集し、専攻別入試ではなく「科別入試」を採用しています。各専攻に分かれるのは、１年次前期の「総合基礎実技」を履修した後、各専攻の基礎を学んでから。２年次以降、それぞれの専攻の学びと実技へと進んでいきます。

カリキュラムの詳細はシラバスをご覧ください。
本学ウェブサイトでも閲覧いただけます。

午前は講義、午後は実技

メリハリのある時間割で学習と制作に集中する

新しい芸術を生み出すための自由で豊かな発想力、思考力を育成するためには、多岐にわたる幅広い教養と深い洞察力が必要です。そのための教養教育および学科教育は、芸術創出のための知的活力の基盤と捉えています。
科目は、哲学や社会学などの「芸術文化」、宇宙物理や現代生物学、数学、人間工学といった「芸術科学」、また日本美術史や西洋美術史などの「芸術学・美術史」を系列ごとに編成しています。
ほかに外国語や保健体育、コンピュータ演習などの科目が開講されており、その幅広い授業内容から知識と教養を深め、各自の専門性を高めることを促し、異なる芸術領域を横断する知的活力を養成します。
これらの科目はすべて午前中に行います(※)。
一方、実技授業は午後から実施されます。専攻ごとの実技教室や制作室、工房などで、作業のほかゼミや合評を行います。
「教職課程」および「博物館学課程」では、卒業生の多数が教員免許並びに学芸員資格を取得しており、卒業後の活躍の場を広げています。

教職課程 P.68
テーマ演習 P.19

※「テーマ演習」など、一部午後に行われる科目もあります。

実技以外の授業も個性的！

総合芸術学専攻の田島達也教授による授業「日本美術史(絵画)」。学年末恒例の「手紙」形式でのレポート提出は、年々力作が増え、毎年テレビや新聞等で紹介されるなど話題に。

総合芸術学専攻の畑中英二教授による授業「博物館実習」では、実際に博物館収蔵品の取り扱い等も学ぶ。

総合基礎実技

最初の半期は 全員で“総基礎(そうきそ)”

科・専攻の枠を越えて学びをスタート！

美術学部には、40年以上の実績がある領域横断型のユニークな授業**「総合基礎実技」**(略称：総基礎)があります。受験実技から創作の世界へとスタートを切る上で、非常に重要なプログラムとして、この授業を位置付けています。

美術学部の新入生は全員、所属の科に関係なくクラス編成され、科の枠を越えた課題に取り組みます。指導を担うのも、実技や学科、専門分野の枠を越えた教員です。毎回、各領域に通じるテーマが設定され、課題を展開していき、展示として成果を発表します。授業の形態は、関連講義のほか、ワークショップや、チュートリアル(個別指導)、個人またはグループ制作、学外研修、発表、合評などさまざまです。

入学直後から半年にわたり取り組む中で、異なる方向性を持った学生同士、学生と教員の間にコミュニケーションが生まれます。自己の視野を広げ、多様な学問領域の人との交友関係を築いていくことも、芸術という大海に船出するための豊かな礎(いしずえ)になります。

第1課題「うつしを束ねる」

第2課題「身体」

第3課題「うごく依りしろをつくる」

第4課題「そうきそ展をつくる」

2023年度テーマ「MOVE」

人は同じところに留まることなく、常に変化を求めることで社会や歴史を作ってきました。
キャンパス移転という大きな転換期を迎えた2023年度は、総合基礎実技のテーマを「MOVE」とし、その現場と対峙しながら、美術とは一体何なのか、ユニークな課題を通して新入生とともに考えました。

本学ウェブサイトでは過去8年間の課題がご覧いただけます！

https://www.kcua.ac.jp/arts/general-practica/

専攻別実技スケジュール

美術学部

	1年次 前期	1年次 後期 (作品展)	2年次 前期	2年次 後期 (作品展)	3年次 前期	3年次 後期 (作品展)	4年次 前期	4年次 後期 (作品展)
美術科 70名	総合基礎実技	↓いずれか選択 日本画基礎 A 油画基礎 A 彫刻基礎 A 版画基礎 A 構想設計基礎 A	↓いずれか選択 日本画基礎 B 油画基礎 B 彫刻基礎 B 版画基礎 B 構想設計基礎 B	日本画専攻	油画専攻	彫刻専攻	版画専攻	構想設計専攻
デザイン科 30名	総合基礎実技	デザイン科基礎	↓いずれか選択 総合デザイン基礎1 デザインB (xyz-1)	↓いずれか選択 総合デザイン基礎2 デザインB (xyz-2)	総合デザイン専攻	デザイン B 専攻		
工芸科 30名	総合基礎実技	工芸基礎	陶磁器基礎 A 漆工基礎 A 染織基礎 A	陶磁器基礎 B 漆工基礎 B 染織基礎 B	陶磁器専攻	漆工専攻	染織専攻	
総合芸術学科 5名	総合基礎実技	他専攻の基礎	他専攻の基礎	総合芸術学科基礎実技	総合芸術学演習			
	基礎演習 A–1	基礎演習 A–2	調査研究・企画運営演習A・B	基礎演習 B				

大学院 美術研究科

	修士課程(2年間)	博士(後期)課程(3年間)
美術専攻	日本画 油画 彫刻 版画 構想設計	研究領域: 日本画 油画 彫刻 版画 構想設計
デザイン専攻	総合デザイン デザイン B	研究領域: 総合デザイン デザイン B
工芸専攻	陶磁器 漆工 染織	研究領域: 陶磁器 漆工 染織
芸術学専攻	芸術学	研究領域: 芸術学
保存修復専攻	保存修復 *	研究領域: 保存修復 * 産業工芸・意匠 **

*「保存修復」は大学院(修士課程・博士(後期)課程)のみの専攻／研究領域です。

P.44

**「産業工芸・意匠」は博士(後期)課程のみの研究領域です。

P.45

専攻基礎実技

「総基礎」の次は「専攻基礎実技」で自分の進む専攻の基礎づくりを

総合基礎実技が終われば、各専攻の基本をしっかりと学びます。本格的な専攻実技を履修する前に、素材についての知識、描画などの技法、道具や機械の扱い方など、練習や体験を重ねて学んでいきます。目指す専攻によって求められる基礎知識や技術は異なるため、各科で独自にカリキュラムが組まれ、期間も科によって違いがあります。

美術科基礎 1年次後期・2年次前期

美術科5専攻の基礎実技の中から、半期ずつAとBの2回の基礎実技を自由に選択します。

⚠ 2年次後期からの専攻実技に進む際、その専攻の基礎実技の履修が条件となる場合があります。

日本画基礎A・B
ものの見方や捉え方をさまざまなアプローチによる写生や古画研究などを通して学び、この後の日本画材を用いた絵画制作のための基礎を養います。

日本画基礎

油画基礎A・B
“ワークショップ”では、さまざまな画材を使った実習を通して基本となる技術への理解を深めます。“ドローイング”では、完成された絵画作品に至る前の思考／試行を繰り返します。“ペインティング”では、それぞれが多様な技法に基づく絵画表現を試みます。「油画基礎B」の最後は、制作室を使った展覧会を学生主導で企画・展示します。

彫刻基礎A・B
「彫刻基礎A」では、観察を出発点に鉄や石、自然木、陶土など実素材を使った制作を体験・修得します。「彫刻基礎B」では、立体的な表現に関する発想と展開に当たっての着眼点について、また素材の特性や、制作に必要な加工技術と取扱いの知識を学びます。

油画基礎

版画基礎A・B
ドローイング、イメージ構成などにより作品制作の基礎造形力を養います。「版画基礎A」では、技術修得を基盤としたシルクスクリーン基礎、木版画基礎を、「版画基礎B」では、銅版画基礎、リトグラフ基礎を開講。また、版画の現状を紹介し論ずる「版画論」、デジタル写真とPCによる画像処理の基礎「映像」、総合的な〈版〉の可能性を学ぶ「プリントメディア」などを並行して学びます。

構想設計基礎A・B
従来の専門ジャンル・技法修得型の教育ではなく、「相互行為」「リサーチ」「演出」「構築」という4つを軸にし、柔軟な発想と独自の表現方法を身につけることを目指します。技術面では映像・空間・身体に加えて、プログラミング、サウンドなどさまざまな表現媒体の基礎を修得します。

彫刻基礎

デザイン基礎

工芸基礎

デザイン基礎 1年次後期・2年次前期・後期

1年次後期に2専攻の基礎を学び、2年次に2専攻の基礎実技の中から半期ずつ選択します。

⚠ 3年次からの専攻実技に進む際、その専攻の基礎実技の履修が条件となります。

デザイン基礎 1年次後期
デザイン基礎(総合的なデザイン基礎課題、各専攻の基礎など)について、1週間から3週間の期間で取り組む課題を行い、デザインするために必要な表現方法や、基礎的な技術を身につけます。

総合デザイン基礎1・2 2年次前期・後期
デザインの各専門に必要な幅広い技法や技術を修得します。平面・立体・空間へ展開する表現力を重視し、色彩、タイポグラフィ、立体造形、図法、木工、写真、シルクスクリーンなどを学ぶ多彩なカリキュラムが組まれています。2年次後期では、選択課題(平面、立体、空間系)を各自選択し、デザイン各領域の技術を伴う幅広い表現力の修得を目標とする一方で、構想力を身につけるためのカリキュラムが織り交ぜられています。これらの授業の体験から、学生は、自分に合った専門を見定めていきます。

デザインB(xyz-1)・(xyz-2) 2年次前期・後期
デザインに必要な表現方法や、基礎的な技術だけでなく、学生一人ひとりが自分にとってデザインと関わる動機を見つめ直したり、モノのデザインをモノ単体から考えるのではなく、時間の経過や空間、素材などから試行する課題を行います。

工芸基礎 1年次後期

1年次後期に3専攻(陶磁器・漆工・染織)の基礎を学び、2年次から各専攻に分かれます。陶磁器、漆工、染織の各専攻課程へ進むために必要となる素材と技術の基礎を修得し、各専攻の専門課程の内容を知り、選択の指針とします。(それぞれ4週間程度)

- ▶ 陶磁器：成形から本焼成までの作陶の基本的工程をひと通り体験。
- ▶ 漆工：木を削り合成漆を塗装し、装飾を加えるという基本的な漆工芸のプロセスを体験。
- ▶ 染織：モチーフの観察から図案へと展開し、染色技法による表現を学ぶ。

総合芸術学基礎演習 1年次前期・後期

前期は総合基礎実技と併せて、「基礎演習A」を必須科目として履修します。後期は「基礎演習A」と、美術科基礎、デザイン科基礎、工芸科基礎のいずれかを選択して履修します。講義科目は他科と共通ですが、語学や専門に関連する科目を幅広く履修します。

作品展

卒業制作展ではなく、「作品展」全学年の展覧会に1年次から出品

卒業・修了年生だけでなく、学部1回生から大学院修士課程2回生までの全学年が作品を展示。毎年作品を作り上げ、搬入・陳列・搬出まですべて学生自らが行います。学部生にとって、卒業までの4回の作品展への参加は重要な経験となります。

P.46

テーマ演習

3回生から参加できる 幅広い視野と探究心とコミュニケーション能力を養う、本学独自の教育カリキュラム

テーマ演習は、総合基礎実技と並ぶ、本学独自の教育カリキュラムです。一定のテーマに沿って、学生と教員が専攻を越えて、実践的な研究活動を行うことで、芸術に関わる幅広い視野と探究心、そしてコミュニケーション能力を養います。研究テーマを学生から提案できることもこのカリキュラムの魅力の一つです。

本学ウェブサイトでも過去の課題の一部がご覧いただけます！

https://www.kcua.ac.jp/arts/theme-practice/

「街道をめぐる」2023年度に歩いた道は《沓掛街道》。ルート決めや地図の作成、宿やバス確保など企画のすべてを学生が主体となって行います。街道を歩いた後は、その体験をもとに成果物として作品を作ります。

「アートブックをつくる」アートブックやZINEについての歴史や表現などを深く知り、主にリソグラフ（デジタル孔版印刷機）を使用して、複製できるアートワークとしての本を制作します。

「和菓子の文化史」和菓子の歴史や技法・表現を、教員の講義や各自の調査を通じて学び、テーマに沿ったオリジナル和菓子を作ります。老舗和菓子店の体験教室にも参加するほか、アイデアや設計図、試作品などを皆で共有し、レシピブックを完成させます。

共通教育

美術学部では、学科教育・教養教育やテーマ演習など全専攻生を対象とした科目のすべてを「**共通教育**」と位置付けています。共通教育では、新たな芸術を生み出す自由で豊かな発想力・思考力を育むための幅広い教養と深い洞察力を磨き、芸術を創出するための知的活力の基盤となるプラットフォームとして、活発な知の交流を目指しています。

多彩な教員

柔軟な思考力と独自の発想力を育てるため、専任教員はもとより、さまざまな分野の専門家を非常勤講師として迎え、多彩な内容の授業科目を設けています。専門的な知識・技法の修得のみならず、論理的な思考力・課題解決力の育成を目指して授業を構成しています。少人数による密度の高い教育課程の中で、教員は個々のテーマに合わせた課題を設定し、学生一人ひとりが自ら学ぶ能力の修得を目指します。

共通教育 専任教員

＊ 非常勤講師の一覧は、本学ウェブサイトでご覧いただけます。

飯田 真人 教授
専門 美術教育

上 英俊 教授
専門 保健体育

玉井 尚彦 准教授
専門 理論言語学ほか

磯部 洋明 准教授
専門 宇宙物理学

中村 翠 准教授
専門 フランス文学

堀田 千絵 准教授
専門 心理学

戸澤 幸作 講師
専門 哲学

村上 裕美 講師
専門 理論経済学

STUDENT'S VOICE FACULTY OF FINE ARTS

美術学部 在学生の声

※学年は2024年度のものです
※デザイン科は旧３専攻の学生です

伝統的な技法を学びながら、新たな画材や技法にもトライできる専攻です。

日本画専攻4回生 長嶺 志保 さん

日本画専攻では、共通課題を通して伝統的な技法や画材を学ぶことができます。先生方の指導や合評で友人の作品を見ることを通じて、基礎的なデッサンや観察の仕方についての考え方などを新しく得ることができました。私自身、入学時は日本画はこうあるべきだという考えにとらわれていましたが、課題を通して細かな指導や日本画の歴史を知ることで日本画そのものの認識が変化していき、多角的なアプローチができるようになりました。３回生からは研究室に分かれることで先輩と同じ制作室になり、話し合いや美術館での鑑賞など、制作以外の時間も充実しています。伝統的な技法を学べる一方、新たな画材や技法にトライできるさまざまな可能性のある専攻だと思っています。

表現したいことを作品にできる力がつく専攻です。

油画専攻4回生 世良 茜 さん

油画専攻は、表現に真摯に向き合える場所です。

先生方は学生のやりたいことを尊重した上で、どうすれば効果的に表せられるのかを共に考え、技法についても油彩に限らないさまざまな提案や技術面の助言をしてくださいます。私は作品制作の手段を長い間迷っていましたが、専攻での制作、合評、試作を重ねる中で主題に適した表現方法を見つけ、今は絵画中心の制作を行っています。

また油画専攻は学生数が比較的多く、多様な作品に触れられて楽しいです。油絵を描く学生の隣では、別の学生がアニメーションを制作しています。私も主題が変われば文章を書くかもしれないし、立体造形物を作るかもしれない。手段にとらわれず、表現したいことを作品にできる力がつく専攻です。

自身のあり方を考えられる場所です。

彫刻専攻4回生 前田 美咲 さん

基礎を終えて２年次後期からは自由制作となり、テーマや素材などすべてを自分で設定します。想像したことをかたちにするための適切な素材や方法は何なのか、自分のやりたいことは一体何なのか、試行錯誤をしながら自分自身と向き合い続ける時間を過ごすことができます。自分一人だけでは思い悩むこともありますが、先生方や学生との交流がそれを打開できるきっかけになることも多くあると思います。移転してからは制作環境が大きく変わり、一つの大きなスペースで多くの学生が作業をするようになったので、周囲への配慮のある制作を心がけることがより必要になりました。制作を通して、自分自身のあり方についてじっくりと考えられる場所だと思います。

開放的な工房で、仲間と交流しながら表現を探求しています。

版画専攻4回生 川畑 智雅 さん

私は直接描いて表現することに対して抵抗があり、「版」を介する間接表現のプロセスに興味を持ち版画を選択しました。初めはほとんど技法についての知識はありませんでしたが、基礎で４版種の技法を修得していくうちに刷った際に生まれる計画性からはみ出た偶然性の魅力に刺激を受けました。そこから版画に対して視野が広がり、新たな可能性を探ろうと身の回りの物にアンテナを張るきっかけになりました。さらに、移転を機に工房が広くなり開放的な雰囲気が増したため、他版種を学んでいる学生と気軽に交流ができ、技法の修得や表現の探求が横断的にしやすい環境になりました。そのため自身の表現に悩んだ際、先生方はもちろん、学生に意見を求めやすくなったと感じています。工房だけにとどまらず、他大学や海外との交流など、開放感のある専攻です。

主体的に表現を模索する場所です。

修士課程 美術専攻（構想設計）1回生 中村 さやか さん

構想設計の学生が何に関心を持って学んでいるかということは、ここで網羅するのが難しいほど多岐にわたっています。特定の技法にとらわれず、学生自らが持っているアイデアや問題意識を軸に、主体的に表現を模索していく場所だと言えると思います。ゼミは大きく２つに分かれており、２年次後期にどちらかを選択します。しかし両者の垣根は低く、ほかのゼミの授業に参加したり、気軽に教員に相談することができる環境です。また、美術を起点として異なる領域を横断し、さまざまな分野に触れることができるのも専攻の特色です。学外からゲストを招いたレクチャーが行われる機会が多く、美術のみならずそれを取り巻く社会をより広い射程で捉え、考えを深めるきっかけになります。

デザイナーとして、技術も考え方も成長できます。

ビジュアル・デザイン専攻4回生 山崎 結生 さん

イラストレーション、ポスター、パッケージ、空間構成など、視覚デザインを幅広く学ぶことができます。授業では、手を動かし、さまざまな素材に触れ、ものづくりの基礎から学ぶことで少しずつ本質や仕組みを実感として理解していきます。それが自身の創造力への自信につながり、次のアウトプットへのモチベーションになる、そんな好循環を実感しています。

自分らしい表現方法の模索に苦心することもありますが、豊富な知識と経験を持つ先生方が親身に寄り添ってくださいます。また移転により地域の人や企業との関わりが増え、これからさらに学生の活躍の機会が増加することが期待されます。デザイナーとして、技術も考え方も成長させられる環境だと思います。

頭で考えるだけではない、五感で体験してデザインを学んでいます。

修士課程 デザイン専攻（総合デザイン）1回生　小池 新 さん

環境デザイン専攻では、諸分野で活躍する先生方の指導のもと、住宅店舗の設計からアーバンデザイン、インテリアデザインまで幅広い分野で、「空間における自分なりの作品のあり方」のリサーチや、毎週のエスキスを重ねながら模索していく授業が行われます。さまざまな地域に実際に行くことも多いので、地域や都市、空間を観察することでコンテクストを読み取った説得力のあるデザインを組み立てる能力を養うことができます。授業外では、他学生との課題の相談や意見交換に加え、建築や庭園の見学、先生方の作品を見る機会を通して、頭で考えるだけではない、五感での体験を経ながらデザインを学んでいます。建築から内装、インテリア、家具と多岐にわたるデザインに能動的に関わりながら、自分の作りたい作品とその作品が作る空気感を探る機会を得ることができることは、とても有意義な経験です。

自分の好きなことを第一に、形にとらわれない制作を楽しむことができます。

プロダクト・デザイン専攻4回生　鳥井 直輝 さん

プロダクト・デザイン専攻では、自分の興味を探しながら制作ができます。広いテーマの課題や授業では、自分がなぜデザインするのか、何のためにものを作るのかを日々考えています。プロダクト・デザインという名前にとらわれないアウトプット方法を学ぶことができ、家具などのものづくりはもちろん、体験やウェブ、冊子、サービスなど、自分の伝えたい表現を軸に、さまざまな技術を横断的に身につけられます。授業では学年関係なく、専攻全体で同じ課題に取り組むことも多いので、先輩方から学ぶ機会が多いこともこの専攻の特徴です。多様な講師陣による授業や、学外への研修旅行なども充実しており、日々たくさんの刺激を受けながら、デザインと向き合い、自分の好きなことを追求しています。

作品を作るたびに新たな発見があります。

漆工専攻4回生　土田 蛍太 さん

漆工専攻では２年次にひととおりの基礎を学び、３年次以降ではより細かい分野に分かれて制作を行います。３年次以降の制作は自主制作となるため、自分の表現したいことについて自由に制作ができます。学校としても自由な気風を持っており、古典的な技法を追求したり、独自の技法を開発したりなど個人個人が異なったアプローチを持って漆と接しています。 漆は素材として非常に独特な性質を有しているため、漆に対する理解なしではうまく扱うことができません。しかし、その分多様な表情を見せてくれる素材でもあり、学べば学ぶほど新たな一面を見つけることができます。作品を作るたびに新たな発見がある。漆の奥深さにいつも驚かされるばかりです。

土と対峙し納得するまで手を動かし続ける。

陶磁器専攻３回生　吉田 千夏 さん

普通、制作といえば、素材を選択するところから完成まで、作者が作品と常に関わっている状態にあります。しかし、陶磁器の制作には必ず「焼成」という工程が必要で、この間作品には一切触れることができません。「火に託す」とも「制限がある」とも言われるこの独特な工程が陶磁器制作の最大の魅力だと感じています。であるからこそ土に触れていられるうちに綿密な計画性と技術を駆使することが必要なのだということを学びました。これまでの生き方の中では考えてこなかったことです。自由に表現できることが芸術のすべてだと思っていましたが、今の私は土と対峙し納得するまで手を動かし続けることが目標です。

自分にしか出せない色や表現を探求しています。

染織専攻4回生　森川 桜帆 さん

私が染織専攻を選んだ理由は、布や糸という素材が持つあたたかさや柔らかさに魅力を感じたからです。染織専攻では、一人ひとりが素材や技法の基礎知識をベースに、自分にしか出せない色や表現を自由に探求している印象です。日々の何気ない会話や作品プランのプレゼンなどから、常に新たな気づきを得ることができる環境でもあると感じます。

私は主に染めの技法を用いて作品制作をしています。生地に思い描く色や柄を染めて作品にしたり、染色した生地をさらに加工したりすることもあります。真っ白な布や糸が色づく瞬間の喜びは何物にも代え難いです。専攻での学びを活かして、在学中そして卒業後も、伝統工芸としての染織から、現代アート・ファッション・インテリア・空間演出まで、さまざまな分野にアプローチすることができる点も魅力です。

制作の現場に近いところでの学びはとても有意義です。

総合芸術学専攻4回生　大城 咲和 さん

総合芸術学専攻は、他専攻の学生に感化されながら、知りたいことを追求できる場所です。総合基礎実技をはじめとする実技では、制作から合評までを他専攻の学生とともに経験するため、よい刺激を受けますし、実技で得た知識は研究に生かすことができます。

専攻の演習では、ウェブサイトの運営や展覧会企画、インタビュー冊子制作や動画編集を通して伝える技術を身につけ、３回生から所属するゼミでは、関心をもとに指針を立てて研究を進めます。自由度が高い分、先生方も親身に相談に応じてくださいます。

制作の現場に近いところで得た学びや人とのつながりが、かけがえのない学生生活を豊かにするだけでなく、興味や関心が尊重されるこの場所で学ぶことができるのは有意義な経験になると思います。

日本画専攻

140年の歴史と伝統　理論、技法、描く力を養う

日本画専攻は、本学が1880年に日本初の公立絵画専門学校として開設されて以来、日本画の制作指導と、制作理論の研究を行ってきました。連綿と続いてきた基礎技術の指導により表現技法を修得した上で、現代における日本画表現と技法を学び、また制作理論の基礎を研究し、日本画を制作していきます。
同時に古画研究を通して、古典絵画における様式研究や技法研究を行い、原作の評価と鑑賞の方法を学び、日本画制作における評価能力を養います。
伝統に培われた指導により技術を獲得し、さらに今日的な感覚と知識、絵を見る目を持ち、日本画制作を続けていく力を修得します。

EDUCATIONAL PHILOSOPHY
教育理念

伝統的かつ柔軟なカリキュラム

日本画専攻では、２年次までは本学日本画専攻の特徴の一つでもある写生教育を基盤とした基礎的なカリキュラムを行っています。また、移転を機に、これまでの教育を引き継ぎながら、新たな視座を交えた内容へと転換を図っています。さらに、現在の多様化する日本画表現に対応すべく、３年次から選択できる特色の異なる３つのゼミを開設しています。さまざまな視点を持ちながら創作する力を磨くことで、卒業後の多様な進路において、刻々と変化する課題にも柔軟に対応できる能力を身につけることを目指します。

NIHONGA

TEACHING STAFF
教員

川嶋 渉 教授
専門 日本画

翟 建群 教授
専門 日本画

奥村 美佳 准教授
専門 日本画

小島 徳朗 准教授
専門 日本画

正垣 雅子 准教授
専門 日本画模写

谷内 春子 講師
専門 絵画制作

三橋 卓 講師
専門 絵画制作

非常勤講師

池上 真紀
梶岡 百江
北川 咲
幸山 ひかり
高野 純子
辻野 宗一

CURRICULUM
実技カリキュラム

日本画専攻実技 2年次後期

「人体」を対象にした課題制作を行います。ヌードモデルのさまざまなポーズを、主に線を用いたデッサンで量感や空間の捉え方などを意識しながら何枚も行います。それらをもとに、日本画材を用いた絵画制作を行います。

研究室1・2・3 3年次・4年次

3年次より、下記の3つの研究室から1つを選択し履修します。研究室の変更は、半期ごとに可能です（4年次は通年で履修することが望ましい）。

研究室1

古画（近代以前の日本美術や日本美術に影響を及ぼしてきた異文化の古典絵画など）が有する美意識、様式、表現技法について時代、地域を俯瞰的に考察することを軸に模写制作を含む絵画表現の探究を行います。

研究室2

主に外界の写生を通して対象を観察し、現場から身体感覚として得たものをもとに本画制作へ進むというプロセスを軸にした作品を展開していきます。

研究室3

写生から本画に至るまでのさまざまなプロセスの可能性を、チュートリアルなどを通して実践的に探り、作品を展開していきます。

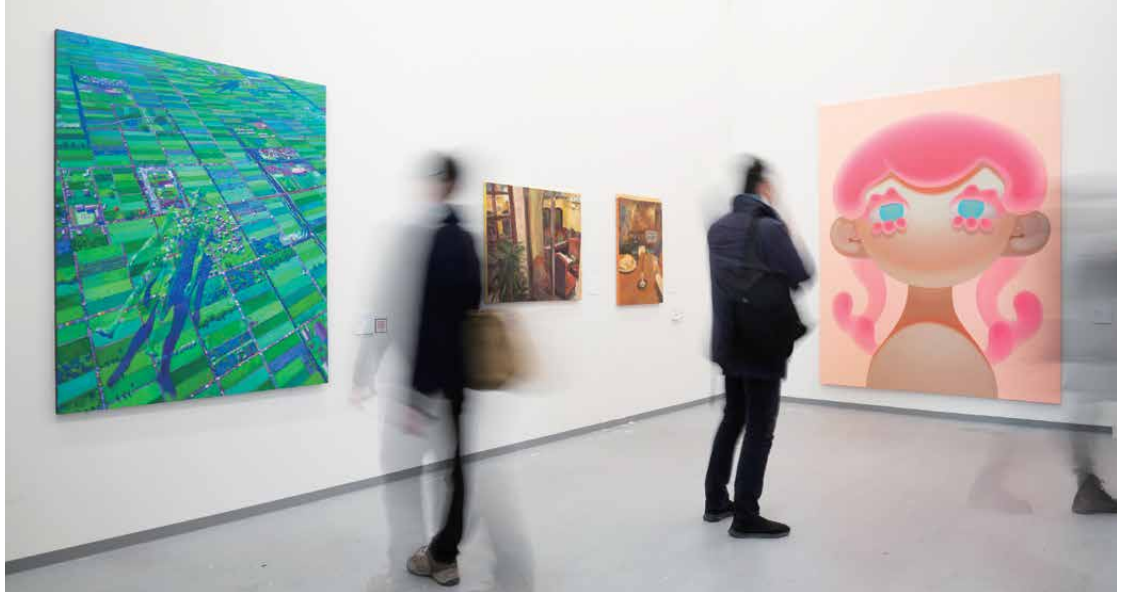
SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

修士課程
各自が設定したテーマで自由に日本画を制作し、見つめる・感じる・創る・伝えるということを考察します。日本画制作を通して、美術や教育の分野でより専門的に活躍できる人材を育成します。

東アジアレベルでの岩彩画の展開

日本画研究室では、岩彩画（中国での日本画材を用いた絵画の名称）研究において、これまで中国との国際交流を数多く行ってきました。2019年度は、中央美術学院・上海美術学院の教員を招聘（しょうへい）し、中国での岩彩画教育と本学日本画教育の現状について意見交換をしました。2022年度においても、敦煌研究院美術所所長によるオンライン形式での講義を開催するなど、今後も交流を続けていきます。

油画専攻



表現に至る明確な動機と個性豊かな絵画技法を探求する

価値の多様化が進む今日、「表現者」の果たす社会的役割はますます大きくなると言えます。そのため美術家には、表現に至る明確な動機と個性豊かな技法とを探求していく自立心が必要です。
油画専攻では、１年次後期と２年次前期に全教員による基礎授業を実施、２年次後期からは個人指導を中心に、各学生に内在する個性を伸ばしていきます。併せて、絵画の社会的意義を認識させ、十分な見識と技術を身につけた表現者の育成を目指しています。

PAINTING

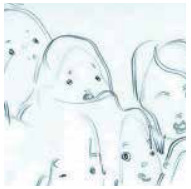
CURRICULUM
実技カリキュラム

油画１・２・３ ２年次後期・３年次・４年次

少人数制の各授業を通じ、油彩や水彩、アクリル、フレスコなどの技法を学びつつ、複合的な絵画表現の研究と制作を行います。油画専攻では**「つくること＝制作」「みること＝批評」「おくこと＝展示」**の技法を、実践的に学ぶことができるカリキュラムに基づいて制作研究を行います。
次ページの３つの教室（油画１＋壁画、油画２、油画３）は、段階的に順を追って履修するものではなく、担当教員の研究内容に応じて編成されており、２年次後期から４年次までの学年を越えた混合教室となっています。半期単位で教室を自由に移動することができます。

TEACHING STAFF
教員

渡辺 信明　教授
専門 絵画



法貴 信也　教授
専門 油画

金田 勝一　教授
専門 絵画

伊藤 存　教授
専門 現代美術

谷澤 紗和子　准教授
専門 現代美術

唐仁原 希　講師
専門 絵画

谷本 天志　特任教授
専門 絵画

非常勤講師

作田 優希
佐々木 愛
中迫 梨恵
野原 万里絵
原口 みなみ

油画１＋壁画

手と材料という非常に原始的な手段を頼りに、自分にとっての絵のあり方を探します。そして、できた作品へのレスポンスとして次の作品に取り組みます。そのシンプルな繰り返しの中でテーマを探り、作品を体系化していきます。

油画２

絵画における主題性を軸とし、自由で柔軟な思考と方法で、真摯に作品を展開することを目標とします。多種多様な視点が芽生える今日のアートにおける新たな絵画の可能性を問い直していきます。

油画３

平面表現の可能性を拡張し、近代の「絵画」概念を更新する「もう一つの絵画」を探求します。映像、写真、立体、音響などさまざまなメディアと交雑するハイブリッドな実験制作を行い、表現の多様性を開拓します。

修士課程

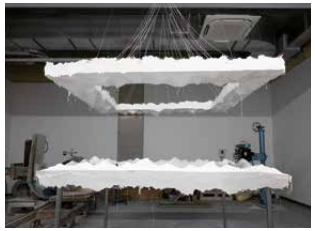
各自のテーマに沿った自主制作を中心とします。表現しようとしているテーマと技法を改めて見つめ直し、今後の制作の方向と可能性を探ります。「描く」「つくる」という個人の表現手段から離れて、見学などの「見る」こと、ディスカッションなどの「話す」こと、展示や発表などの「置く」ことなど、多角的な演習を通じて制作への意識を高めます。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

学生一人ひとりに必要なスキルや知識を考慮したゼミやディスカッション、ワークショップを行う

油画専攻では、各教室でのセミナーを通じて、毎回異なるテーマに沿って作家や表現方法を研究し、ディスカッションを行うことで知見を広げつつ、各自の表現基盤を形成します。また、さまざまな技法、材料を扱う非常勤講師または招聘講師を招いてワークショップを行い、表現と技法の可能性を広げます。

彫刻専攻



独自の視点で事象を捉え 表現へと展開・構築する方法を探る

確かな実感を持って捉えた自然界や人間社会のあらゆる事象が、彫刻表現の源泉です。そして、心動かされる事柄や思考を、物質や図像など適切なメディアを用いて、現実空間に変換し、表し、記憶にとどめ、他者と共有しようとすることが、彫刻するということです。
彫刻専攻は、さまざまな事象を独自の視点で捉え、表現へと展開し構築する方法を探る場であり、人と人、人と社会、人と自然を結びつける芸術本来の役割を担える人材を育てることを目標としています。

SCULPTURE

CURRICULUM
実技カリキュラム

彫刻1・2・3 2年次後期・3年次・4年次

下記の3つの研究室（彫刻1～3）の中から1つを選択し、自由制作とゼミを行います。研究室は半期ごとに自由に選択し履修します。

彫刻1　彫刻の造形原理を学ぶことにより、その展開と表現ができるようになることを目指します。
彫刻2　自己と、自己を取り巻く現実世界との関係性から制作の糸口を探り、その展開と表現ができるようになることを目指します。
彫刻3　各自の制作研究活動を、自発的に探査し展開する活動として捉え、その方法の多様性を理解し拡張を試みます。

修士課程
自由な発想と展開による制作研究を通して、独自の観点を探求する重要性を理解し、自身の表現とアイデンティティの確立、社会における実践と検証を視野に入れた表現を研究・考察することを目標としています。

TEACHING STAFF
教員

松井 紫朗 教授
専門 彫刻

小山田 徹 教授
専門 彫刻

中原 浩大 教授
専門 彫刻

安藤 由佳子 教授
専門 彫刻

金氏 徹平 准教授
専門 彫刻

非常勤講師

今村 遼佑
楠井 沙耶
野村 由香
ベーハイム 雪絵 ラオレンティア

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

彫刻、映像、パフォーマンスに関するワークショップ

ロームシアター京都で行われた第34回京都賞記念ワークショップ「パフォーマンスとメディア・アートのラディカリズム—ジョーン・ジョナスとその変遷あるいは継承—」(主催：稲盛財団)。アーティストユニットのコンタクトゴンゾと共に彫刻専攻をはじめとする学生が参加しました。(提供：稲盛財団／写真：井上嘉和)

身体の立体的描写

塑像での身体表現とそれを用いた動画制作を通して、身体を捉え直し再構築します。

登り窯実習

粘土は心に思い描いた形をすばやく目の前に実現することのできる素材の一つです。これに焼成のプロセスを加えることで、より安定した媒体となるため、古来さまざまな民族に用いられてきました。彫刻ではこの技法について、登り窯実習として数年に一度、実体験できる機会を設けています。

共有空間の獲得

「場を自ら獲得することは、関係を作り出すことでもある」との考えのもと、さまざまな共有空間の創出を学生と共に行っています。(写真：Weekend cafe)

美術科

版画専攻

PRINTMAKING

浮世絵から3Dプリンターまで 伝統文化と最先端技術が交錯

人は、世界中に張り巡らされたネットワークを通じて、自由に情報を交換できるようになりました。その源流として、印刷技術の出現が人々の生活を根本的に変えてしまったという歴史があります。では、現代において、印刷された美術、版画はどのような役割を果たすべきなのでしょうか。京都芸大の版画専攻では、版を単に複製のために使うのではなく、版を使うことによって生まれる表現の独自性に着目しています。絵筆などで直接表現するよりも、何かを仲介させる「間接表現」に新たな可能性があると考え、「版」の多様性と複数制作できる特質を最大限に活用した現代の版画表現を追求するとともに、情報伝達メディアから表現メディアとなった「版画」を重層的に捉え、あらゆる可能性を追求していこうというのが版画専攻の今の姿です。版画の思考で現代を切り拓き、時代を超えた新たな創造活動に挑戦する人材の育成を目指しています。

CURRICULUM
実技カリキュラム

版画基本4版種 2年次後期・3年次・4年次

次の5つのメディアの中から1つのゼミを選択します。

凹版 銅版画など　**平版** リトグラフなど

凸版 木版画など　**孔版** シルクスクリーンなど

プリントメディア 新たなマテリアルや支持体、他メディアとの横断的で実験的な表現など

工房同士は緩やかに結びついているため、例えば写真製版工房は全版種共通で利用でき、工房ごとのスキルアップと版種を越えた指導が混在しています。

修士課程

「版」特有の表現方法の研究を、担当教員と共に制作プランを設定しながら進めます。4版種の工房を自由に横断し、版画を中心としながらも新たなマテリアルや支持体、他メディアとの横断的で実験的な研究や、古典的な版画技法のさらなる修得と新たな展開など、メディアとしての版画の可能性を広げることを目指します。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

授業・技法演習ほか

授業では、適宜開かれる展示型合同合評会に出品し、技術と知見を向上させます。技法演習では、作品に応じた個別指導、グループによる演習などでステップアップを目指します。また、複数の分野や領域につながることを目指し、世界的に活躍する作家、専門職の技術者を招いた特別講義も行います。

全国大学版画展

全国大学版画展には本学から毎年10名前後の学生が出品しており、全国の大学から集まる力作の中から与えられる優秀賞や買い上げ保存賞、観客賞などがあります。本学の学生は毎年受賞を続け、優秀な成績を収めています。

TEACHING STAFF
教員

田中 栄子 教授
専門 リトグラフ、絵画

大西 伸明 教授
専門 銅版画、マルチプル

吉岡 俊直 教授
専門 シルクスクリーン

王 木易 講師
専門 木版画

非常勤講師

衣川 泰典
清水 穣
ジョン・ケネス・ミラー
武雄 文子
藤田 紗衣
松井 亜希子
山田 真実
芳木 麻里絵

版画集制作授業

30年以上続いている、卒業・修了生による版画集制作。作品を複数制作することができる特徴を生かして、制作された版画集は貴重な資料として研究室や図書室などに保管され続けており、各自が1部ずつ受け取り卒業・修了していきます。

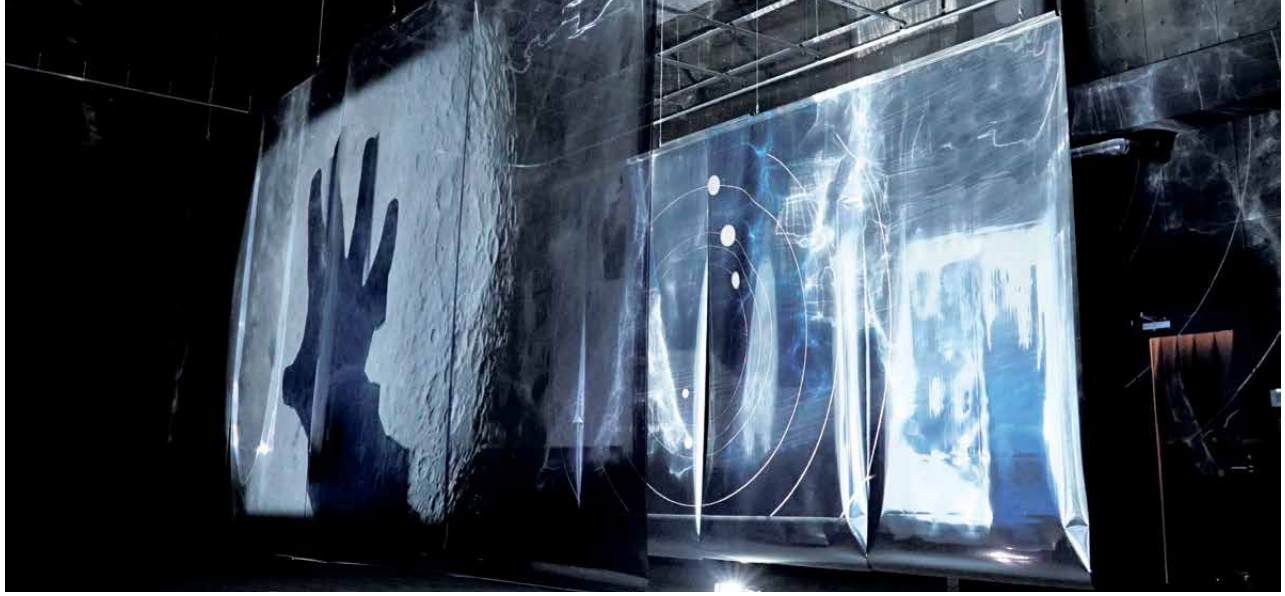
プリントメディア

2023年度より版画専攻が標榜する〈版の可能性〉をより発展させるために「プリントメディア」ゼミが新たに加わりました。4版種の工房を自由に横断し、版画を中心としながらも新たなマテリアルや支持体、他メディアとの横断的で実験的な表現を研究します。版画を中心としながら、表現の可能性を広げるためにさまざまなメディアを活用した制作を目指します。例えば商業印刷に関わる「オフセット」「活版」「インクジェットプリント」、作品の支持体作りに関わる「紙漉き」、版の解釈としての「型」や「3Dプリント」、写真技術を応用した「フォトグラム」など、版画を多角的に捉え、制作します。

美術科

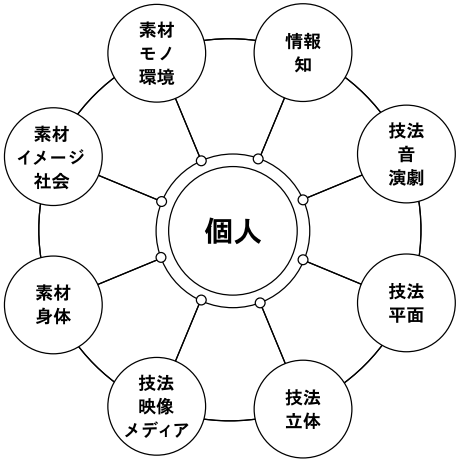
構想設計専攻

CONCEPT AND MEDIA PLANNING



「構想を設計する」という 京都芸大独自のカリキュラム

構想設計は学生の提案から生まれた世界でも類のない専攻です。
学生は自らの「アイデア」を中心に、表現をカタチにする素材や技術を選択することができます。演習を通して、映像・空間・身体による表現やプログラミング、サウンドなどさまざまな媒体による技術を学ぶことができます。また演習と並行してセミナー、ワークショップ、レクチャーなどを行うことで、「総合的な構想力」と社会に対して「語る言葉」を養います。それは広く浅く多くではなく、隕石のような未知の世界と自身をつなぐ表現の探求の始まりとなるでしょう。
一人ひとりの学生が最適な表現方法を探りながら、それぞれの作品についてみんなで真剣に考え語り合い「共同で授業を作ってゆける場所」。それが構想設計専攻です。



CURRICULUM
実技カリキュラム

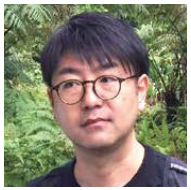
合同ゼミ制 2年次後期・3年次・4年次・修士課程

2年次後期からは学生の志向に基づき、ゼミに分かれた指導体制をとります。構想設計基礎A・B(P.18)での経験を継続的に発展させるとともに、映像・インスタレーション・言語・パフォーマンス・インタラクティブメディア・サウンドなど、個々の学生の発想・興味・資質に応じた自由な表現方法を、学生が主体となって実験的に作り上げます。
学部2年次から大学院修士2年次までが合同で参加する各ゼミは、相互に連携しながら多元的な学びの場を形作ります。学生の希望を尊重した専門的な技術の演習と、セミナー、ワークショップ、学外の研究機関・地域と連携したリサーチ・フィールドワークなど、総合的な構想力と表現技術を養います。最終年度は、表現を他者との文脈に関連させる批評性を身につけることを目指し、1年間の個人プロジェクト演習を行います。

TEACHING STAFF
教員

石橋 義正 教授
専門 映像、演出

木村 友紀 教授
専門 現代美術



田中 功起 准教授
専門 現代美術、映像

人長 果月 特任准教授
専門 現代美術、メディアアート

非常勤講師

粟津 一郎
居原田 遥
吹田 哲二郎
杉山 雅之
南條 沙歩
二瓶 晃
福永 一夫
前田 岳究
村田 冬実

修士課程
担当教員によるアドバイザー制をとりながら、各自が設定した研究テーマを基盤に演習と制作を進めます。大学が有するリソース（専門知・技術・資源）を活用しながら、それぞれが目指す専門領域の言説や批評言語を獲得し、社会の中に自らの場を創造していくことを目指します。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

大学移転に先行するアートプロジェクト

キャンパス移転に先立ち、地域の記憶を芸術固有の方法で共有化する多数のプロジェクトを企画してきました。

アートを介した連携ワークショップ

構想設計では他大学やNPO法人との連携ワークショップなど、さまざまな活動を通じて大学が社会に開かれる可能性を追求しています。

音楽とアートの交差

ロームシアター京都メインホールでのパフォーマティブコンサート「火の鳥」。京都市交響楽団とのコラボレーションで、さまざまな身体表現と新しいメディア体験をクラシックの生演奏と共に実現するプロジェクトです。

Photo: Kenta Yamaji

総合デザイン専攻

INTEGRATED DESIGN SPECIALITIES

幅広いデザイン領域から、専門・進路を自由に選択できる専攻

2023年度から新設された総合デザイン専攻は、これまであったビジュアル・デザイン専攻、環境デザイン専攻、プロダクト・デザイン専攻を1つの専攻に統合し、各領域の専門を深く研鑽するとともに、領域を横断するカリキュラムに基づいた授業を行う専攻です。学生は、デザインの基礎課程を経た後に、自分に見合った専門を自由に選択することができます。総合デザイン専攻を卒業するとさまざまな進路が広がっています。卒業生の中には、企業・NPO・行政への就職はもちろん、京都芸大の大学院、国内の大学院への進学や欧米の大学に留学した者もいます。

EDUCATIONAL PHILOSOPHY
教育理念

身体を使った創作を重視したカリキュラム

総合デザイン専攻は、素材に触れながら手で描き作る、すなわち身体を使った創作で培われる基礎造形力を重視しています。もちろんデジタル機器による表現技法も修得していきますが、本専攻では、素材に触れながら描き作った体験を基盤とすることが、デジタル機器での創作においてもより個性的・独創的な表現になると捉えています。

基礎力を基盤に、段階を追って独創性を身につけていく授業体系

総合デザイン専攻の1年次と2年次では、デザインに必要な造形の基礎力を修得することを重視したカリキュラムが組まれています。3年次からは、学生が自分に見合った専門の表現を深く探求できるカリキュラムとなっています。このように総合デザイン専攻では、学生に基礎から段階を追って表現力を身につけさせることで、独創性ある人材の育成を目指しています。

社会にある問題を発見し、
問題の解決をデザインの力で具体化できる人材の育成

総合デザイン専攻の授業には、社会にあるさまざまな問題を発見し、デザインの力でそれを解決することを目標にしたカリキュラムが組まれています。授業には、社会の最前線で活躍するデザイナーやアーティストはもとより、医学・工学・哲学・文化人類学・経済学・法学(知的財産権)など、美術以外を専門とする外部講師による演習や、京都の伝統産業を含む企業・行政・NPOといった外部組織との連携事業も行います。また、国内の他大学や海外の芸術大学との共同授業も組まれています。この授業の目的は、複雑な社会にある諸問題を発見し、問題の解決をデザインの力で具体化できる人材を育成することにあります。

TEACHING STAFF
教員

滝口 洋子 教授
専門 ファッションデザイン、テキスタイルデザイン

楠田 雅史 教授
専門 デザイン(空間デザイン、企画ディレクション)

舟越 一郎 教授
専門 グラフィックデザイン

島田 陽 教授
専門 建築

長谷川 江利子 准教授
専門 プロダクトデザイン、構想デザイン

土井 亘 特任講師
専門 建築設計

非常勤講師(※)は客員教授

芦田 康太郎
泉 拓郎
家入 杏
大石 起聖
大野 宏
岡野 邦彦
黄瀬 剛
楠 麻耶
桑田 知明
坂野 徹
関 祐介
寺岡 波瑠
徳永 杏子
中坊 壮介(※)
新森 雄大
はまぎし かなえ
藤脇 慎吾
堀 賢太
山崎 泰寛
山本 紀代彦
山本 史
吉行 良平

CURRICULUM
実技カリキュラム

総合デザイン基礎1・2 2年次

２年次前期では、１年次に培った造形力と構想力を基盤としながら、デザインの各専門に必要な幅広い技法や技術を修得します。この段階で重視するのは、平面、立体、空間へ展開する表現力の修得であり、そのために、色彩、タイポグラフィ、立体造形、図法、木工、写真、シルクスクリーンなどを学ぶ多彩なカリキュラムが組まれています。２年次後期では、選択課題(平面、立体、空間系)を各自選択し、デザイン各領域の技術を伴う幅広い表現力の修得を目標とする一方で、構想力を身につけるためのカリキュラムが織り交ぜられています。これらの授業の体験から、学生は、自分に合った専門を見定めていきます。

総合デザイン1・2 3年次・4年次

ゼミは３つあり、グラフィック・イラストレーション・ゲーム・映像・CG・UI/UX・パッケージ・書籍・ファッションなどのデザインを専門とする「Design 1」、日用品・家具・各種デバイス・モビリティなどのデザインを専門とする「Design 2」、そして、建築・都市計画・ディスプレイ・インテリアなどを専門とする「Design 3」です。学生は任意に選んだゼミで高い専門性を獲得していきますが、３つのゼミが合同で共通のテーマによる授業を行うことで、専門を横断し総合する高いレベルのデザインについて学びます。４年次には、自分で設定した自由なテーマでの卒業制作に取り組みます。

修士課程

理論的かつ実践的に具体的デザインを提案できる研究者を養成することを目標としています。顕在化・潜在化している社会の諸問題を抽出・発見し、自己と反照させながら、現状と理論の把握から、その解決を目指すデザインの実施に至るまでの包括的な研究を行います。自己のテーマを設定して２年間の研究・制作計画を立て、探究を深める研究活動を行うと同時に、選択制の短期スタジオが用意され、日常的に社会でデザインの実践を行っている教員と研究計画に基づくディスカッションを行い、思考の深化と拡張を目指します。今日的要望に応えられるデザイナーとして、幅広い関連分野への多様な展開ができる人材を育成します。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

さまざまな企業との連携授業

総合デザイン専攻では、これまでのビジュアル・デザイン専攻や環境デザイン専攻が、さまざまな企業と連携して実施してきた製品開発、ブランディング、店舗などのデザインに関する授業を、プロダクトデザインも含めさらに充実させる予定です。

手塚プロダクションとの連携授業

手塚プロダクションとデザインラボの提携協定を結び、手塚治虫作品を深く読み解き、新規企画の立案、イベントやプロダクトなどのコンセプトからデザイン開発を行うなどの授業を手塚プロダクションとともに実施しています。

欧米の芸術大学とのボローニャでのイラスト展

ENSAD(仏)、ボローニャ大学(伊)、ハンブルグ応用科学大学(独)、パーソンズ スクール オブ デザイン(米)、バルセロナ大学(西) などの大学との合同授業として、ボローニャにおいてイラストレーションの展覧会を行っており、欧米の学生作品の幅広い表現や発想に触れることができます。

京都市内ホテルコンセプトルームデザイン

プロのデザイナーと協働し、学生たちのデザインにより、京都タワーホテルアネックスに３部屋が、ザ ロイヤルパークホテル京都三条に２部屋が完成しました。

バルフェスティバルの家具デザイン

香川県の丸亀バルフェスティバル実行委員会からの依頼により、バルフェスティバルの企画・デザインを行いました。デザインから制作までの一貫したプロセスを経験できました。

デザインB専攻

デザインのあり方を問い続け、わくわくな未来のためにチャレンジできる新専攻

産業化や国際化、情報化など、近代以後のさまざまな取り組みは、便利で豊かな暮らしを提供してきた一方、環境問題をはじめとする社会問題をもたらしています。社会が抱えるこのような重大な課題に対して、デザインとして何が提案できるかを考え、既存の枠組みや概念を超えて、より実験的・先端的なアプローチで取り組む新専攻「デザインB専攻」を2023年度から設置しました。
学生は、異なるテーマで設定された授業を自分自身で選択し、既存のデザイン領域だけでは捉えられないさまざまな諸課題に取り組み、人間とデザインについて総合的で根源的な理解を進め、デザインの意味と役割を拡張することを学びます。
未来を切り拓くプレーヤーとして、社会の中にある未知で未解決の課題を発見する能力を養い、従来のデザインの手法だけでなく、独自性、革新性と批評性を重視し、学生がコンセプトから実用的な解決方法までを自分たちで考え実行できるようになることを目指します。

EDUCATIONAL PHILOSOPHY
教育理念

基礎と応用、さまざまな領域を横断し、主体的に学ぶ学生を育てる

基礎と応用を横断して、多種多様な領域の課題を各自の関心に応じて主体的に選び、組み合わせることができます。また、学びたいことに合わせて学習の新たな選択肢を要望することが可能で、学生と専攻が共に学びを構築します。変化する社会に合わせて柔軟に成長し、自己を生成変化させることができる人物の育成を目標とします。

人文・社会科学的な学びを含むデザイン教育

デザイン理論に加え、人文・社会科学などを含む思考系授業と実技系授業の連携により、自然、社会などに対する知識と幅広い現代の諸問題と向き合い、問いを発見し、新しいデザインのあり方を生み出すべく挑戦し、実験的な態度で繰り返し、実践・検証を試みる志向性を養います。

名称「デザインB」について	専攻名であるデザインBの「B」は、「生成変化」を意味する“Becoming”から頭文字を取っています。これは、必要に応じて自分たちを組み替える私たちの姿の描写として、あるいはデザインの常に新しく生まれ、進化し変化していく営みの形容として適切な表現であると考えています。それ以上に、デザインのアウトプットやデザインのあり方を「これである」と指定しないメリットがあります。新しいデザインB専攻では、常に変化に適応し続けられるデザイン教育のシステムの構築と、絶えず変化していく新しい社会実装の形を実験的に模索していきます。「B」と省略したのは、学生が何を学べるか分からない環境にあえて自分の身を置く、つまりは自分の学びを主体的に創造していきたい、チャレンジしたいという資質を持った学生に、デザインB専攻を選択してもらいたいからです。デザインBでの学びを通して、不透明で分かりにくいこの現代社会を生き抜く能力、デザインする力を身につけてもらいたいと考えています。

DESIGN B

学年を横断した対話的な授業

ゼミや選択課題などの学年を横断した授業の中で、他者と議論し、幅広い視点と対話力を培い、自らの考えを表現する能力を身につけます。

CURRICULUM
実技カリキュラム

デザインB　3年次・4年次

デザインBを選択した学生は、文房具や器といった身近な生活のモノから社会の仕組みや問題まで、多岐にわたるテーマの中から、デザインの手法やプレゼンテーション方法、モノの仕組みや構造、素材や加工法の理解および制作プロセス、新しい技術を用いた表現法、また日常生活からの気づき(発想力育成)、人とモノと社会の関係性の理解などを学びます。４年次前期には社会とデザインの関わり、あるいは学生自身の興味のあることからテーマを設定し、問いを立て、調査、文献を吟味し、フィールドに出たり実験したりしながら、一本の論文としてまとめます。後期には、その論文を通して掘り下げたテーマを、各自の卒業制作につなげていきます。

修士課程
デザイン技法などの実技系授業だけでなく、デザイン理論や人文・社会科学を含む調査・思考系の授業を関連付けながら学びます。それによって、デザイン領域内だけで有効な視点ではなく、人間・自然・文化・社会などに対する幅広く多面的な視点を身につけることを目指します。現代社会の諸問題を発見し、それに対する仮説を絶えず実践・検証するような実験的なデザインのあり方を探究していきます。そして、他者に教え伝えるということを重視し、教えることによって学ぶという側面を重視しています。

TEACHING STAFF
教員

髙井 節子　教授
専門 環境デザイン、芸術文化学

牛田 裕也　准教授
専門 機械工学、インダストリアルデザイン

谷川 嘉浩　講師
専門 哲学、教育学

非常勤講師
金原 佑樹
小池 清
上月 建太朗
田中 美有
谷川 宗繁
三宅 香帆
宗方 秀斗
森田 修斗
吉田 朝麻

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

コミュニケーションとものづくり体験をデザインする実践的アプローチ

体験のデザインの授業では、実践的なアプローチからデザインの可能性を見出すことを狙いとし、コミュニティカフェなどの地域の人々が集まる機会に成果発表を行います。全員で具体的なアイデアを出し合い、ワークショップをデザインしていきます。

日本文化に触れる

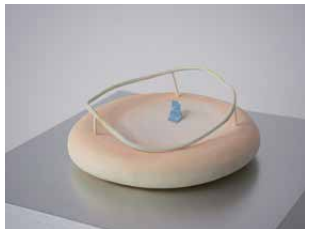
茶人の木村宗慎客員教授による、「侘び寂び」「枯れ」「真行草」といった美的判断や美的範疇の核心と、それが生成する歴史的プロセスを解説するレクチャーを行います。こうした美学・感性論について、寺社や茶室などで解説していただく研修も行います。その他、禅修行体験などさまざまな主題のレクチャーを通して、観察眼を鍛え、新たな見方や知識を得る機会を設けています。

アート×デザインB　工芸×デザインB　●▲■?×デザインB

デザイン科を越えて、彫刻専攻での金属実習や陶磁器専攻での制作など、他専攻との連携授業を発展・拡大させます。また、学外のさまざまな現場にも飛び込み、新たなスキルや視点を学ぶ機会を拡充します。デザイン領域外とコラボレーションすることで、表現や発想の選択肢を増やし、新しいデザインのあり方を探求していきます。

工芸科

陶磁器専攻



陶磁表現の可能性を探り「やきもの」の本質を探求

縄文時代から現代まで、「やきもの」は常に人の暮らしや地域・社会・芸術と関わって発展してきました。
陶磁器専攻では、「やきもの」の素材の理解と技術の修得をもとに、制作と研究を行います。作品制作を行う中で、機能と量産の考察、伝統技法からの展開、自由な思考による新しい表現など、さまざまな角度から陶磁表現の可能性を探り、陶磁器の本質を探求していきます。
陶芸の分野における確かな技術を修得し、専門的知識を生かした創作活動を行うことのみならず、社会において芸術の持つ可能性を認識し、専門的知識を活用できる人材を育成します。

CERAMICS

CURRICULUM
実技カリキュラム

陶磁器基礎A・B 2年次

2年次の前･後期、成形技術として「ろくろ」「タタラ」「手びねり」の修得、装飾技術として「呉須（ごす）」「鉄絵」「化粧」などの基礎的加飾方法と、「釉薬実習」で釉薬と焼成の基礎的知識を修得します。

陶磁器1・2 3年次

技術、素材などの制作プロセスから要素を発展させ表現へと導く期間です。「生活とやきもの」「表現とやきもの」「社会とやきもの」の3コースに分かれ、それぞれの課題に取り組みます。研究テーマ･制作予定期間など具体的な研究届を提出し、教員と適宜ディスカッションを経て、セメスター終了時には合評を行います。前期はすべてのコースで、磁器の技術として石膏型による成形とろくろ成形を学びます。後期はそれぞれのコース課題に取り組み、思考的な角度からの考察、歴史的観点からの考察、伝統技法からの展開など、制作を通じて陶磁表現の可能性を探ります。

陶磁器３ 4年次

“創造”と“表現”への展開の期間です。これまで修得してきた“素材”と“技術”を生かし、自主テーマによる制作を通して、新しい「やきもの」の世界を開拓し、各自の陶磁表現を目指します。後期は各自の制作を深め、卒業制作に取り組みます。

修士課程
陶磁器による表現について、歴史的観点を踏まえつつ、現代性を多角的に問い、制作と論理との関係を明確にすることを目的に各自の課題に基づいた自主的な制作・研究を行います。

TEACHING STAFF
教員

森野 彰人 教授
専門 陶磁器制作

若杉 聖子 准教授
専門 現代陶芸

上田 順平 准教授
専門 やきもの

西條 茜 講師
専門 現代美術、陶芸

非常勤講師
市川 正吉
木村 歩
城 愛音
冨部 咲喜子
前田 あかね
山川 美幸
山口 有加
山口 遼太郎

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

「集中講義」や「研修旅行」

非常勤講師による集中講義など、実践的な技術や表現を学び、現場の話を聞く機会を設けています。研修旅行では陶産地に足を運び、窯業関係工場、美術館などの見学や、登り窯実習など薪窯での焼成体験を通して、陶磁器全般に対する知識と理解を深めます。

学外研修と貴重な作品を収蔵する本学資料館

学外研修として各地のやきもの制作の現場や美術館、資料館などへの研修旅行を行っています。
また、本学資料館が所蔵する多くの作品からいくつかを選び、優れた作品に実際に触れて学ぶ機会を持つ授業も行っています。このような貴重な体験は自身の作品制作にとても役立つことになるはずです。

大学陶芸教育と学生の交流に関するオンライン企画

陶芸教育を行っている他大学との交流を進めています。オンラインツールを活用した大学における新たな陶芸教育の可能性を探り、学生の交流を図る企画です。今までは場所や移動など物理的制限から実現し難かった、幅広い参加者と密度のある体験を目指しています。内容は「学生による自作や研究内容のプレゼンテーション」（発表に対して所属大学以外の教員が講評を行い、参加学生は自由に質問できる）や、学生によるディスカッションなどです。

参加大学
愛知県立芸術大学 秋田公立美術大学 大阪芸術大学 沖縄県立芸術大学 金沢美術工芸大学 京都市立芸術大学 京都精華大学 嵯峨美術大学 多摩美術大学 東京藝術大学 東北芸術工科大学 名古屋芸術大学 武蔵野美術大学

「京式登り窯」の共同利用による体験実習

京都府立陶工高等技術専門校と京都陶磁器協同組合連合会後継者育成事業「寺子屋塾」との合同授業として、京都府宇治市の京焼炭山協同組合が所有する「京式登り窯」を、組合の先生方のご指導のもと体験します。薪割りから焼成を通して、京都の伝統的な焼成方法を学びます。

漆工専攻

URUSHI LACQUERING

漆の美を追求し、自由で創造的な漆工表現を学ぶ

漆工は、ウルシノキから採取された樹液を精製し、塗料や接着剤として用いる、東アジアを中心に発展した、日本を代表する伝統工芸です。
本学漆工専攻は、木工・髹漆（きゅうしつ）・乾漆（複合）・加飾の４つの分野を基本に置き、一貫制作により自由で創造的な漆工表現を学びます。各自が現代に適応した新たな造形表現の可能性を探求するとともに、工芸では必要不可欠な機能性や用の美を追求します。必要な技術と計画性を身につけて、漆工表現の本質的意味を考えられる、次代を担う人材の育成を目指しています。
卒業後は、漆工分野だけでなく、デザイン・建築・現代美術の分野で活躍する者や、教員として後進の指導に当たる者も多くいます。

漆工専攻 ４分野

木工：木材を用いた制作です。主に木彫・家具・食器などを作ります。
髹漆（きゅうしつ）：漆の塗りを主体とした制作です。呂色・塗り立て・変わり塗りなどの技法があります。
乾漆（複合）：麻布と漆で素地を作る乾漆技法のほかに、さまざまな素材を使った複合的な制作をします。
加飾：漆の塗面に装飾を施します。蒔絵・螺鈿（らでん）・漆絵などの技法があります。

CURRICULUM
実技カリキュラム

漆工基礎Ａ・Ｂ 2年次

２年次の前・後期、漆芸の用具、漆の性質、木工具・機械などの使用方法、漆工全般の基礎実習と制作を行います。デッサン、木地（製図、箱、器、家具）、髹漆（器物および変わり塗り）、加飾（パネルに漆技法で装飾）、乾漆（立体造形・複合素材加工）の学習を重ね、それぞれの技法の要点を修得します。

漆工１・２ 3年次・4年次

木工・髹漆・乾漆（複合）・加飾のうち、希望のゼミを選択し、各専門分野を中心とした実習と自主テーマによる制作を行います。制作と実習は半期を区切りとし、成果として１年に２回の作品展示（前期展・作品展）を行います。４年次後期は各自の制作をより探究し、卒業制作に取り組みます。作品の初期段階では、担当教員だけではなく、専任教員全員の意見を聞ける場としてチュートリアル（個別指導）が行われます。また作品展示では合評を行い、作家としての意識の確立を目指します。通常の実習のほかに、各分野で必要な実習や外部講師を招いてのワークショップ、工房などの見学会や研修旅行も行っています。

修士課程
各自が提出する研究計画と、これまでに修得した技術をもとに、伝統技法の研究や技法実験を行い、芸術的思考の深化と展開を促し、時代に対応する発想力の養成を目指します。

TEACHING STAFF
教員

栗本 夏樹 教授
専門 加飾、漆造形

安井 友幸 教授
専門 乾漆、漆造形

笹井 史恵 教授
専門 髹漆（きゅうしつ）、乾漆

大矢 一成 准教授
専門 木地、木工

非常勤講師
北浦 雄大
公庄 直樹
佐々木 萌水
佐藤 由輝
城 愛音
矢野 洋輔

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

地域連携事業

京都市南区役所主催で2024年3月1日～20日にワコールスタディホール京都で開催された「下京・南まちなかアート」に工芸科として協力し、漆工専攻の学生も作品を展示しました。

研修旅行

例年5月から6月にかけて、石川県輪島漆芸美術館では、漆芸コースがある全国の大学から卒業・修了生の作品が一堂に会する展覧会が開催されます。そのギャラリートークとシンポジウムの日程に合わせて輪島へ研修旅行に行きました。産地見学を通して、漆芸への思いをより一層深めることができました。

あいづまちなかアートプロジェクト「会津・漆の芸術祭」への参加

「あいづまちなかアートプロジェクト」は、歴史と文化が刻まれた会津のまちなかを舞台として、会津の文化資源である「漆」をテーマとした「会津・漆の芸術祭」と、地域が誇るアーティストの優れた芸術作品などを展示する「まちなかピナコテカ」を融合した文化振興イベントとして2013年度から開催しています。地域に息づく文化は、年月をかけて、多くの先人の力によって育まれ、現代の私たちへと伝えられてきました。このプロジェクトでは、芸術を通して、これまで大切に受け継がれてきた地域の文化を発信し、次世代へとつないでいくひとつのきっかけとなること、さらには、記憶に残るアートと人、まちと人、人と人との出会いをつくり出し、アートの持つ創造の力で、会津の伝統・芸術文化の新たな可能性を探ることを目的としています。

工芸科

染織専攻

DYEING AND WEAVING

布と糸、色と形を自在に操る次世代のクリエイターへ

生まれたときに、あたたかく包み込んでくれた布。その後も毎日、私たちは布を身につけて暮らしています。このように、人と一番近い「布」を作り、それを彩る技法が「染織」です。この「染め」や「織り」の技法は、人類の歴史とほぼ同じだけの悠久の歴史を持ち、未来も人と共にあります。生命を保持するためだけではなく、美を求める人の心に寄り添いながら、生活をしっかりと支えているのです。
染織専攻では、太古の人類と同じように、羊毛や麻綿の繊維素材と出会うところから、染織技法へ進化する過程を体験しつつ、さまざまな染料を使って、布に独自の色彩と形態を定着させることを試みます。そうした制作工程を通して、染織特有の自己表現を模索し、新たな視点を持ったクリエイターを育てることを目指しています。

CURRICULUM
実技カリキュラム

染織基礎A・B 2年次

前期の染織基礎Aでは、染技法を中心にろう染制作、プリント表現、型染制作、植物染料実験などを行います。後期の染織基礎Bでは、織、繊維を中心に繊維造形実習、繊維素材研究、織物制作、技法研究（フェルト・ニットなど）に取り組み、最後にA・Bで学んだ技法・素材で自由制作に取り組みます。
前・後期を通し、ドローイングやデッサン、染色実験なども行います。

染織1・2 3年次

さまざまな繊維素材を用いて、より専門的な染織技法や知識を修得し、作品制作に必要な表現力や技術力、構想力を高めます。また、レクチャーや工房見学、学外との連携プロジェクトなど、染織の文化や歴史、現代社会との関わりに対する理解を深めます。

染織3 4年次

各自がテーマを設定し、計画を立て、それぞれの課題に応じた作品制作を行います。プレゼンテーションや合評、グループでの討論や教員からの指導を通して、制作意図を明確にし、自らの制作の原点を探ります。独自の表現や次世代のものづくりを追求し、卒業制作を進めます。

TEACHING STAFF
教員

藤野 靖子 教授
専門 織物

日下部 雅生 教授
専門 型染、染造形

藤井 良子 准教授
専門 テキスタイル

安藤 隆一郎 准教授
専門 蝋染、身体翻訳

上野 真知子 特任教授
専門 ファイバーアート

非常勤講師

片岡 淳
酒井 沙織
城 愛音
立崎 菜美子
西川 和子
伏木野 芳
細田 あずみ
村田 ちひろ
森 絵実子

招聘講師による京友禅のワークショップ

修士課程
染織という表現手段を通じて、歴史と現状を含めた工芸と美術全体への認識と理解を深めます。作家としての確かな意識の確立のために、各自が研究計画を立て制作します。すでに修得した技法だけでなく、幅広い視野と表現力を身につけ、創造力を深めます。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

４芸大染織専攻作品展

2013年に開催された金沢美術工芸大学と京都市立芸術大学の交流展をきっかけに、東京藝術大学、沖縄県立芸術大学と４芸大で学生間の交流を目的として展覧会を開催しています。

伝統工芸プロジェクト

一般財団法人京都染織会館が設立した、本学染織専攻の学生に対する奨学および教育奨励･推進のための奨学基金によってこの授業は開設されています。京刺繍や京友禅、西陣織など、京都府下の伝統的な染織産業継承に資するプログラムです。

研究機関との連携事業

京都市産業技術研究所と連携して授業を行っています。「紋織実習」では、デザインから紋データ作成、力織機を用いた製織という一連の工程を学びます。

学外の選抜展に出品

NIF·YOUNG TEXTILE（日本インテリアファブリックス協会主催の美術系大学優秀作品選抜展）、京都府新鋭選抜展、全国大学選抜染色作品展、日本新工芸学生選抜展、下京・まちなかアートなどに出品しています。

外部講師を招いてのレクチャーやワークショップ

他大学の先生、作家、キュレーター、企業･産業に関わる方々など、多方面から専門家を招いてレクチャーを行っています。

学外での研修など

東本願寺渉成園、やまなみ工房、さまざまな美術館やギャラリーなど、必要に応じて学外の施設を訪問しての研修も行います。

やまなみ工房見学

総合芸術学専攻

GENERAL SCIENCE OF ART

教員インタビュー｜YouTube

芸術学研究室ウェブサイト

芸術の生まれる現場を熟知した発信力ある研究者・企画者へ

現代社会にあって、芸術や文化を巡る状況は大きく変化し多様化しています。それに応じて芸術を対象にする研究領域も広がりを見せ、実践的に芸術に関わる人材が求められています。
総合芸術学専攻は、総合「芸術学」とあるとおり、広義の芸術を対象として研究を行います。①対象についてのさまざまな知識・情報を集め、②それを整理して理解し、③自らの考察を加えて新たな知見を導き出し、④それを外部に広く伝える、という一連の知的生産プロセスを身につけることを目的とします。
卒業論文を優れたものにすることを第一の目標とし、加えて次のような教育に力を入れています。またこの部分こそが、「総合」芸術学のゆえんであると言えます。

EDUCATIONAL PHILOSOPHY
教育理念

一連のプロセスを芸術の現場で学ぶ

他専攻の学生と一緒に実技を学ぶ場を設けているため、芸術の生まれる現場を間近で知ることができます。そうした環境を生かし、展覧会の企画・運営の授業が設定されています。芸術の現場で学ぶことは、制作技法の理解はもちろん、芸術家という存在のあり方を肌で知ることにつながり、研究に役立ちます。 また、日本の古典的な芸術の中心である京都という地の利を生かし、毎週教員が引率して見学に行く授業を必修としています。

幅広い発信力を身につける

一般に芸術学系の専攻の場合、口頭発表・レポート・論文・プレゼンテーションといった形式に限られますが、本専攻ではそれに加えてものづくりの基礎力をベースにした表現方法を学びます。具体的には、原稿を書くとともに、印刷物作成に必要な編集やレイアウト、写真やビデオの撮影と編集なども学びます。またインターネット経由の発信をするためのスキルも学びます。

TEACHING STAFF
教員

非常勤講師　奥井 素子　中野 ふくね　藤木 晶子　山下 晃平
岸本 光大　東 正子　藤田 瑞穂　横田 悠矢

吉田 雅子　教授
専門 染織工芸史

加須屋 明子　教授
専門 美学、芸術学

田島 達也　教授
専門 日本美術史

礪波 恵昭　教授
専門 仏教彫刻史

飯田 真人　教授
専門 美術教育

畑中 英二　教授
専門 窯業史、考古学

竹浪 遠　教授
専門 中国絵画史

深谷 訓子　准教授
専門 西洋美術史

砂山 太一　准教授
専門 デザイン、現代美術

CURRICULUM & SEMINARS
カリキュラム・ゼミ

１年次前期は全員総合基礎実技を受講し、１年次後期と２年次前期までは他専攻の実技を受講することができます。
１年次後期は総合芸術学科基礎演習を受講し、２年次前期では展覧会運営に関するノウハウを学び、後期にはインタビュー誌・映像を制作します。３年次からゼミに所属し研究テーマに向き合い、４年次には卒業論文としてまとめます。

総合基礎実技　1年次前期
１年次前期は他専攻の学生とともに共通の授業「総合基礎実技」を必須科目として履修します。
各領域に通じるテーマが設定され、テーマに基づく課題を展開していき、展示として成果を発表します。授業の形態は、関連講義のほか、ワークショップや、個人またはグループによる制作、学外研修、発表、合評などさまざまです。

実技基礎　1年次後期
歴史や理論に重点を置く一方で、芸術の実技教育を重要視しています。そのため、１年次後期には美術科、デザイン科、工芸科の基礎課程の中から１つを選択し、その分野における実技の基本を修得します。これにより、学生は理論的な学びと並行して、具体的な技術や実践的な方法を身につける機会を得ます。
また、講義科目は他科と共通ですが、語学や専門に関連する科目を幅広く履修します。

総合芸術学基礎　2年次
芸術学研究の基礎を学ぶために、調査研究の方法論や展覧会などの企画運営に関する基本を身につけます。これに加えて、インタビューを主軸に据えた冊子とビデオの制作を通じて、情報の収集と編集技術についても深く学びます。これらの活動は、芸術の理論的側面と実践的側面の両方を理解し、将来のキャリアに役立てるための重要なステップとなります。

合同演習・企画運営　3年次・4年次
企画運営の演習では、学生が主導で展覧会企画やワークショップの開催、アートブックの制作などを行います。学生は、企画、運営、広報などを通じて、アートプロジェクトの実践的な運用方法を学びます。

合同演習・編集発信　3年次・4年次
編集発信の演習では、研究室ウェブサイトを運営しています。「芸研日誌」「学内展覧会情報」「京芸関係者展覧会情報」「展覧会レビュー」などのコンテンツがあり、日々取材と執筆、更新作業に励んでいます。

ゼミ演習　3年次・4年次
各学生は、自分の興味に基づいて独自の研究トピックを選び、それに沿って卒業論文に向けた専門的な研究を進めます。週１回開催されるゼミでは、担当教員が学生の研究進捗についての指導とフィードバックを提供します。また、各学期の終わりには、学生が自らの研究成果を口頭でプレゼンテーションする合同発表会が行われます。これにより、学生は自身の研究を広く共有し、批評的な意見交換を経験する機会を得ます。

１ゼミ「芸術の歴史と理論」
美術史の方法論を主とし、芸術の歴史と理論に関する研究を行います。
担当教員：田島 達也、礪波 恵昭、竹浪 遠、深谷 訓子

２ゼミ「文化と感性の理論」
現代社会の中で多様化した文化現象を美学・感性論・文化論・メディア論・デザイン論・アーカイブ論の立場から学際的に研究することを目指します。
担当教員：加須屋 明子、砂山 太一

３ゼミ「芸術と社会」
工芸を中心ジャンルとしつつ、生活と美術の結びつきをテーマとし、歴史論的あるいは計画論的に研究します。
担当教員：吉田 雅子、畑中 英二、飯田 真人

卒業論文・作品展　4年次

４年次の終わりに、学生は自らの研究成果を卒業論文としてまとめて提出します。この論文は、各自が長期にわたり取り組んできた学問的な探究を結実させるものです。さらに、論文提出後には、美術学部全体の作品展で、研究内容に基づく展示や発表を行います。この作品展は、学生が研究したテーマや成果を、ビジュアルと解説を通じて幅広く観客に伝える重要な機会となります。ここでは、理論と実践が結びつき、学生の創造性と研究の深さが示されます。

修士課程（芸術学専攻）
専門分野と指導教員を定めた上で研究に従事し、より専門性の高い授業を履修します。１年に数回の研究発表が課され、その成果を修士論文としてまとめます。

修士課程

GRADUATE SCHOOL OF ARTS
MASTER'S COURSE

PURPOSE OF RESEARCH
教育・研究目的

美術研究科修士課程は、独創的で多様な研究を背景に、幅広い視野のもとに専門性を深め、もって高度な創造・研究能力を有する人材を養成し、国内外の芸術文化に貢献することを目的とします。

詳細は美術学部各専攻ページをご覧ください。

MAJORS
専攻

美術専攻	日本画 油画 彫刻 版画 構想設計
デザイン専攻	総合デザイン デザインB
工芸専攻	陶磁器 漆工 染織
芸術学専攻	芸術学
保存修復専攻	保存修復 ※

※ 大学院美術研究科のみの専攻

保存修復専攻
CONSERVATION

日本・東洋の古典絵画を主要な研究対象として、保存修復に関する理論・技術を学びます。文化財を未来へ継承していく上での多様な課題を解決できる人材となるべく、伝統的な絵画技法の修得、芸術学、美術史学、保存科学などの理論を横断的に学び、芸術を多角的に理解する能力を養うとともに、伝統絵画の修復技術を体得します。さらに自ら課題を設定して研究・制作に取り組みます。

TEACHING STAFF
教員

宇野 茂男 教授
専門 日本絵画、保存修復

竹浪 遠 教授
専門 中国絵画史

高林 弘実 准教授
専門 文化財科学

非常勤講師 | 鈴木 裕

博士（後期）課程

GRADUATE SCHOOL OF ARTS
DOCTORAL COURSE

PURPOSE OF RESEARCH
教育・研究目的

指導教員によるアドバイザー制をとりながら、各自が設定した研究計画に基づき、演習・制作・研究を進めます。修了時には作品および論文でその成果を発表します。

詳細は本学ウェブサイトををご覧ください。

RESEARCH AREAS
研究領域

日本画
油画
彫刻
版画
構想設計
総合デザイン
デザインB
陶磁器
漆工
染織
芸術学
保存修復
産業工芸・意匠 ※

※ 博士（後期）課程のみの研究領域

産業工芸・意匠
INDUSTRIAL CRAFTS DESIGN

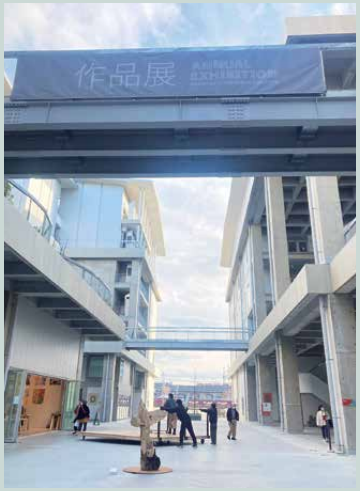
伝統産業のための意匠を提案する作家やデザイナーを育ててきた本学の伝統を踏まえ、現在では専門化・細分化した工芸・デザインのノウハウを持ち寄り、複合的研究の場を醸成すべく、博士（後期）課程のみに創設された研究領域です。伝統的な工芸意匠、加飾などのデザインを研究し、その応用化・産業化を目標に研究する工芸領域の学生と、「京都デザイン」さらには「日本デザイン」の創出を目指すデザイン領域の学生の双方に開かれた研究領域です。

＊工芸領域の教員と、デザイン領域の教員が連携し、学生の研究に対応します。

美術学部
大学院美術研究科
共通

作品展

ANNUAL EXHIBITION



搬入・陳列・搬出まですべて学生自らが行う
美術学部・修士課程最大のイベント

作品展　特設サイト
https://kcua-sakuhinten.com

少人数の本学だからこそ「発表の現場」を1年次から経験

本学の作品展は、美術学部・大学院美術研究科修士課程最大のイベントです。他大学と異なり、卒業・修了年生だけでなく、学部1回生から大学院修士課程2回生までの全学年が作品を展示します。毎年作品を作り上げ、搬入・陳列・搬出まですべて学生自らが行います。学部生にとって、卒業までの4回の作品展への参加は、発表の現場での緊張感と経験値を得るためにも非常に貴重な機会です。

高校生等のための作品展ギャラリートーク

美術学部受験を考えておられる方を対象として、2024年2月の作品展会期中、ギャラリートークを開催しました。
三橋卓講師が司会を務め、美術学部の11の専攻の学生と指導担当教員が作品について解説しました。

FACULTY OF MUSIC

音楽学部

音楽学科　作曲
指揮
ピアノ
弦楽
管・打楽
声楽
音楽学

「京都市立音楽短期大学」
創立当時の合奏授業風景
1952–55（昭和27–30）年

GRADUATE SCHOOL OF MUSIC

大学院音楽研究科

修士課程 / 博士（後期）課程

修士課程のみの専攻　日本音楽研究

個性を尊重した創造性を育む専門的な教育研究により、幅広い教養を有し、社会に対して発信し芸術文化に寄与できる優れた音楽家や、研究者となり得る人材を育成します。

CURRICULUM

4年間の学び

みんなが仲間でみんながライバル
刺激し合える状況が成長を支える

音楽学部は一学年の定員が65名と少人数です。自分の専攻の同級生や教員はもちろん、先輩や後輩、そして他専攻の学生や教員、全員と知り合いになります。その少人数制のもと、日々の練習や授業を共にし、オーケストラなどの演奏を作り上げていく仲間としてのつながりを深めていきます。時にはコンクールに挑戦するライバルとして、刺激し合える環境を作り出しています。新入生にとって、学部や修士課程の先輩の演奏や研究に触れる機会が多いのも、この人数規模だからこそ。
音楽家や研究者へと成長していく上で、技術を磨いたり、研究課題に向かうだけでなく、喜びも苦しみもみんなで分かち合えることは、京都芸大の大きな魅力の一つです。

専攻別募集人数

	専攻	人数
音楽学科（65名）	作曲専攻	合わせて4名
	指揮専攻	
	ピアノ専攻	14名
	弦楽専攻	14名
	管・打楽専攻	16名
	声楽専攻	14名
	音楽学専攻	3名

演奏会は月1回以上
場数の多さが自信につながる

音楽学部・音楽研究科は、学生の演奏会出演の機会が非常に多いことが特徴です。市内各地で行われる大小さまざまな規模のコンサートは、難解な現代曲から、小さなお子さまやご年配の方にも親しめる作品まで幅広い演目で開催されており、その完成度の高さには定評があります。企画の段階から広報まで、学生が参加するものも多く、演奏能力だけでなく、企画力やコミュニケーション能力を高める機会にもなっています。

本学が主催する主な演奏会

- **定期演奏会**（オーケストラ公演2回、オペラ公演1回）
  夏冬2回のオーケストラ公演、オペラ公演を行っています。夏には、学内オーディションで選出されたソリストとの協奏曲を、冬には大規模な合唱曲を演奏するなど、学生たちにとって日頃の成果を発表する貴重な場となっています。

- **卒業演奏会**
  本学の堀場信吉記念ホールで、音楽学部各専攻から選ばれた卒業試験成績優秀者による演奏会を開催しています。

- **オーケストラ協演の夕べ**
  本学の堀場信吉記念ホールで、学内で選ばれた各専攻のソリストがオーケストラと協演。指揮専攻の学生も指揮者として登場します。

- **ピアノフェスティバル**
  学内オーディションによって選ばれたピアノ専攻生による演奏会を、本学の堀場信吉記念ホールで開催しています。

- **クロックタワーコンサート**
  京都大学と連携し、京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホールで、演奏会を開催しています。毎年さまざまなテーマのもと選ばれた曲を演奏するとともに、指揮者によるレクチャーをお楽しみいただいています。

- **京都国立近代美術館ホワイエコンサートシリーズ**
  京都国立近代美術館のホワイエで、年2回、開催中の展覧会にちなんだ演奏会を開催しています。作曲専攻と声楽専攻が担当します。

- **西文化会館ウエスティ「音暦（おとごよみ）」シリーズ**
  京都市西文化会館ウエスティと共催で、年2回、演奏会を開催しています。6月は管・打楽専攻、11月は弦楽専攻が担当し、さまざまな編成により演奏します。

- **文化会館コンサートシリーズ**
  京都市北文化会館との共催で2月に作曲専攻による新作発表会を行っています。

- **オータムウィンズフェスト**
  管・打楽専攻による吹奏楽の演奏会を、本学の堀場信吉記念ホールで開催しています。

- **クリスマスチャリティーコンサート**
  京都市立京都堀川音楽高等学校音楽ホールで、京都新聞との共催によるチャリティーコンサートを開催しています。子どもも大人も楽しめる演目は毎年好評です。

その他の演奏会など

- **演奏旅行**（移動公演）
  夏期休業期間中に、有志の学生によってオーケストラを編成し、各地の学校に出向いて公演を行っています。

- **実技試験**
  実技試験の一部を一般の方にも公開しています。演奏会でもあり、試験でもある独特な緊張感のもと、学生たちが演奏します。

芸術の土台となる教養を身につける授業内容

学生が専門分野における技術と知識を学び、感性を養うとともに、あらゆる芸術の土台となる幅広い教養を身につけることを目的に、専門的な内容である専攻実技と併せて、広く音楽的教養を身につける音楽史、音楽理論関係の授業・演習、一般教養科目、語学科目を開講しています。

※卒業に必要な124単位を、４年間で履修します。
※専攻によって、必修科目と受講可能な選択科目が異なります。

カリキュラムの詳細はシラバスをご覧ください。
本学ウェブサイトでも閲覧いただけます。

オーケストラの授業

卒業演奏会

金管アンサンブルレッスン

声楽レッスン

必修科目

講義・演習科目

実技レッスンに加え、ソルフェージュ、西洋音楽史、音楽音響学、和声法など、学術系の科目の履修を通して、音楽演奏に関わる精神的な根幹を持ち、幅広い知識を有する音楽家・研究者の養成を目指しています。

ソルフェージュの授業

選択科目

専門科目

楽曲分析、管弦楽法、民族音楽学、音楽学特講など、受講科目は専攻によって異なりますが、卒業に必要な最低単位数124単位中の５～６割は、この専門科目に属します。

一般教養科目

文芸学、文化人類学、西洋文化史、日本文化史、心理学、社会学などを開講しています(一部は隔年開講)。

保健体育科目

体育実践を通して幅広い教養や総合的な判断力を培い、心身のバランスのとれた学生生活の確立と豊かな人間性を育みます。

語学(外国語)科目

英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語のすべての語学においてネイティブスピーカーによる会話に重点を置いた授業を行っています。また、上級グレードの授業では、音楽文献を原語で読み、理解することを目的としています。

自由科目

教職に関する科目などを開講しています。

〈教職課程〉 P.68

教職に関する科目を履修することにより、中学校教諭一種免許状(音楽)と高等学校教諭一種免許状(音楽)を取得することができます。教職課程の意義を十分に理解し、履修方法や手続きなどに間違いがないよう周到な計画と準備をして臨んでください。

STUDENT'S VOICE FACULTY OF MUSIC

音楽学部 在学生の声

※学年は2024年度のものです

基礎を鍛え上げるカリキュラムと、意見交換しやすいアットホームさ。

作曲専攻4回生　中野 宏紀 さん

京都芸大の作曲専攻は、国内の他大学の作曲専攻と比べるとエクリチュールに重きを置いた非常に特色あるカリキュラムとなっています。

1、2年次では和声法や対位法、フーガの書法を徹底的に学びますが、最初に基礎を鍛え上げていただいたことが、その後の作品制作において大きな助けとなっていることを実感しています。

3、4年次においては、自作品を演奏専攻の学生に演奏してもらう機会が一気に増えます。室内楽や管弦楽、電子音楽と、自分の表現に必要なスタイルで自由に作品を制作することが可能です。そしてこの作品発表の場は、少人数制の大学ならではのよさが強く感じられる瞬間でもあります。楽器のさまざまな奏法を詳しく尋ねることも、リハーサルで互いに意見をスムーズに交換できることも、アットホームなこの環境だからこそできることと実感する毎日です。

学生が自主的に考え、答えを導き出せるようにサポートしてくれます。

指揮専攻4回生　東尾 多聞 さん

「音楽家としての指揮者」になるための本質的なアプローチを学ぶことができます。単に棒を振るバトンテクニックを学ぶのではなく、楽曲の大まかな構成から細かな音符の一音に至るまでの意味を考え、それらがどのような効果を楽曲に与えているかなど、音楽の本質的な内容を中心に学びます。

カリキュラムの中で学ぶ和声法や対位法、音楽史などの知識を、ただの知識としてとどめるのではなく、それを演奏にどう結びつけるか、といったところまで探求し、実践するための実地の機会も多く用意されています。

指揮専攻で学ぶ中で特に感じるのは、先生方は答えを教えるのではなく、学生が自主的に考え、答えを導き出せるようにサポートしてくださっていることです。 私は、このように恵まれた環境の中、尊敬する先生方のもとで音楽を学べることを非常に嬉しく感じています。

第一線で活躍する先生方が、真剣に向き合い指導してくれます。

ピアノ専攻4回生　生駒 由奈 さん

個人レッスンでは、第一線で活躍されている先生方が、一人ひとりの個性・音楽性を理解した上で、私たちと真剣に向き合い、きめ細かく丁寧にご指導してくださるので、毎回新しい発見をしては自分の成長を実感しています。
ピアノデュオや、伴奏、室内楽のレッスンでは専任の先生以外のレッスンも受けることができ、ソロでは味わえない仲間と演奏する楽しさを実感するとともに、ピアノの持つあらゆる可能性を探求することができます。学内リサイタルやピアノフェスティバルなど、ソロや伴奏を問わず、本番の機会が多くあるのも魅力の1つです。新校舎のもとで、同じ音楽の道を志す素晴らしい仲間と共に、4年間大好きな音楽とじっくり向き合うことができる、この環境に感謝しながら日々の学生生活を送っています。

他専攻の先生方からのアドバイスも。視野を広げる貴重な機会です。

弦楽専攻4回生　木村 美香 さん

2023年秋に移転してから、半年が経ちました。
新キャンパスは、「テラスのような大学」の名の通り開放感があり、より京都という土地を密接に感じられる環境になりました。
弦楽専攻は一学年14名。少人数制ではありますが、その分1回生の頃から演奏の機会を多く持てます。バロックから近現代に至るさまざまな音楽を経験でき、学年を越えたアンサンブルの中で、個性豊かな音色や感性に出会えます。
専攻の先生はもちろんのこと、他専攻の先生方からアドバイスをいただくこともあります。広い世界で活躍する先生方の指導のもと、自らの視野を広げる貴重な機会が得られます。演奏機会も多く休む暇はないですが、自分の望むままに音楽とじっくり向き合えるこの環境に喜びを感じています。

先生との距離の近さと熱心な指導は少人数ならでは。

声楽専攻3回生　片平 颯太 さん

私が思う声楽専攻の特色は、先生方と学生の精神的な距離が近いことです。先生方の目は学生に行き届いており、私たちが求めればいつも持てる能力を最大限に発揮して私たちを支援してくださいます。そのような熱心な指導のおかげで私たちは舞台で自由に歌うことができるのです。声楽専攻特有の科目にオペラ・合唱・重唱・ディクション等があります。これらの科目は声楽の専門知識に留まらず、西洋の文化的背景から音楽表現につながる指導を受けられるので歌手としての成長に欠かせない要因です。講義の中で音楽を理解し、表現できたときの喜びは私が歌い続ける原動力にもなっています。また、他の専攻生と関わる機会が多いことも少人数制である本学の特徴です。異なる楽器を演奏する友人たちとの議論は、常に新たな視点をもたらしてくれる最も楽しい瞬間です。

異なる楽器を演奏する学生同士が切磋し合える環境です。

管・打楽専攻4回生　松本 宗大 さん

国内外で活躍されている先生方からレッスンを受けることができ、ソロの作品に加えて、アンサンブルや吹奏楽などさまざまな編成の作品に取り組んでいます。定期演奏会や「音暦（おとこよみ）」シリーズなど、レッスンや授業で学んだことの成果を発表する場が多く設けられ、舞台に立つ音楽家に求められているスキルを身につけることができます。
少人数制ということもあり、異なる楽器を演奏する学生同士がより親密に、そしてお互いを刺激し合いながら日々勉強に励んでいます。
新校舎へと移転し、「堀場信吉記念ホール」や「笠原記念アンサンブルホール」をはじめ、多くの充実した施設が備わっています。切磋し合える仲間と共にこのような恵まれた環境で音楽を学べることに感謝します。

自分の興味に合わせて幅広く学べる環境が魅力です。

音楽学専攻4回生　松本 愛布 さん

私は現在、日本人を対象とするK-POPツーリズムについて研究を行っています。私が所属する音楽学専攻では、履修科目の自由度が高く、音楽に関する知識や理論だけではなく、副科の実技科目も履修できます。その中で、定期演奏会に向けた冊子作成は大きなイベントの1つです。実技系専攻の学生も参加できるため、学年や専攻に縛られず、縦横のつながりを深められる機会になっています。3回生になるとゼミに配属され、研究の専門性を高めることになります。院生も含む合同ゼミに参加して、他の学生の研究発表を聞いたり、専攻の先生方や学生たちから質問やアドバイスを受けたりすることで、自分の研究だけではなく、他の音楽研究分野に関する学びも深めることができます。手厚い指導を受けながら、さまざまな刺激を受けることができる環境―これが、少人数体制である京芸の音楽学専攻ならではの魅力だと思います。

作曲専攻

COMPOSITION

「令和５年度（第53回）卒業演奏会」（2024年３月20日）

文化会館コンサート「Birth of Music」（2024年２月２日）

音楽的基礎力を養い的確に表現できる 高度な作曲技法を修得

作曲家が書き残す作品はさまざまです。過去・現在を通し、作曲家の音楽創造への思いは、一つとして同じものはありません。
大学で作曲を学ぶ学生も、一人ひとりそれぞれに音楽表現したいものがあり、それらは多種多様であるため、同じ作品に仕上がろうはずがありません。自らの思いを的確に表現できる高度な作曲技術を身につけるために、確かな音楽的基礎力をきちんと養うことを、作曲専攻の主たる教育目的とします。併せて、他分野の表現方法を取り入れるなど、幅広く多様な領域とも積極的に接することで、独自の作品を作ることのできる人材を育成します。

CURRICULUM
実技カリキュラム

少人数制ならではの学生と教員の距離の近さを生かし、学生と教員が共に作品を創造していきます。
作曲専攻では、まず必須科目の「作曲理論クラス」で、和声法や対位法、楽曲分析法、楽器法、オーケストレーションなどの西洋芸術音楽の方法論を学び、徹底的に音楽的基礎力を養います。
そういった基礎を修得した後に進む「作曲クラス」では、学生は担当教員を自由に選べるので、作曲の過程で複数の教員の視点から助言を得ることができます。
「楽曲分析クラス」では、創作活動に必要な、作品への客観的な視野を持つ力を身につけます。また、音楽コンクールへの出品や海外留学など、キャリアアップにつながる指導も行うほか、世界の先端的音楽の分析法や他領域とのコラボレーションの仕方、邦楽、民族音楽へのアプローチ方法、現代社会とアートの関わり方などについて研究し、作曲力を高めます。
４年次では、各自のテーマで卒業制作を行い、演奏会で発表します。

TEACHING STAFF
教員

岡田 加津子 教授
専門 作曲

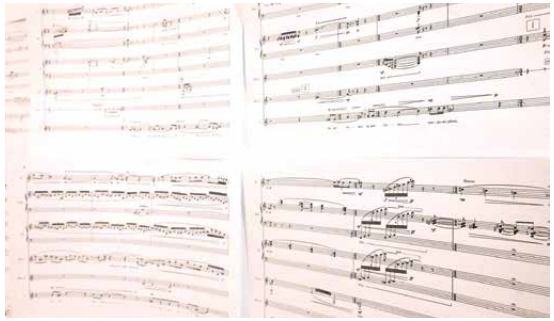
中村 典子 准教授
専門 作曲

酒井 健治 准教授
専門 作曲

非常勤講師
中本 芽久美
山口 友寛
山上 友佳子

修士課程
学部での研究のさらなる展開を課題とし、より多くのイベントに自主的に参加して、企画や制作を経験しながら、作曲者として自立することを目標としています。修了時は、修士作品または修士作品と修士論文を提出します。

毎年のオープンキャンパスでは学生による作曲作品の発表会と楽譜の展示が行われます。



SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

豊富な発表機会で作曲・発表経験を積む

学生が制作した作品は、他専攻の協力のもと、実際に音にして発表する機会を数多く設け、音楽家としての経験を豊かなものにしていきます。

京都市内で２つのコンサートを主催

地域への文化芸術の還元、地域文化への寄与、市民に対する良質な音楽の提供を目的として、専攻主催の演奏会を開催しています。

①京都国立近代美術館 ホワイエコンサート

年に1回、京都国立近代美術館1階のロビー（ホワイエ）において、開催中の展覧会にちなんだ作曲作品の発表演奏会を、作曲専攻が担当・実施しています。

「京都国立近代美術館ホワイエコンサート」（2023年6月24日）

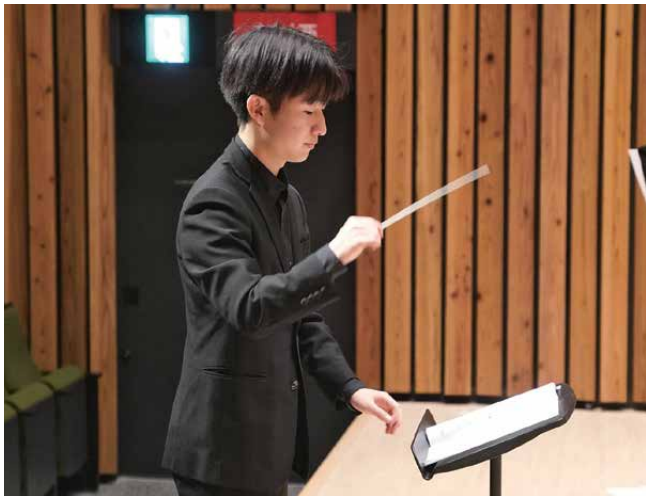
②文化会館コンサート「Birth of Music」

文化会館コンサートシリーズとして年に1回、京都市北文化会館において新作発表演奏会を作曲専攻が担当・実施しています。

文化会館コンサート「Birth of Music」（2024年2月2日）

指揮専攻

CONDUCTING



作曲家そして作品と向き合い 自分に相応しい指揮技術を探究する

指揮専攻の教育目的は以下の通りです。
①指揮棒を振り回す技術を学ぶことが最終目的ではありません。その前に、音楽家としての基礎能力を徹底して指導します。
②作曲家とその作品と会話（研究）したことを相手にストレートに伝えられる指揮の技術を、人の真似だけではない、自分に相応しい指揮技術として自分で見つけるように導きます。
③指揮者は、一人では音楽をすることができない不思議な音楽家です。いつも相手に敬意と愛情を持って指揮台に立ち、卒業後、プロとして活動していく姿勢を持てるように指導します。
本学では、プロの指揮者を育成するため全力を尽くすとともに、並行して人間的に価値のある音楽家を育成します。

「令和５年度(第53回)卒業演奏会（2024年３月20日）

CURRICULUM
実技カリキュラム

１年次ではモーツァルト、ベートーヴェンを中心に、２年次ではロマン派に分野を広げ、３年次からは近現代の作品に加え、オペラの作品などにもレパートリーを広げて実習します。４年次では自分の進むべき道を確固たるものにするため、４年間で学んだことの総仕上げを行います。
指揮者として必要な指揮法によるテクニック、リハーサルテクニックを個人レッスンに加え、本学のオーケストラや合唱、オペラなどに参加することで修得します。
学年を問わず、オーケストラなどの授業においての見学、リハーサルの代行指揮、客演指揮者のアシスタントなど、指揮をする機会を多く設け、経験を積むことができます。

修士課程
指揮実習を中心に指揮法を探究することにより、技術の熟成を図ります。また、各自のレパートリーを形成し、広げることによって、広く演奏分野で活躍できる指揮者を育成します。修了時は、その成果を修士演奏として発表します。演奏に加え修士論文を選択することも可能です。

TEACHING STAFF
教員

阪 哲朗　教授
専門 オーケストラ指揮

非常勤講師

粟辻 聡
上中 朝美
外村 雄一郎
中田 延亮
中本 芽久美
山上 友佳子

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

他専攻の取組との連携

他専攻の演奏会に、本専攻の学生が指揮者として参加しています。さまざまなスタイルの演奏会に関わり、数多くの本番を経験することができます。

「クロックタワーコンサート」(2023年5月21日)

「第172回 定期演奏会」(2023年12月2日)

オーケストラの授業の様子

「オーケストラ協演の夕べ」(2023年11月2日)

卒業生で指揮者の佐渡裕氏による特別授業
(2022年3月4日)

シルヴァン・カンブルラン氏によるオーケストラ特別授業
(2022年11月21日)

「第169回 定期演奏会」指揮：広上淳一客員教授
(2022年12月2日)

ピアノ専攻

「オーケストラ協演の夕べ」(2023年11月2日)

音楽学部オープンキャンパス(2023年12月17日)

作品を深く解釈し 地道に積み重ねて花開く 個性豊かなピアニストに

本来クラシック作品が内包している構成、論理、ドラマ、感情、そして作曲家の意図、美意識やスタイルなどをできる限り理解し、将来、独自の見識で演奏できるピアニストになるために必要な、基礎的な知識と技術を身につけることを目的としています。過去の巨匠の作品のよき解釈者となるためには、高い技術と感性、思考、伝統的な奏法や考え方といった裏付けに加えて、豊かな想像力が必要となります。
進歩がはっきりと目に見えるものや早急な結論を求めるのではなく、地道に積み重ねて少しずつ糧となり、一生を費やして追求することでやっと花開くものこそが、本当の成果であると考えています。

PIANO

CURRICULUM
実技カリキュラム

ピアノ専攻では、ソロ演奏の個人レッスンに加え、ピアノデュオ、伴奏、室内楽の実践的な指導も行い、ピアノ演奏のあらゆる可能性を身につけられるよう、多元的な教育を行っています。可能な限りレパートリーを充実させることを推奨していますが、最低限これだけは身につけてほしいという目安として、それぞれの学年ごとに試験の課題曲が出されます。

１年次にはバッハを含むバロック様式作品や練習曲、２年次ではメンデルスゾーン、シューマン、ショパン、ブラームスを含むロマン派様式の作品やソナタ作品を、３年次では規模の大きな作品、さまざまな曲によるプログラム編成、ピアノ協奏曲作品を理解・修得します。４年次にはこれまでの集大成として、広範囲にわたるピアノ作品から各個人の特性などを考慮し選択された任意の作品に取り組みます。

実技演奏指導のほか、「鍵盤楽器総論」「ピアノ演奏法特殊講義」などの授業をはじめとした講義・演習科目など多くの講座があり、音楽家に求められる広範な知識を修得できます。また、第一線で活躍している演奏家を招き、公開レッスンやレク

チャー、ミニコンサートなどの特別講座も行われており、普段のレッスンとは異なる角度から指導を受ける機会も設けています。

修士課程
演奏技術・表現力の向上を目指すとともに、理論的な考察・研究を行います。課程の修了に際しては、その成果を修士演奏として発表します。演奏に加え修士論文を選択することも可能です。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

ピアノフェスティバル

協賛：京都ライオンズクラブ

学内オーディションおよび推薦で選出された学生による演奏会で、ピアノ専攻の教育成果を市民の皆さまに披露する場となっています。本学の堀場信吉記念ホールで開催される本コンサートを通じて、学生たちは聴衆の反応や息遣いが感じられる中で表現力を磨く訓練をします。

その他、４年次の学生からの選抜者による学内リサイタル、定期演奏会の出演(選抜者)など、音楽家に求められる広範な知識を修得し、表現力を磨く機会が多く設けられています。

「第37回ピアノフェスティバル」(2023年6月11日)

TEACHING STAFF
教員

砂原 悟 教授
専門 ピアノ

上野 真 教授
専門 ピアノ

三舩 優子 教授
専門 ピアノ

田村 響 准教授
専門 ピアノ

髙木 竜馬 講師
専門 ピアノ

パスカル・ドゥヴァイヨン客員教授による
ピアノマスタークラス
(2021年10月5日)

非常勤講師

ピアノ
泉 麻衣子
岩井 理沙
岡本 麻子
兼重 稔宏
河内 仁志
喜多 宏丞
坂本 彩
坂本 真由美
佐野 えり子
塩見 亮
宋 和映
中谷 彩花
野元 佑美
林 直美
東山 洸雅
山口 博明

チェンバロ
パブロ・エスカンデ
中野 振一郎
三橋 桜子

「令和５年度(第53回) 卒業演奏会」(2024年3月20日)

弦楽専攻

「令和５年度（第53回）卒業演奏会」（2024年３月20日）

音楽学部オープンキャンパス（2023年12月17日）

多くの演奏経験を積み 作品が持つ「真の美しさ」を表現できる演奏家を目指す

将来、演奏家として社会に貢献できる人材を育てることを目標にしています。そのために、演奏技術や表現法のほか、さまざまな知識と知恵を身につけた上で、どの作品も自らの力で解釈し、演奏できる能力を養っていきます。
在学中にできるだけ多くの演奏経験を積むことで、音楽作品への理解と共感を深め、作品が持つ“真の美しさ”や自身が得た音楽の感動を世の人々に伝えられる表現力を培います。

「令和５年度（第53回）卒業演奏会」（2024年３月20日）

CURRICULUM
実技カリキュラム

１年次には基礎技術の確認と古典派を含む弦楽器のための作品を、２年次にはバッハの無伴奏曲などを含む弦楽器のための作品を修得することで、前半２年間に、演奏技術や表現法の基礎力の徹底を図ります。３年次には協奏曲とオーケストラ伴奏による独奏曲を含む弦楽器のための作品を、４年次にはこれまでの集大成として、広範囲にわたる弦楽器のための作品を修得することで、後半２年間にソリストとして、また室内楽やオーケストラ奏者として、どの分野にも要求される高度な演奏技術と表現力、そして高いアンサンブル能力を身につけることを目指しています。
弦楽専攻では、各々の個人レッスンで演奏上の基礎テクニックと表現法を修得し、室内楽、弦楽合奏、オーケストラの授業を通して合奏能力を身につけます。
年２回の独奏による実技試験のほか、各クラスで自発的な試演会も行います。また、オーケストラの定期演奏会が京都コンサートホールにおいて年２回開催され、ほかにも学内外で多数の演奏会に出演する機会があります。

STRINGS

TEACHING STAFF
教員

豊嶋 泰嗣 教授
専門 ヴァイオリン、ヴィオラ

戸上 眞里 准教授
専門 ヴァイオリン

上森 祥平 准教授
専門 チェロ

非常勤講師

ヴァイオリン
泉原 隆志
江口 純子
大谷 玲子
黒川 侑
西尾 恵子
ギオルギ・バブアゼ

ヴィオラ
小峰 航一
細川 泉

チェロ
福富 祥子

コントラバス
西口 勝

修士課程
より高度な演奏技術・表現力を追究し作品解釈のための研究や考察を行い、社会に貢献できる音楽家を育てることを目的とします。修了に際しては、その成果を修士演奏として発表します。演奏に加え修士論文を選択することも可能です。

音楽学部オープンキャンパス(2023年12月17日)

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

ウエスティ音暦(おとごよみ)

地域への文化芸術の還元、地域文化への寄与、市民に対する良質な音楽の提供を目的として、京都市西文化会館、京都市音楽芸術文化振興財団との共催により、「ウエスティ音暦」と銘打った演奏会を実施しています。2010年度から、年2回のうち1回を弦楽専攻が担当しています。

ウエスティ音暦(2023年11月25日)

管・打楽専攻

BRASS, WOODWINDS AND PERCUSSION

「令和５年度（第53回）卒業演奏会」（2024年3月20日）

音楽学部オープンキャンパス（2023年12月17日）

管・打楽器は「音のパレット」　さまざまな音色を操る適応力あるスペシャリストへ

管・打楽器奏者は、オーケストラやアンサンブルの一員となっても、ソリストとしての技量を求められます。管・打楽専攻は、その責任を負うに相応しい音楽家としての成熟を目指す方に開かれています。
在学中に、楽器を自在に操るテクニックを身につけることはもちろん、その楽器でしか出せない音色感の修得、バロック期からアヴァンギャルドに至る、あらゆる音楽作品に対応できる知識の獲得に努めます。ソリストとしての能力はもとより、オーケストラをはじめとするあらゆるアンサンブルへの適応力を持った奏者の育成に力を入れています。

「第３回 Flute Ensemble」（2024年３月８日）

CURRICULUM
実技カリキュラム

管・打楽専攻では、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォン、トランペット、ホルン、トロンボーン、バストロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、打楽器の中からいずれか１つの楽器（受験時に選択）を履修します。
１年次には教員との個人面談によって研究方針を定め、楽器のポテンシャルを最大限引き出すための基礎的な技術と知識を修得します。
２年次には古典派作品の演奏を中心に、音楽的文法の理解・修得に努め、基礎的な技術と知識を確立します。
３年次には19世紀から近代にかけての作品解釈の実践を通し、音楽的知識ならびに高度な演奏技術を修得します。
４年次には幅広い年代の作品を演奏研究し、演奏家としてキャリアをスタートするに相応しい演奏技術と知識を修得します。
専攻実技は原則として個人レッスンで行われ、エチュード、独奏曲、室内楽曲などを通し、それぞれの楽器の基礎的な演奏テクニック、各時代の一般的な音楽的表現法の修得に努めます。管・打楽合奏やアンサンブル、オーケストラの授業では、小編成のアンサンブルから吹奏楽や大オーケストラ作品に至るまで、アンサンブル

における演奏技術、表現法とともに各楽器の役割を学びます。
年に2回、独奏による試験、卒業時には30分程度のプログラムによるジョイントリサイタル形式の試験を実施します。

修士課程
より高度な演奏法、さらに理論面での研究を求めます。修了時には、独奏による修士演奏Ⅰ、室内楽による修士演奏Ⅱまたは修士論文の提出が課せられます。
※2024年度から、新たな楽器科目としてハープが新設されました。

「令和5年度(第53回) 卒業演奏会」(2024年3月20日)

TEACHING STAFF
教員

村上 哲 教授
専門 ホルン

加瀬 孝宏 准教授
専門 オーボエ

森本 瑞生 講師
専門 打楽器

非常勤講師 (※)は客員教授

フルート
中川 佳子
富久田 治彦
クラリネット
小谷口 直子
ファゴット
中野 陽一朗
サクソフォン
國末 貞仁
須川 展也 (※)
福田 彩乃

トランペット
早坂 宏明
トロンボーン
岡本 哲
バストロンボーン
小西 元司
ユーフォニアム
外囿 祥一郎 (※)
チューバ
武貞 茂夫

マリンバ
大茂 絵里子
打楽器
中村 功 (※)
堀内 吉昌
真鍋 明日香
管・打楽合奏
上田 希
國末 貞仁
福田 彩乃
外囿 祥一郎 (※)

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

「ウエスティ音暦(おとごよみ)」等のコンサート

京都市西文化会館、京都市音楽文化芸術振興財団との共催により、「ウエスティ音暦」と銘打った演奏会を2010年度から実施しており、年2回のうち1回を管・打楽専攻が担当しています。
また、本学の堀場信吉記念ホールで年1回、吹奏楽の演奏会を開催しています。
打楽器、金管楽器、木管楽器それぞれのアンサンブルや吹奏楽の魅力あふれるサウンドをお届けしています。

「ウエスティ音暦」(2023年6月3日)

声楽専攻

VOCAL MUSIC

「オーケストラ協演の夕べ」(2023年11月2日)

音楽学部オープンキャンパス(2023年12月17日)

身体そのものが「楽器」　幅広い視野を持つインターナショナルな声楽家に

声楽の一番の特徴は、身体そのものが「楽器」であることです。そのため、声楽専攻では、単に口から声を出すというだけではなく、それぞれの「楽器」をよく理解した上で、共鳴、呼吸法、発声テクニックなどを４年間の個人レッスンを通して実践的に学びます。
また、私たち個人の感情や性格までもがその「楽器」を通してそのまま反映されるため、技術の修得と同時にバランスのとれた人間性を目指すことも欠かせません。声楽テクニックだけに偏らない広い視野を持った学生の育成を目指します。

さまざまな言語によるテキストの習熟が必要なことも、本専攻の大きな特徴です。テキストの意味をより深く理解し、正しい発音によって表現することで、将来インターナショナルに通用する人材の育成を目標にしています。
卒業後は、国内はもとより、諸外国の歌劇場や放送局などで演奏活動を行っている者や、指導者として後進の育成に当たっている者など、音楽界に貢献すべく活躍の場を広げています。

CURRICULUM
実技カリキュラム

１年次には発声の基礎を学びながら、声楽についての知識をしっかり身につけていきます。イタリア語のディクション(発語法)をはじめ、イタリア古典歌曲などを中心とした個人レッスンを受けます。
２年次からは発声の基礎と並行し、他言語の歌曲やオペラのアリアなどに幅を広げ、内容を深めます。また、ドイツ語のディクションが加わります。
３年次は作品解釈の実践を通し、音楽的知識と高度な演奏技術を修得するほか、フランス語のディクションを学びます。さらに、重唱とオペラ実習の授業でアンサンブルや演技を通して舞台表現者としての基礎を固め、学年末に試演会で成果を発表します。
４年次にはより深い作品解釈の実践、高度な音楽的知識と演奏技術を修得し、日本語のディクションを通して詩の明瞭な発語と表現を学びます。演技や舞台表現の技術をさらに深め、学期末に試演会で成果を発表します。
４年間を通して、声楽の基礎となる発声の技術を修得し、それぞれの学生が持つ能力を高めるとともに、ヨーロッパの音楽を中心とした古典から現代までの歌曲やオペラ・アリア、日本歌曲など、さまざまな声楽曲を個人レッスンの形式で学びます。

その上で年２回、実技試験を行います。
このほか、定期演奏会の演奏曲目として声楽作品が取り上げられた場合には、ソリスト（オーディションによる）や合唱として参加します。
大学院オペラ公演や４年次のオペラ試演会の際には、助演、合唱として参加するほか、舞台の照明や衣装、大道具、小道具の準備などに関わります。その際、全学年の声楽専攻生が制作スタッフとしても参加することで、歌手の養成だけでなく、舞台の裏表の仕組みを明確に認識・体感しながら舞台を作り上げていく経験を積みます。

「令和５年度（第53回）卒業演奏会」
（2024年３月20日）

TEACHING STAFF
教員

久保 和範 教授
専門 バリトン

北村 敏則 准教授
専門 テノール

日紫喜 惠美 准教授
専門 ソプラノ

上野 洋子 准教授
専門 ソプラノ

小濱 妙美 特任教授
専門 ソプラノ

非常勤講師
相可 佐代子
日下部 祐子
清水 徹太郎
萩原 次己
福原 寿美枝
松原 友
松本 薫平

修士課程
各研究室において専門的な研究を行います。
修了時には、リサイタル形式による修士演奏Ⅰと修士論文の提出、または修士論文に代わる修士演奏Ⅱが課せられます。

●クラス授業
歌曲演習にはドイツ歌曲とフランス歌曲のクラスがあり、各専門の歌曲を研究します。声楽演習のクラスでは、専任教員による専門的な分野を題材に演習を行います。

●オペラ
オペラのクラスでは、オペラの公演を年１回行います。オーケストラ伴奏つきの本格的な舞台を一般公演として行います。（P.67参照）

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

オペラ試演会、歌曲コンサートを開催

「３回生オペラ」「４回生オペラ」の試演会を年に１回、一般公開しており、日頃の集大成として活気あふれる舞台を上演しています。
毎年２月には定期演奏会「大学院オペラ」を、大学院生のみならず学部生全員参加型で行い、一体感のある京都芸大ならではの催しとして親しまれています。
また、年１回、京都国立近代美術館１階ロビーにおいて、主に日本歌曲の演奏会を実施しているほか、京都市立京都堀川音楽高等学校音楽ホールで、京都新聞との共催によるチャリティーコンサートを開催しています。

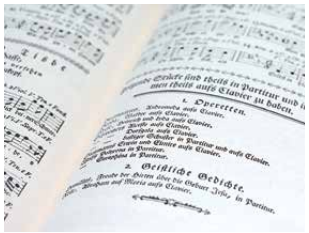
４回生オペラ試演会（2022年12月26日）

京都国立近代美術館ホワイエコンサート（2023年11月18日）

クリスマスチャリティーコンサート（2023年12月23日）

音楽学専攻

MUSICOLOGY



音楽・音、そしてそれに関わる人と社会―音楽学の広大なフィールドへようこそ

「音楽学Musicology」とは、音楽や音、音響とそれに関わる人間と社会など、音（楽）にまつわる事柄すべてを研究対象にすることができる学問領域です。
近年、音楽の領域では激しい勢いで多様化と拡散、複合化が進んでいます。西洋の古今のいわゆる芸術音楽のみならず、日本を含めた世界の諸民族の音楽、ポピュラー音楽、また環境音やノイズ、電子音響に至るまで、さまざまな音楽や音、音響が共存し、互いに影響を与えながら複合的な展開を見せています。
そうした近年の音楽文化の多様化とグローバル化に対応しながら、音楽学専攻では音楽に関するさまざまな知識や理論の修得に加えて、演奏、調査、実験など、より実践的な活動も踏まえたしなやかな知性と思考力を養い、多方面で活躍できる人材を育てることを目指しています。そのために、西洋音楽史、民族音楽学、音楽心理学と、それぞれ専門領域の異なる４人の教員が、１学年３名という少人数制の利点を生かして、学生一人ひとりの関心に応じた柔軟できめ細かな指導を行います。
また、本専攻には一般選抜に加えて、社会人特別選抜も設けられており、社会人の方々も実社会での経験を生かして学ぶことが可能です。
卒業後は、主に大学院に進む者と、就職して社会人になる者とに分かれます。

CURRICULUM
カリキュラム

1、２年次は、主に音楽学を学ぶ上で必要となる基礎的な知識や能力、研究に求められる学問的な思考力を身につけることに重点が置かれるほか、外国語の修得も目指します。また、幅広い教養や知識の運用能力が求められる現代社会に柔軟に対応できるよう、音楽以外のさまざまな授業も併せて履修します。
３年次からはそれぞれ志望する演習クラスに分かれ、各専攻教員のもとで専門的な研究を行います。プレゼンテーションやディスカッションを通して、実社会でも役立つ汎用的なスキルを磨くとともに、論文作法などの高度な学術的能力の修得も目指しながら、担当教員の個人指導のもと、最終的な研究成果を卒業論文としてまとめます。
少人数制の利点を生かし、異なるテーマに関心を持つ学生たちが互いに刺激し合い、共に学び合うことができる環境を提供します。

TEACHING STAFF
教員

太田 峰夫 教授
専門 西洋音楽史

川端 美都子 教授
専門 民族音楽学

池上 健一郎 教授
専門 西洋音楽史

正田 悠 講師
専門 音楽心理学

修士課程
学部時代に培った能力を基盤とした学術的意義の高い研究を目指します。専門科目を履修するとともに、担当教員の演習に参加して研鑽を積みます。担当教員からの個人指導を受けながら、課題探求・解決力や論理的思考に根ざしたコミュニケーション力を養い、最終的な研究成果を修士論文としてまとめます。優れた成果を上げた学生は、関連学会で研究発表を行うこともできます。

SEMINARS & ACTIVITIES
専攻のゼミや活動

インタビューやコラム記事の作成

音楽学専攻では、実技専攻の学生とも協力して、本学部の定期演奏会をより盛り上げるため、学内に向けた出演者インタビューやコラム記事の作成などを行っています。上級生になると、定期演奏会プログラムの曲目解説の執筆も担当します。

合同ゼミの定期開催

音楽学専攻教員全員が集まって行う合同ゼミも定期的に開催しており、研究室の垣根を越えて学生同士が刺激し合える環境が整っています。

大学院音楽研究科

修士課程

GRADUATE SCHOOL OF MUSIC
MASTER'S COURSE

MAJORS
専攻

作曲・指揮専攻
- 作曲
- 指揮

器楽専攻
- ピアノ
- 弦楽
- 管・打楽

声楽専攻

音楽学専攻

日本音楽研究専攻 ※

PURPOSE OF RESEARCH
教育・研究目的

修士課程は、個性を尊重し創造性を育む高度に専門的な音楽芸術の研究と教育を行い、音楽の専門的知識を生かして社会で幅広く活躍し得る優れた音楽家や研究者を育成することを目的とします。

詳細は音楽学部各専攻ページ(P.52-65) をご覧ください。

※ 修士課程のみの専攻

日本音楽研究専攻
JAPANESE MUSIC RESEARCH

日本の伝統文化を、音楽面を中心に研究します。伝統音楽の理論・思想・歴史を深く知るだけでなく、伝承の現場に参加し、観察して体験を深めます。学び得た知識を論文にまとめ、さらに一般向けに分かりやすく提示する手段を実践的に学び、伝統文化における音楽・芸能の理解を深めていきます。学術的な深い理解を踏まえた上で、伝統音楽・芸能の伝承と実践をサポートできる人材を育成します。

教員情報は日本伝統音楽研究センター (P.70) 参照

大学院音楽研究科

博士（後期）課程

GRADUATE SCHOOL OF MUSIC
DOCTORAL COURSE

PURPOSE OF RESEARCH
教育・研究目的

博士（後期）課程は、高度で専門的な音楽芸術の研究を行い、世界的に活躍し得る音楽家、音楽学者を育成することを目的とします。

詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

RESEARCH AREAS
研究領域

作曲・指揮

器楽

声楽

音楽学

定期演奏会

REGULAR CONCERTS

第171回定期演奏会(2023年7月10日)

第172回定期演奏会 (2023年12月2日)

日頃の鍛錬の成果を発表する大舞台

京都市立芸術大学の定期演奏会は、昭和28(1953)年に第1回を開催し、令和5(2023) 年に第170回を迎えた歴史ある演奏会です。夏・冬年2回のオーケストラ公演と、年1回の大学院オペラ公演の計3回開催しています。

第173回定期演奏会 大学院オペラティックコンサート『椿姫』(2024年2月18日)

オーケストラ公演

オーケストラ公演は京都コンサートホールで開催しており、古典から現代音楽まで幅広く楽曲を取り上げています。楽曲ごとに演奏者が替わることで、多くの学生に出演機会があり、プロの演奏家を目指す上で必要なアンサンブル能力の向上と大舞台での経験を積むことができます。

大学院オペラ公演

大学院オペラ公演は、平成25(2013)年から定期演奏会に位置付けられ、修士課程の声楽専攻生を中心に、音楽学部・音楽研究科がひとつとなって作り上げる充実した舞台です。出演者やオーケストラだけでなく、舞台装置づくりをはじめ、オペラに必要な準備のほとんどを学生自らが手がけています。きらびやかな舞台と学生たちの華麗な歌声をたっぷり楽しめるオペラ公演は、多くの観客の前で日頃の鍛錬の成果を発表する場となっています。

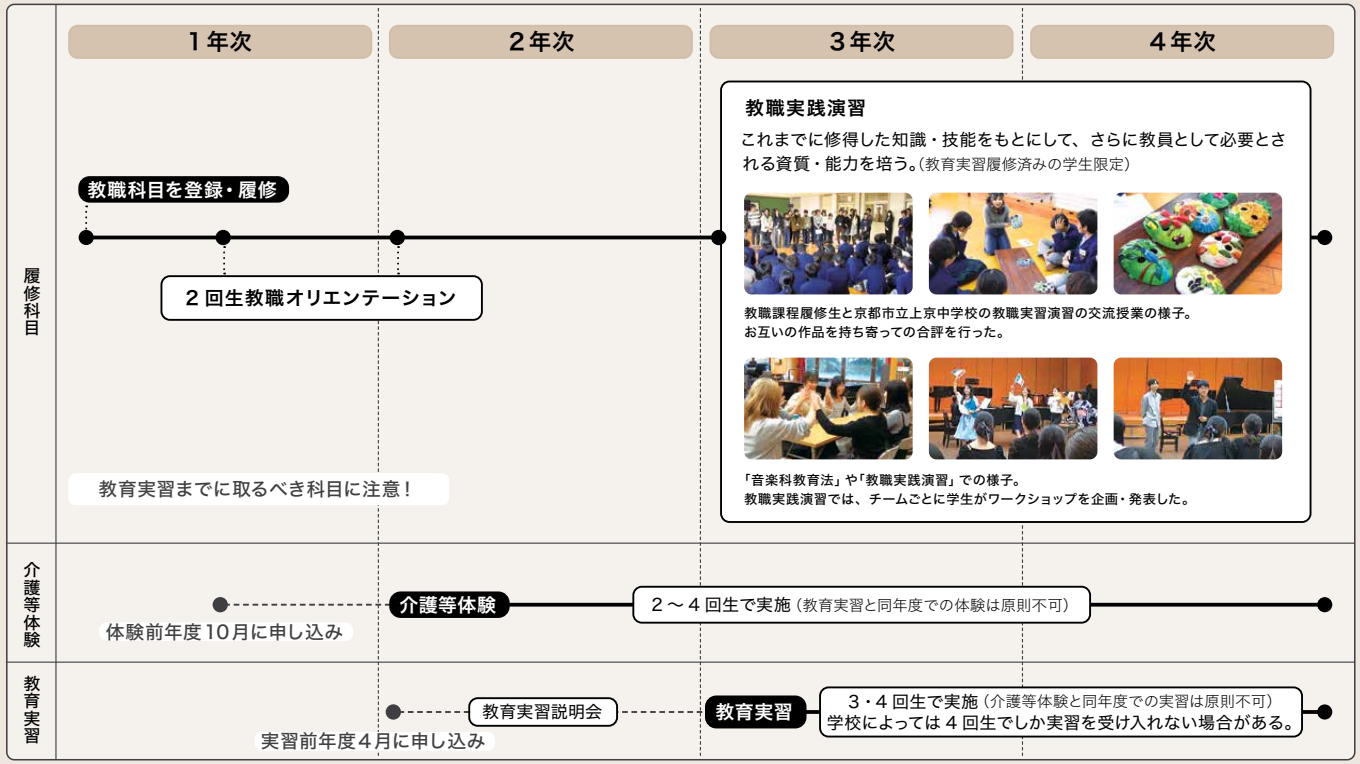
教職課程

TEACHER TRAINING COURSE

教職課程とは

教育職員免許法に基づいて、教育職員免許状を取得するために必要な単位を修得する課程です。免許状の取得を希望する場合、卒業に必要な単位数のほかに教職課程の単位を修得することが必要です。教職課程の意義を十分に理解し、履修方法や手続きなどに間違いがないよう周到な計画と準備をして臨んでください。

教職課程履修スケジュール



本学で取得可能な教職員免許状

美術学部

種類	教科	必要な実習・体験
中学校教諭一種	美術	・教育実習 3～4週間 ・介護等体験が必要
高等学校教諭一種	美術 工芸	・教育実習 2週間

美術研究科 修士課程

種類	教科	備考
中学校教諭専修	美術	・修士の学位を有する ・中学校教諭一種免許状を取得済み
高等学校教諭専修	美術 工芸	・修士の学位を有する ・高等学校教諭一種免許状(美術・工芸)を取得済み

※専攻によって取得できる免許状の種類が異なります。

音楽学部

種類	教科	必要な実習・体験
中学校教諭一種	音楽	・教育実習 3～4週間 ・介護等体験が必要
高等学校教諭一種	音楽	・教育実習 2週間

音楽研究科 修士課程

種類	教科	備考
中学校教諭専修	音楽	・修士の学位を有する ・中学校教諭一種免許状を取得済み
高等学校教諭専修	音楽	・修士の学位を有する ・高等学校教諭一種免許状を取得済み

TEACHING STAFF
教員

飯田 真人 教授
専門 美術教育

堀田 千絵 准教授
専門 心理学

清水 久莉子 特任講師
専門 音楽教育学

RESEARCH CENTER

研究センター

日本伝統音楽研究センター

本学には2つの研究センターがあります。

日本伝統音楽研究センターは、2000年に開設された、日本の伝統音楽を総合的に研究する国内唯一の公的研究機関です。

芸術資源研究センターは、2014年に開設されました。芸術作品や各種資料を芸術資源として捉え直し、将来の新たな芸術創造につなげることを目的としています。

芸術資源研究センター

日本伝統音楽研究センター

RESEARCH INSTITUTE FOR JAPANESE TRADITIONAL MUSIC

大学移転記念事業「祝賀能〈翁〉付〈高砂〉」(2024年5月3日)

世界的に注目を浴びる研究機関

伝統音楽・芸能に特化した貴重な資料を持つ研究のメッカとして

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター（通称：でんおん、伝音センター）は、2000年に創設され、20年を超える歴史を歩んできました。日本伝統音楽に関する情報・研究成果を発信する体制が軌道に乗り、さらに国際的な研究活動・交流が進展した今、伝音センターは、貴重な資料の宝庫であり、伝統音楽・芸能に特化した研究のメッカとして世界的にも注目されるようになりました。

現在、国内では国際日本文化研究センター、海外ではアメリカのスタンフォード大学音楽学部、スイスのジュネーブ高等音楽学院、および中国の山東大学芸術学院などと協定を結び、共同研究や講演会・コンサートの開催など、さまざまな活動を行っています。

第63回公開講座「雅楽の復元研究 ―院政期における打楽器の奏法と演奏速度の考察―」(2024年1月21日)

日本音楽研究専攻（修士課程）

2013年、大学院音楽研究科修士課程に日本音楽研究専攻（1学年定員3名）を設置したことで、専任教員と非常勤講師（特別研究員）が学生教育にも携わることになりました。

日本音楽研究専攻は、教育内容を基礎領域・特殊領域・応用領域の3つの領域に区分し、独自の段階的な学生教育を行っています。特に史資料の解釈、フィールドワーク、実技など、複数のアプローチを通じて対象をより深く理解すること、市民講座などの実践活動を通じて、広く社会に対して研究内容を提示できるようになることを重視しています。これまでに18名の学生が修士論文を提出して学位を取得し、社会に出て活躍しています。

学生の存在は、伝音センターの活動に活気をもたらします。近年は国際交流の進展に伴って、外国人留学生が増え、にぎやかになってきました。

TEACHING STAFF
教員

細川 周平 所長
専門 音楽学

藤田 隆則 教授
専門 民族音楽学

竹内 有一 教授
専門 三味線音楽

武内 恵美子 准教授
専門 日本音楽文化史

田鍬 智志 准教授
専門 音楽史学・民間藝能

齋藤 桂 准教授
専門 音楽学

特別研究員
鈴木 堅弘
根本 千聡
光平 有希

主な活動①

全国的・国際的レベルの研究センターとして

収集と保存
SP・LPレコード、オープンリールテープなどに収録されている無形文化財の音源をデジタル化し、公開活動を進めています。

調査と研究
年間で計50名ほどの共同研究員や演奏家が招聘(しょうへい)され、さまざまなジャンル・方法の調査研究を行っています。

啓蒙と公開
文献資料を収蔵する「図書室」では、学芸員と司書が日々地道な作業を続け、学術的研究の啓蒙普及と公開に貢献しています。

主な活動②

日本伝統音楽に対する「知」と「魅力」を共有するために

公開講座
日本の伝統音楽およびその研究活動を伝えるために、毎回、学外から演奏家や研究者などの豪華ゲストを招き、年3回程度開催しています。

伝音セミナー
SPレコードなどに残された音源を紹介する無料講座です。日本の伝統音楽に触れるのは初めてという方にも気軽に受講していただけます。

でんおん連続講座
専門的なテーマを扱う講座です。演奏などの実演を交えた説明と、歴史的資料、口伝書、楽譜などの演奏資料を読み進め、理解を深めます。

伝音センター図書室

収蔵資料数は約41,000点。本学の教職員、学生のほか、調査研究のために必要な方も閲覧・視聴いただけます。

紀要・所報・研究報告書・DVDなど

紀要・研究報告書などの学術出版物や、公開講座の様子が収録されたDVDなどを制作し、公開講座などの成果内容を、国内外の研究者および市民との情報共有と交流に役立てています。

研究センター

芸術資源研究センター

石原友明芸術資源展
美術作家石原友明についての芸術資源を、2種類の言説をまとめた「二冊の本」と、その他の関連資料・作品を用いて展示。(2024年3月20日~3月31日)

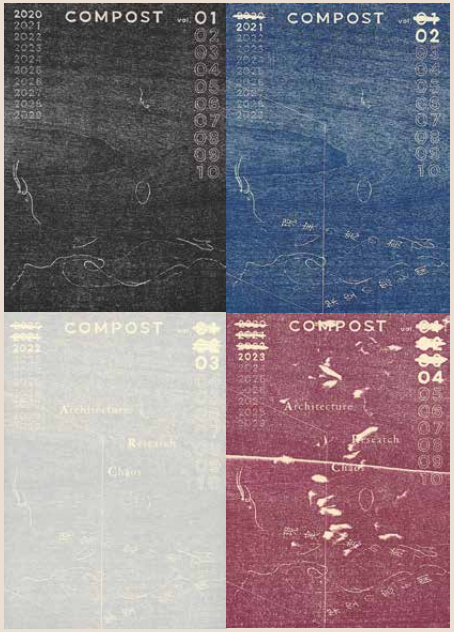
左：会場風景
右：『石原友明：彼以外による』
撮影：石原友明

新たな芸術を生み出す「創造のためのアーカイブ」

公式ウェブサイト
https://www.kcua.ac.jp/arc/

京都市立芸術大学 芸術資源研究センター（略称：芸資研）は、京都芸大に2つある研究センターのうちの1つです。
芸資研のミッションは、これからの芸術創造をうながす資源となる「創造のためのアーカイブ」とは何かを探究し、そのつくりかたを考え、実際にそれをつくっていくことにあります。
京都には、また創立144年を数える本学には、たくさんの「芸術資源」があります。これまでつくられてきた芸術作品や制作時の資料だけでなく、ものをつくるための環境・時代背景、さまざまな学問がもたらす知見、さらには経済や社会的仕組みまで、芸術の創造にはさまざまなものごとが関わっています。京都という都市、あるいは京都市立芸術大学という場は、こうした芸術資源について考えるのに最適な場所であると同時に、その宝庫といっても言いすぎではありません。
芸資研は、研究センター自身がひとつのテラスとなることによって、美術や音楽といった境界を越えた、これまでにない芸術がこのまちに生まれる交流の場になることをめざしています。
これまでの芸術についてふりかえるためのアーカイブではなく、これからの芸術を創造するためのアーカイブについて、芸資研ではさまざまな観点から、研究に取り組んでいます。

『COMPOST』vol.04 表紙制作の記録
本学の修了生である黒川岳さんがアートワークを担当。表紙を印刷する版木を沓掛の構内各所で叩きました。(2023年1月17日 12:00 沓掛キャンパス円形ステージ) 撮影：清水花菜



芸術資源研究センター紀要『COMPOST』
2020年に刊行を開始した芸資研の紀要で、年1回発行し ています。「COMPOST＝コンポスト」という名前には、資料の廃棄や、保存・蓄積される場所という意味と同時に、分解や堆肥化を通じた変化と再生のイメージが込められています。表紙には、毎号少しずつ変化する手刷りの版画を用いています。

ARCHIVAL RESEARCH CENTER

所長

小山田 徹 教授
美術学部・美術研究科

副所長

森野 彰人 教授
美術学部・美術研究科

副所長

岡田 加津子 教授
音楽学部・音楽研究科

専任研究員

佐藤 知久 教授
専門 文化人類学

特別招聘研究員

- 彬子女王
- 加治屋 健司
- 塩見 允枝子
- 森村 泰昌

非常勤研究員

- 高嶋 慈
- 滝 奈々子
- 竹内 直
- 埴 美智子
- 藤岡 洋

芸資研 YouTube チャンネル

キャンパスアーカイブプロジェクト
沓掛1980-2023

研究体制

芸資研の研究組織は、次の３つに分かれます。

スタートアッププロジェクト

新たに立ち上げる実験的・先駆的な研究プロジェクトです。これまで見落とされていた芸術資源に新たな光を当てたり、蓄積されたアーカイブを用いた実験的な活動などを行います。

重点研究ユニット

芸資研のミッションに関わる重要なテーマに関する、芸資研にとって最も重要な研究プロジェクトです。スタートアッププロジェクトの成果やこれまでの研究結果をもとに、学内外のアーティストや研究者が集まって、共有する課題について新たな視点から共同研究を実施します。

研究グループ

一定の成果を出した後に、特定のテーマについての研究活動や研究のためのネットワークを持続的に維持するためのグループです。

これまでの活動や現在進行中のプロジェクトからいくつかを紹介します。

沓掛 1980-2023
KUTSUKAKE 1980-2023

「沓掛 1980-2023」映像アーカイブ実験室

京都市立芸術大学移転の機会に立ち上がった「沓掛キャンパスの記録を写真で残す」プロジェクトです。学生・教職員・卒業生など、さまざまな方々から沓掛キャンパスの写真を提供していた だき、それを「大学に関係する個々人の集合体」としてまとめ、沓掛時代の京都芸大の記録をつくろうとする取り組みです。

これまでのアーカイブ研究会

第17回「エイズ・ポスター・プロジェクトを振り返る」
小山田徹（美術学部教員）、**佐藤知久**（芸術資源研究センター教員）、**ブブ・ド・ラ・マドレーヌ**（美術家）2017年5月17日

第24回「特集展示『鈴木昭男 音と場の探究』をめぐって」
奥村一郎（和歌山県立近代美術館学芸員）、**鈴木昭男**（サウンド・アーティスト）2018年12月16日

第41回「映像をアーカイブする〜その実践と可能性〜」
石山友美（映画監督・秋田公立美術大学准教授）2024年2月7日

大学施設

本学へのアクセスについては P.96 をご覧ください。

堀場信吉記念ホール

笠原記念アンサンブルホール

新しく生まれ変わったキャンパスから 文化の交流と発信を

京都の玄関口であるJR京都駅にほど近いキャンパスは、芸術を志す学生たちが夢や思索を具現化して世界の人々に届ける場所であると同時に、「文化芸術都市・京都」が未来に発展するための拠点でもあります。

UNIVERSITY FACILITIES

A 堀場信吉記念ホール

客席数が約800の講堂兼音楽ホールです。学内リサイタル、修士演奏、オーケストラ協演の夕べ、大学院オペラ、卒業演奏会などの演奏会のほか、入学式や卒業式などの式典を開催します。
ホール名には、1952年に創設された本学音楽学部の前身である京都市立音楽短期大学の初代学長である堀場信吉氏の名を冠しています。信吉氏は、4期13年もの長きにわたり学長職を務められ、京都市の音楽教育はもとより、現在に至る音楽学部の発展に多大な貢献をされました。こうした長年の功績を称えるとともに、信吉氏の名前を本学の歴史に刻み、末永く顕彰することとしたものです。

B 笠原記念アンサンブルホール

合唱やオーケストラなどの実技授業のほか、演奏会にも対応するホールです。
ホール名に名前を冠することとなった笠原健治氏は、本学音楽学部で35年の長きにわたり非常勤講師として後進の指導に当たられたピアニスト・笠原咸子氏のご子息です。
咸子氏を通じた本学との深いご縁と、芸術を学ぶ学生たちの環境整備のために多額のご寄付をいただいたため、本学としてそのご厚志に敬意を表し、末永く顕彰するものです。

C 伊藤記念図書館

本学の教育・研究に必要な図書・研究資料を収集、保存、管理し、教職員および学生の利用に供することを目的として設置しています。また、市立大学であることから、広く市民（京都市内に在住または通勤されている方）の利用にも供しています。
蔵書は、芸術に関する専門的図書、雑誌を中心に約14万冊に及んでおり、小合文庫、長崎文庫、高山文庫など特色のあるコレクションも揃っています。
本図書館に名前を冠する伊藤謙介氏からは、環境整備および図書資料等の充実のために多額のご寄付をいただきました。ここには、読書を通じて人々の感性が豊かになり、京都市の文化芸術の基盤がより厚く、強くなってほしいとの思いが込められています。本学としてはそのご厚志に敬意を表し、末永く顕彰するものです。

伊藤記念図書館

芸術資料館（移転記念特別展「京都芸大〈はじめて〉物語」第１期 展示風景）

第１期で展示

村上華岳《二月の頃》明治44年（1911）

第４期で展示

須田国太郎《馬墨画》昭和25年（1950）

ギャラリー＠KCUA（久門剛史「Dear Future Person, 」展示風景／撮影：来田猛）

京都市立芸術大学 芸術資料館 移転記念特別展

京都芸大〈はじめて〉物語

新しくなった芸術資料館でお待ちしています！

- 〈第１期〉**カイセン始動！**–京都市立絵画専門学校に集いし若き才能–
  2024/4/6（土）–6/2（日）
- 〈第２期〉**「日本最初京都画学校」**–京都御苑からの出発–
  2024/6/15（土）–8/12（月・振休）
- 〈第３期〉**道を拓きしものたち**–知られざる先駆者–
  2024/9/21（土）–11/24（日）
- 〈第４期〉**Road to GEIDAI〈芸大〉**–美術学部改革と新しい教育をめぐって–
  2024/12/7（土）–2025/2/11（火・祝）

第２期で展示

望月玉泉《蜥蜴図》明治時代（1880-89）

第４期で展示

作者不詳《京都市立美術大学門標》昭和25年（1950）

ギャラリー＠KCUA（アクア）

京都市立芸術大学ギャラリー＠KCUA（通称「アクア」）は、市民の皆さまに作品を鑑賞していただく場、また本学の活動成果を公開する実験的発表の場です。

「@KCUA」は、大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字をもじったもので、音読みするとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理想を表現しています。

@KCUAでは、ギャラリースタッフの企画による特別展や、本学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展などの展覧会を開催するほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎えた若手アーティスト対象のワークショップやレクチャー、本学のキャンパス移転に伴うプロジェクトの実施など、展覧会だけにとどまらず多岐にわたる活動を実施しています。

芸術資料館

芸術資料館は、平成３（1991）年に京都市立芸術大学に設置された大学博物館で、美術系博物館に分類されます。博物館法第29条による博物館相当施設の指定を受けており、本学の博物館実習の受入施設となっています。所蔵品は、学生の卒業作品と旧教員の作品および美術工芸に関する参考資料で構成されています。明治13（1880）年に開校した京都府画学校以来の140年を超える歴史を受け継ぎ、写生や粉本を含めた総数は約4,300件に上ります。学内での教育活動はもとより、展示室での一般公開や、展覧会への貸出しなどによって、広く利用に供しています。展示室は大学Ｃ棟１階にあり、収蔵品を中心にテーマを設定して展示を行います。 京都と本学の歴史に根ざした調査研究活動を通じて、積極的に作品と関連資料の収集を行い、近世から現代に至る貴重な資料の保存機関として、また市立の芸術大学としての責務を果たすため、社会への還元を目指しています。

アートスペース k.kaneshiro

本学のキャンパス移転にあたり、金城一守氏からご寄付をいただきました。アートスペースk.kaneshiroは、そのご厚志に敬意を表するとともに、金城氏が収集したコレクションを活用し、学生と共に展示を構成して広く美術・工芸・歴史資料を紹介する場として、Ｃ棟６階に展観ギャラリーを設けました。

アートスペース k.kaneshiro

国際交流

INTERNATIONAL PROGRAMS

フライブルク音楽大学(ドイツ)との合同演奏会

ベルゲン大学(ノルウェー)での
グループプロジェクト

提携校講師による大学案内

ウィーン国立音楽大学(オーストリア)での
授業の様子

フライブルク音楽大学(ドイツ)での演奏会

交換留学制度など、積極的に交流を展開

本学では、海外の大学との交換留学や教員交流、海外の著名な美術家・音楽家を招く事業などの国際交流に力を注いでいます。
海外の協定校との交換留学制度により、学生の相互派遣を行っているほか、海外からの学生を受け入れ、日本語講座を開講するなど海外出身の学生がより学びやすい環境づくりにも取り組んでいます。
また、海外で活躍する美術家・音楽家・研究者などを招き、学生・教員共に国際的な視点を持ち、共同研究や公演を実施するなど、積極的な国際交流を展開しています。

国立高等美術学校(フランス)

ベルゲン大学美術・音楽・デザイン学部(ノルウェー)

交換留学制度

本学では、海外各地の美術・音楽関連大学と交換留学協定を結び、学生の相互派遣を行っています。交換留学生として、美術学部・美術研究科の学生は1セメスター、音楽学部・音楽研究科の学生は1〜2セメスターの期間、協定校に留学することができます。交換留学は、豊かで幅広い芸術体験を積むとともに、現地生活の中で国際的な感覚を身につけることができる貴重な機会です。
また、協定校からさまざまな地域出身の学生を本学に受け入れることで、国際交流の推進力となっています。2020年度からは美術学部・美術研究科がノルウェーのベルゲン大学美術・音楽・デザイン学部と、音楽学部・音楽研究科がイタリアのレッチェ音楽院、スイスのジュネーブ高等音楽院とそれぞれ協定を結ぶなど、着実に国際交流の輪を広げています。

マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学(ポーランド)

アールト大学(フィンランド)

国際交流事業

交換留学生の派遣・受け入れにとどまらず、本学では国際的に活躍する芸術家、研究者などを招き、さまざまな交流事業を実施しています。

美術学部・美術研究科

国内外の行き来ができなかった時期を経て、2023年度には、各国の提携校から交換留学生を迎えることができ、本学からもイタリア、ノルウェー、フィンランド、フランスに交換留学生を派遣することができました。7月と12月には学内で交換留学生によるオープンスタジオや展覧会を開催しました。展覧会には絵画、アニメーション、工芸、インスタレーションなどの国際色豊かな力作がならびました。また、関連イベントとして国際交流パーティも開催し、留学生とその作品のバックグラウンドを紹介してもらうなど、学内の活発な国際交流の機会となっています。

音楽学部・音楽研究科

2019年度からイタリアのレッチェ音楽院、スイスのジュネーブ高等音楽院と交換留学協定を結び、チェコのプラハ芸術アカデミーと交流協定の覚書を結ぶなど、着実に国際交流の輪を広げています。また、2021年から再開した交換留学生の往来も、2023年度にはイギリス、オーストリア、韓国、台湾、ドイツの提携校と交換留学生の派遣および受け入れを行いました。そのほかにも海外から講師を招聘(しょうへい)し、マスタークラスや演奏会を開催するなど、コロナ禍の困難な時期を乗り越え継続した国際交流を行っています。

日本伝統音楽研究センター

2019年度には、山東大学芸術学院と新たな交流協定を締結し、2020年春に、スタンフォード大学との能の共同研究として、ウェブサイト「インターメディアとしての能」を完成し発表するなど、さまざまな地域との研究連携を行っています。

交換留学生によるオープンスタジオ

ヤーノシュ・バーリント氏によるマスタークラス

スタンフォード大学にて「インターメディアとしての能」公開収録

留学全般の相談

インターナショナル・コーディネータは、学生の交換留学に関するコーディネート業務や、留学全般についての相談を受け付けています。また、国際交流ウェブサイトでは、海外提携校の情報のほか、過去の派遣留学生によるレポート、国際交流イベントなどの情報を閲覧することができます。

インターナショナル・コーディネータ(教務学生課学生・国際担当)
Tel | 075-585-2001(月–金曜日・9時–17時)
Fax | 075-585-2012
Email | intl-r@kcua.ac.jp
*相談には事前予約が必要です。

国際交流ウェブサイト
https://intl.kcua.ac.jp

英国王立音楽大学(イギリス)

フライブルク音楽大学(ドイツ)

美術学部／美術研究科の協定校

Italy | イタリア
ミラノ工科大学(ミラノ)

France | フランス
国立高等美術学校(パリ)
国立高等装飾美術学校(パリ)

Norway | ノルウェー
ベルゲン大学 美術・音楽・デザイン学部(ベルゲン)

Finland | フィンランド
研 アールト大学 芸術・デザイン・建築学校(ヘルシンキ)

Poland | ポーランド
研 マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学(ポズナニ)

Canada | カナダ
ナスカド大学(ハリファックス)

Republic of Korea | 韓国
韓国芸術総合学校(ソウル)

China | 中国
研 中央美術学院(北京)

研 は研究科のみの協定

音楽学部／音楽研究科の協定校

UK | イギリス
英国王立音楽大学(ロンドン)

Austria | オーストリア
ウィーン国立音楽大学(ウィーン)

Czech Republic | チェコ
プラハ芸術アカデミー (プラハ)

Germany | ドイツ
フライブルク音楽大学(フライブルク)
研 ブレーメン芸術大学(ブレーメン)

Norway | ノルウェー
ベルゲン大学グリーグ・アカデミー音楽学部(ベルゲン)

Republic of Korea | 韓国
檀国大学校 音楽大学(龍仁)
韓国芸術総合学校(ソウル)

Taiwan | 台湾
国立台北芸術大学音楽学院(台北)

Italy | イタリア
レッチェ音楽院(レッチェ)

Switzerland | スイス
ジュネーブ高等音楽院(ジュネーブ)

キャリアデザインセンター

Career Design Center
Kyoto City University of Arts

キャリアデザインセンター公式ウェブサイトや
SNSでも情報発信中！

ウェブサイト　Facebook　X　Instagram

芸術大学を卒業したら、その先はどうなる？

アーティストとして芸術活動を続けるための支援、大学で学んだことを生かして就職／起業したい人の支援を行っています。

キャリアデザインセンターでは、一人ひとりが「自分の生き方」を考えるお手伝いをします。芸術活動の継続的かつ体系的な支援や、在学生や卒業生を対象とした講演会・セミナーなどを行うほか、専門のアドバイザー（芸術アドバイザー、キャリアコンサルタント〈国家資格〉）が相談に応じます。

さまざまな分野の卒業生を紹介する広報物
「瓦版」2023

「キュレーター招聘：プレゼンテーションレビュー」講師：中田耕市氏、松岡剛氏（2024年2月9日）

作品展示販売＆コンサート「THE GIFT BOX 2023」
（2023年12月16日、17日）

卒業後10年のOBレクチャーシリーズ「10年後の京芸生」（2023年6月21日）

芸術活動支援

〈美術・音楽共通〉

- インターナショナル・コーディネータ（P.76-77「国際交流」参照）との連携企画講座「交換留学から辿るキャリアパス」の開催
- 卒業生による講演会「10年後の京芸生」の開催
- さまざまな分野の卒業生を紹介する広報物「瓦版」の発行
- 「アーティストのための確定申告入門講座」の開催
- 作品展示販売＆コンサート「THE GIFT BOX」の開催

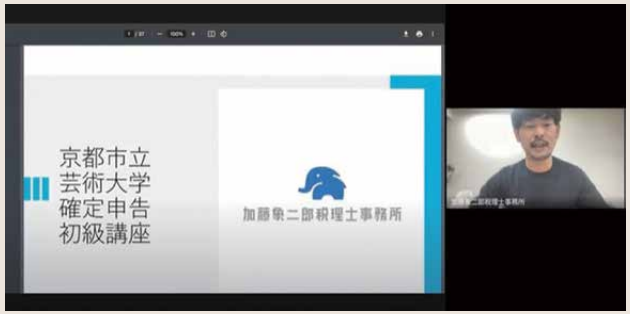
〈美術〉

- 「ポートフォリオ講座」の開催
- 作品展期間中「キュレーター招聘：プレゼンテーションレビュー」の開催
- 制作活動・作家活動全般に関する相談・支援
- 展示・発表を行う会場の紹介
- ポートフォリオ・助成金申請書の作成サポート

〈音楽〉

- 学外からの演奏依頼に対するコーディネート
- 音楽活動全般に関する相談・支援

その他、幅広く相談を受け付けています。
お気軽にセンターまでお越しください。



「アーティストのための確定申告入門講座」（2024年2月21日）

就職支援

過去3年間の就職先・進路の一覧はP.90-91

- 就職活動に関するセミナーの開催
- 就職活動に関する相談・支援
- 就職ガイダンスや会社説明会の開催
- 求人票・ポートフォリオの閲覧

就職ガイダンスの様子（2023年）

問い合わせ

キャリアデザインセンター

- Tel：075-585-2011
- Email：career@kcua.ac.jp

社会連携事業

SOCIAL COOPERATION

クロックタワーコンサート
京都大学との連携事業として演奏会を実施しています。

京都駅ビル東広場にある駅ピアノを使ったミニコンサート

介護付有料老人ホーム「チャームプレミア京都烏丸六角」での作品展示

「京都駅ビル芸術祭」作品展示

京阪グループのフラッグシップホテル「THE THOUSAND KYOTO」館内ギャラリーでの展覧会

産業界、教育機関、地域とのつながりを深め、未来を共創する

本学では、歴史都市・京都の文化芸術の裾野を広げ、また、個性と魅力を一層高めることを目的として、産業界、小・中・高等学校や大学などの教育機関、さまざまな地域団体との連携事業に取り組み、教育研究成果を社会に還元しています。

教育機関との連携

小・中・高等学校や大学などの教育機関との連携を行うことで、将来の京都の芸術文化の振興に貢献することを目指しています。

芸術系教科等担当教員等全国研修会
文化庁が主催する「芸術系教科等担当教員等全国研修会」に、本学も参加協力を行っています。本学では、中学校・高等学校の教員等を対象に、美術・音楽の両分野で実技研修を展開しています。

小学校におけるレジデンスの取り組み
卒業生・修了生が、下京区の小学校の空き教室でアート作品を制作するアートインレジデンスに取り組み、日常的に児童と交流を行っています。作家たちは小学校の作品展にも参加します。

小学校・中学校でのワークショップ
下京区をはじめとした京都市内の小学校・中学校で、本学の学生や卒業生が参加するアートをテーマにしたワークショップや、楽器演奏の鑑賞授業などを行っています。

企業・団体との連携

企業・団体との連携に取り組み、教育研究成果を社会に発信しています。

京都駅ビル開発株式会社との連携
京都駅ビル東広場で、毎年、美術学部の学生による作品展やマルシェを開催しています。また、音楽学部の学生や卒業生が、京都駅ビル内でミニコンサートを開催しています。

依頼演奏
音楽学部の学生や卒業生が、ホテルグランヴィア京都でのロビー演奏など、企業・団体からのさまざまな依頼に応えています。

日本マクドナルド株式会社との連携
マクドナルドが行っている、生物多様性に関する取組を消費者に分かりやすく伝えるため、美術学部の学生がマクドナルド店舗で利用するトレイマットのデザインに取り組みました。

レクサス西大路との連携
レクサス西大路と連携し、京都を拠点に活動する若手アーティスト支援の取組として、同店のオーナーズラウンジで定期的に本学の学生や卒業生の作品を展示しています。

地域との連携

地域の各種団体などとの連携を推進し、大学の資源や教育研究の成果を発信することにより、芸術文化によるまちづくりに貢献しています。

地下鉄北山駅構内での作品展示
地下鉄北山駅からコンサートホールへ続く地下通路に、美術学部の学生が音楽をテーマに制作した作品を毎年展示しています。

ウエスティ「音暦」シリーズ
京都市西文化会館ウエスティと共催で、年2回演奏会を開催しています。区民の方をはじめ、多くの皆さまに楽しんでいただいています。

崇仁文化祭への出展
崇仁地域で開催される文化祭に美術学部の学生が作品を出展し、地域の皆さまに本学のアートに親しんでいただいています。

下京・南まちなかアートギャラリーへの出展
下京区・南区で開催される「下京・南まちなかアートギャラリー」に美術学部の学生が参加し、ワコール新京都ビルや京都リサーチパークをはじめとした区内各所で作品展示等を実施しています。

Photo by Ryuhei Yokoyama

SOCIAL COOPERATION

芸大祭で毎年好評の仮装コンサート「京芸ブラス」

大学のクラブ活動としては世界唯一の「常磐津部」の芸大祭公演

学生生活サポート（相談窓口）

事務局

事務局では、次のとおり業務を取り扱っています。

- □ **総務課**：授業料、施設使用許可、学生メールサービスなどに関する業務
- □ **教務学生課**:授業、成績、証明書、授業料減免、奨学金、学生相談、クラブ活動、留学、学生募集などに関する業務
- □ **共創テラス・連携推進課**：社会連携、大学主催事業などに関する業務
- □ **附属施設事務室**:附属図書館、芸術資料館、ギャラリー@KCUAに関する業務
- □ **キャリアデザインセンター**（P.78）：就職相談、芸術活動支援に関する業務

事務局

学生相談室

学生相談室では、専門のカウンセラーによるカウンセリングを毎週３日行っています。学業や将来への不安、友人や恋愛などの人間関係の悩みなど、お気軽にご相談ください。プライバシーは厳守します。

保健室

保健室には、保健師が常駐し、学生の心身の健康や安心をサポートしています。ケガや病気の処置はもちろんのこと、健康上の不安や心の悩みなどの相談窓口にもなっています。また、毎年すべての学生に対して健康診断を実施しています。

学生生活上の配慮

障害のある学生への支援や、旧姓、通称名および自認する性別を使用したい学生への支援等、一人ひとりが自分らしく学生生活を送るための支援を行っています。入学時だけではなく、在学中を通じて、皆さんが最も相談しやすい教職員にご相談ください。相談内容の秘密は守られます。対応が必要な教職員間で情報共有するときには、必ず事前に了解のうえで行います。

キャンパス・ハラスメント相談窓口

セクシュアル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメントなど、大学内でのあらゆるハラスメント（いじめ・嫌がらせ）の相談を受け付け、迅速に対応します。相談窓口は学内外にあり、学内はキャンパス・ハラスメント相談員、学外は専門のクリニックで対応しています。

オフィスアワー

教員が研究室などで、学生からの質問や相談に応じる「オフィスアワー」を、美術学部・音楽学部のすべての専任教員が設けています。学部・専攻に関わりなく、どの教員にでも聞くことができます。例えば、美術学部の学生が作品で使用する音楽について、音楽学部の教員に相談することも可能です。

芸大祭では毎年さまざまなエントランスオブジェが制作されます

芸大祭での模擬店の様子

古典派音楽研究会(こてけん)

バスケットボール部

茶道部

現代音楽研究会 club MoCo

大学祭

芸大祭

京都芸大最大のイベントである「芸大祭」は、毎年11月上旬に開催。美術・音楽両学部の学生が、仮装行列、展覧会、演奏会、ミュージカル、講演会、模擬店などの企画を練りに練って、学内はもちろんのこと、京都市内でもエネルギッシュに披露しています。芸大祭には、学生、教員、受験生や卒業生などのほか、多くの市民の方々にもお越しいただいており、学外の方にも京都芸大の面白さを存分に味わっていただく3日間です。

五芸祭（五芸術大学体育・文化交歓会）

日本にある国公立の芸術系大学(京都芸大、金沢美術工芸大学、東京藝術大学、愛知県立芸術大学、沖縄県立芸術大学)による交歓会です。

軽音部による芸大祭ライブ

能楽部による芸大祭公演

クラブ活動

学部や専攻を越えた交流を築く 京都芸大ならではの個性的なクラブも

本学には現在、次の文化系クラブと体育系クラブがあります。長い歴史があるミュージカルグループや、常磐津節、古典派音楽に取り組むなど、趣味を同じくする学生同士が楽しく活動しているクラブや研究会がある一方で、練習試合や遠征活動を本格的に行うクラブもあるなど、活動内容はさまざまです。ほかにも多くの同好会があり、美術学部と音楽学部が共に活発に活動しています。
顧問教員が相談に乗ったり、大学が活動費を助成するなどして、学部や専攻を越えたつながりが生まれる学生のクラブ活動を支援しています。

文化系クラブ

映像研究部　GMG(芸大ミュージカルグループ)　軽音楽部　古典派音楽研究会(こてけん)
茶道部　常磐津部　能楽部　漫芯創意(漫画研究部)　現代音楽研究会 club MoCo
書道部　キモノ倶楽部レモンエロウ　聖書研究会 Cantabile　ロマン派音楽研究会

体育系クラブ

サッカー部　ダンス部　バスケットボール部　バドミントン部　バレーボール部
ママチャリ部　ラグビー部　野球部　筋トレ部　弓道部　剣道部　陸上部

歴史・沿革

HISTORY AND DEVELOPMENT

創立140年を超える 長い歴史が育む人と文化

初代摂理
田能村直入

教員
幸野楳嶺

幕末から明治。斜陽化した京都を復興するため、1878（明治11）年、南画家・田能村直入は、時の京都府知事・槇村正直に画学校設立の陳上書を呈上。続いて四条派・幸野楳嶺と望月派・望月玉泉が、円山派・久保田米僊、岸派・巨勢小石との連署で、画学校創設の建議書を同知事に提出。かくして1880（明治13）年「京都府画学校」が開校した。

京都市立芸術大学(略称:京都芸大)は、1880(明治13)年に日本初の公立の絵画専門学校として開設された「京都府画学校」を母体とする芸術大学です。美術と音楽を両軸とする本学は、文化首都・京都に蓄積された豊かな美の伝統を背景に、建学以来、国内外の芸術界・産業界で活躍する優れた人材を輩出し、国内のみならず世界の芸術文化に貢献してきました。

1883(明治16)年の京都府画学校規則第一条には「本校は美術を拡張し工芸製作の基礎を訂正するために設くるものにして粗を戒め精を窮め浮を去り実に就き公益を謀り文化を補うを本旨とす」とあります。創造的な精神と技術によって広く社会や文化に貢献することが、今日まで続く本学の基本理念です。

1889(明治22)年、市制施行による京都市誕生とともに市に移管、京都市画学校に。その後、市立絵画専門学校、市立美術専門学校と変遷を経て、1950(昭和25)年、京都市立美術大学に。一方、1952(昭和27)年に日本初の公立音楽大学として京都市立音楽短期大学が設置されます。開学の趣旨に「京都市が市民の音楽熱の熾烈なる実状に鑑み、名実ともに国際文化観光都市にふさわしい教養ある社会人としての音楽芸術家を育成せんがため」とうたわれました。この2つの大学が1969(昭和44)年に統合されて「京都市立芸術大学」となりました。以後50年以上、「京都芸大」「京芸」として市内外の皆さまから親しまれてきました。

本学にゆかりのある文化勲章受章者として、竹内栖鳳、堂本印象、富本憲吉、小野竹喬、山口華楊、上村松篁、池田遙邨、加山又造、草間彌生など、音楽学部・研究科出身者からは、指揮者の佐渡裕、阪哲朗、チェリスト上村昇、河野文昭、プリマ菅英三子、ピアニスト三木香代、ファゴット奏者の水谷上総、ヴィオラ奏者の小倉幸子など、いずれも著名な芸術家を輩出。これら先輩諸氏に続き、アーティストとして認められた数多くの卒業生が国内外で活躍しています。

（以上、敬称略）

沿革

1880(明治13)年	京都府画学校 創立
1889(明治22)年	京都市画学校 改称 ＊京都府から京都市へ移管
1891(明治24)年	京都市美術学校 改称
1894(明治27)年	京都市美術工芸学校 改称
1901(明治34)年	京都市立美術工芸学校 改称
1909(明治42)年	京都市立絵画専門学校 創立
1945(昭和20)年	京都市立美術専門学校 改称
1950(昭和25)年	京都市立美術大学 ＊大学制度へ移行
1952(昭和27)年	京都市立音楽短期大学 創立
1969(昭和44)年	京都市立芸術大学 ＊美術大学と音楽短期大学の統合
1980(昭和55)年	大学院美術研究科修士課程 設置　＊西京区大枝沓掛へ移転
1986(昭和61)年	大学院音楽研究科修士課程 設置
2000(平成12)年	大学院美術研究科博士(後期) 課程 ・修士課程保存修復専攻 設置
	日本伝統音楽研究センター 開設
2003(平成15)年	大学院音楽研究科博士(後期) 課程 設置
2010(平成22)年	京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 設置
2012(平成24)年	＊公立大学法人へ移行
2014(平成26)年	芸術資源研究センター 開設
2023(令和5)年	＊下京区下之町へ移転

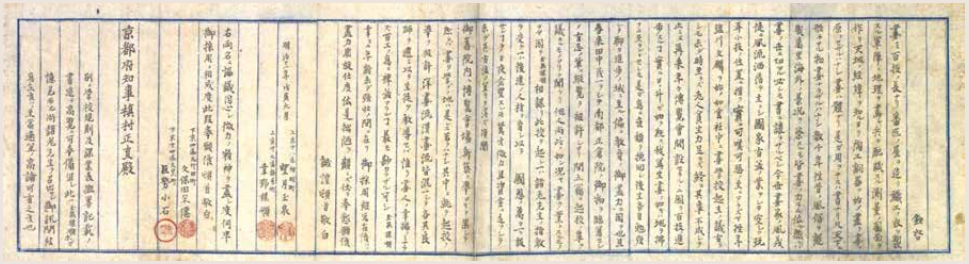
御所御苑内の校舎遠望「京都市美術学校」時代　1893(明治26)年

教育・研究理念

PHILOSOPHY AND EDUCATION RESEARCH

芸術の意義を担う人材を育てる京都芸大が守り続ける〈3つの柱〉

あらゆる人間と自然が多様性をもって地球の上に共存し得る新たな文明社会を構築することが求められる現代、芸術が果たす役割はますます大きなものになっています。なぜなら芸術は、太古以来、そこに培われた多様な技術と知恵をもって、人間と人間、人間と自然を創造的に結びつけてきたからです。京都芸大は、こうした芸術の普遍的意義を担う人材を育成するため、教育・研究理念に以下の3つの柱を立てています。



画学校開学建議書（1878）

教育・研究目的

美術学部

美術学部は、国際的な芸術文化の都である京都の文化的・人的資源を生かし、独創的で多様な研究を背景に、専門的かつ横断的な教育を通して、優れた芸術家をはじめ独創的な人材を生み出し、もって社会に貢献することを目的とします。

音楽学部

音楽学部は、個性を尊重し創造性を育む専門的な音楽芸術の教育研究により、幅広い教養を併せ持つ優れた音楽家や研究者となり得る人材を育成し、もって社会に貢献することを目的とします。

1

本学独自の伝統を踏まえ、芸術の教育研究を「創造活動」として推進すること

芸術の教育研究はそれ自体が一つの「創造活動」でなければなりません。建学以来、本学はたえず人間の創造性という原点に立ち、社会や文化全体に貢献し得る芸術の研究教育の理想を追求してきました。自由で豊かな発想とたしかな基礎力の育成を重視し、専門性の深化と同時に分野を横断する交流を促進する本学の理念は、日本の高等芸術教育に新しい展望を切り拓くものでもありました。それはまた、実技と理論を有機的に結びつけ、教育・研究の場をたえず柔軟で開かれた「創造の現場」として展開していく本学独自の校風を支えています。

2

少数精鋭の高度な教育体制を維持・展開させること

芸術創造の技術と精神は、適切な規模と設備をそなえた創造的環境の中でこそ養われます。本学の特色は、美術と音楽の各専門分野で活躍する芸術家・研究者・教育者による少数精鋭の高度な研究教育環境にあります。それは、教員と学生相互の親密で豊かなコミュニケーションを支え、学生自身の自己発見・自己啓発の機会を最大限に保証するとともに、分野を横断する活発な交流を促しています。

3

地域社会と連携しつつ、文化首都・京都の特質を生かした国際的な芸術文化の交流拠点となること

日本の芸術文化を育んだ文化首都・京都は、豊かな伝統文化・伝統産業が存在するとともに、先進的な学術研究や産業が活発に展開する国際的な文化交流の中心地でもあります。本学は、この京都の文化的土壌に根ざしながら、芸術を広く地域社会に発信し、学術・産業・生活文化の諸分野に創造的な視点と活力をもたらすこと、そして世界の多様な芸術文化が交流し合う国際的な芸術創造と研究の拠点となることを目指します。

教育方針

EDUCATIONAL POLICY

美術学部の教育方針

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

美術学部は、次のような学生を求めています。
☐ 芸術文化に対して幅広い興味、強い好奇心を持っている学生
☐ 表現に対する強い意欲を持っている学生
☐ 自ら課題を見出し、解決しようとする意欲を持っている学生
☐ 基礎的な学力や造形力、柔軟な思考力を持っている学生

入学試験の基本的な考え方・方針

美術学部は、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）に適した学生を受け入れるため、以下の試験を課しています。
☐ 基礎的な学力を評価するため、大学入学共通テストを課します。
☐ 基礎的な造形力や柔軟な思考力などを評価するため、個別試験（描写・色彩・立体・小論文）を課します。
【個別試験の評価の観点】
☐ 描写：与えられた対象物を条件に従って構成し、的確に観察・把握し、描写する能力
☐ 色彩：与えられたテーマを条件に従って発想・構想し、的確に色彩で表す能力
☐ 立体：与えられたテーマを支給された材料と与えられた条件に従って発想し、的確に立体にする能力
☐ 小論文：与えられた文章等を的確に理解し、それをもとに思考したことを論述する能力
☐ 多様な能力を評価するため、本学の個別試験と大学入学共通テストの成績を総合して選抜を行います。

入学前に身につけてほしい力

美術学部は、以下のような能力を入学までに身につけることを期待します。
☐ 自分を取り巻く世界に対する想像力と観察力
☐ 高等学校卒業までに学習する基礎的な知識・技能
☐ 基礎的な論述能力（総合芸術学科）
☐ 以上をもとに答えが一つに定まらない問題に、自ら解を見出していく思考力・判断力・表現力

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

美術学部は、以下の考え方に基づき、カリキュラムを編成し、実施します。
☐ 専門性の深化と専攻を横断する教育課程による本学独自の開かれた「創造の現場」を通して、幅広い視野と専門的な知識を習得すること
☐ 実技教育とともに学科教育も重視することで、表現力に加え、新たな芸術を生み出す自由で豊かな発想力、思考力を身につけること
☐ 少人数による密度の高い教育課程の中で、個々のテーマに合わせて課題を設定し、自ら学ぶ能力を養うこと

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

美術学部は、卒業時までに達成すべき目標を以下の通りとします。
☐ 芸術に関わる幅広い視野と、専門的な知識の修得
☐ 柔軟な思考力と独自の発想力の修得
☐ 自己の主題を実現する表現手法の修得

音楽学部の教育方針

アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）

音楽学部は、次のような学生を求めています。
□ 音楽芸術の専門教育を受けるに足る基礎的技術と知識、強い学習意欲を持つ学生
□ 個性と芸術的創造力にあふれる学生

入学試験の基本的な考え方・方針

音楽学部は、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）に適した学生を受け入れるため、以下の試験を課しています。

【作曲、指揮、ピアノ、弦楽、管・打楽、声楽専攻】
- □ 本学での専門教育を受けるに足る基礎的な学力を評価するため、大学入学共通テスト（国語、外国語等）を課します。
- □ 本学での専門教育を受けるに足る専攻ごとの技術や知識を評価するため、第一次試験において各専攻別に課題を課します。
- □ 本学での専門教育を受けるに足る幅広い音楽的素養を評価するため、第二次試験（音楽通論、聴音書取、新曲視唱、副科ピアノ演奏等）を課します。
- □ 以上の試験の成績を総合的に判断し、最終合否判定を行います。

【音楽学専攻】
- □ 本学での音楽学の専門教育を受けるに足る基礎的な学力を評価するため、大学入学共通テスト（国語、外国語等）を課します（社会人特別選抜を除く）。
- □ 第一次試験では、本学での音楽学の専門教育を受けるに足る語学力を評価するとともに、学術的研究に必要な着眼力、問題提起能力、課題解決に向けた発想力、論理的思考力および文章構成力を、学生募集要項の発表と同時に公開する課題に対する事前提出物によって測ります。
- □ 第二次試験では、音楽に対する学術的研究を実践する上で必要となる着眼力、問題提起能力、課題解決に向けた発想力、論理的思考力、プレゼンテーションや討論などのコミュニケーション能力を測るために、主に事前提出物で論じた内容に関する口頭試問を実施します。
- □ 以上の試験の成績を総合的に判断し、最終合否判定を行います。

入学前に身につけてほしい力

音楽学部の各専攻では、以下のような能力を入学までに身につけることを期待します。

【作曲専攻】
- □ 和声法および対位法の基礎能力
- □ それらを使って、音楽を構成できる能力
- □ 高度の作曲法へ進むための、読譜力、理解力、知的好奇心

【指揮専攻】
- □ 指揮法、いわゆるバトンテクニックの習熟度よりも、音楽家としての基礎力の習熟度を重視します。
- □ 具体的には、
  - ◇ 聴音、視唱等のソルフェージュの基礎能力
  - ◇ 和声法の基礎能力

  の２点を重視

  加えて、ピアノまたは他の楽器、声楽での演奏を通して音楽的な表現ができるように、演奏面での習熟も期待します。

【ピアノ専攻】
- □ 基礎的な読譜・初見能力の習得
- □ 音楽の語法、形式、様式（スタイル）に対する理解と実践
- □ 基礎的な練習曲、演奏技術（メカニズム）の理解と習得
- □ バロック・古典・ロマン・近現代作品などは多様なレパートリー構築への準備

【弦楽専攻】
- □ 基礎的な読譜能力および演奏技術の習得
- □ 音階、練習曲、協奏曲の学習と実践
- □ バロック・古典・ロマン・近現代の多様な作品の演奏への準備

【管・打楽専攻】
- □ 基礎的な楽器演奏技術
- □ 基礎的な読譜能力および、さまざまな時代様式の楽曲に対する基礎的理解とその表現技術

【声楽専攻】
- □ 基礎的な歌唱技術
- □ 聴音、視唱等のソルフェージュの基礎能力（特にコールユーブングゲンは重要な課題の一つなので、習得しておくこと）

【音楽学専攻】

音楽に対する関心に加えて総合的な俯瞰能力を有する者を求めます。それに当たって以下に掲げる基礎的な学力が受け入れの際の評価の対象となります。
- □ 高等学校の教育課程の教科・科目の履修により培われる論理的思考能力
- □ 高等学校の教育課程の教科・科目で習得した内容を活用する能力
- □ 国語・外国語を用いたコミュニケーション並びに自己表現の能力

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

音楽学部は、少人数教育の利点を生かした密度の高い指導を通して、学生が専門分野における技術と知識を学び、感性を養うとともに、あらゆる芸術の土台となる幅広い教養と、次の力を身につけることを目指し、カリキュラムを編成し、実施します。
□ 実演分野においては、楽器、声を操る上での基礎的な身体技法およびそれらを自由に操る知的応用力
□ 創作分野においては、作曲上必要となる基礎的な楽音の取り扱い方と知的応用力、またその記譜力
□ 学術分野においては、教養教育にも重点を置いた教育課程によって培われる、問題を把握する基礎的な思考力、情報リテラシー能力および情報発信能力

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）

音楽学部は、卒業時までに達成すべき目標を以下の通りとします。
□ 実演、創作、学術の各分野における、音楽人として相応しい音楽的もしくは学術的基礎力、応用力の獲得
□ 幅広い教養を有し、それらを社会に対して創造的に発信し、芸術文化に寄与できる能力の修得

入試情報

ADMISSION INFORMATION

募集人員、試験日

学部	学科	専攻	募集人員 一般入試 前期	募集人員 一般入試 後期	令和7年度入試日程	参考(令和6年度入試日程) 出願期間	参考(令和6年度入試日程) 個別試験	参考(令和6年度入試日程) 個別試験	参考(令和6年度入試日程) 合格発表
美術学部 135名	美術科	日本画 油画 彫刻 版画 構想設計	70	–	令和6年 7月上旬に 発表します	令和6年 1月22日(月) ～2月2日(金)	令和6年 2月25日(日) ～26日(月)		令和6年3月6日(水)
	デザイン科	総合デザイン デザインB	30	–					
	工芸科	陶磁器 漆工 染織	30	–					
	総合芸術学科	総合芸術学	5	–					
音楽学部 65名	音楽学科	作曲・指揮	–	4			【第一次試験】 令和6年 3月12日(火) ～3月15日(金)	【第二次試験】 ※第一次試験合格者のみ 令和6年3月17日(日)	令和6年3月20日(水)
		ピアノ	–	14					
		弦楽	–	14					
		管・打楽	–	16					
		声楽	–	14					
		音楽学	–	3					

試験教科・科目

学部	学科	専攻	令和7年度試験教科・科目	参考(令和6年度試験教科・科目) 大学入学共通テスト	参考(令和6年度試験教科・科目) 個別試験	参考(令和6年度試験教科・科目) 個別試験
美術学部	美術科	日本画 油画 彫刻 版画 構想設計	令和6年 7月上旬に 発表します	4教科(国語、外国語、数学・理科、地歴・公民)	描写(鉛筆描写) 色彩(色彩表現) 立体(立体表現)	
	デザイン科	総合デザイン デザインB		5教科(国語、外国語、数学、理科、地歴・公民)		
	工芸科	陶磁器 漆工 染織		4教科(国語、外国語、数学・理科、地歴・公民)		
	総合芸術学科	総合芸術学		4教科(国語、外国語、数学、理科・地歴・公民)	描写(鉛筆描写) 小論文(論述試験)	
音楽学部	音楽学科	作曲・指揮		3教科(国語、外国語、数学・地歴・公民)	【第一次試験】実技試験	【第二次試験】音楽通論、聴音書取、新曲視唱、副科ピアノ演奏
		弦楽 管・打楽		2教科(国語、外国語)		
		ピアノ				【第二次試験】音楽通論、聴音書取、新曲視唱、ピアノ新曲視奏
		声楽				【第二次試験】音楽通論、聴音書取、新曲視唱、コールユーブンゲン視唱、副科ピアノ演奏
		音楽学		3教科(国語、外国語、数学・地歴・公民)	【第一次試験】英語 与えられた課題に関する研究レポート	【第二次試験】口頭試問

入試の実施状況（過去3年）

学部	学科	専攻	令和４年度 募集人員	令和４年度 志願者数	令和４年度 入学者数	令和４年度 志願倍率	令和５年度 募集人員	令和５年度 志願者数	令和５年度 入学者数	令和５年度 志願倍率	令和６年度 募集人員	令和６年度 志願者数	令和６年度 入学者数	令和６年度 志願倍率
美術学部	美術科	日本画 油画 彫刻 版画 構想設計	70	256	70	3.7	70	248	70	3.5	70	290	70	4.1
	デザイン科	総合デザイン デザインB	30	98	30	3.3	30	155	30	5.2	30	116	30	3.9
	工芸科	陶磁器 漆工 染織	30	86	30	2.9	30	99	30	3.3	30	86	30	2.9
	総合芸術学科	総合芸術学	5	13	5	2.6	5	18	5	3.6	5	13	5	2.6
	合計		135	453	135	3.4	135	520	135	3.9	135	505	135	3.7
音楽学部	音楽学科	作曲・指揮	4	11	3	2.8	4	4	3	1.0	4	5	3	1.3
		ピアノ	14	44	14	3.1	14	51	14	3.6	14	35	14	2.5
		弦楽	14	24	14	1.7	14	19	12	1.5	14	25	14	1.8
		管・打楽	16	51	16	3.2	16	68	18	4.3	16	62	17	3.9
		声楽	14	31	14	2.2	14	38	14	2.7	14	38	14	2.7
		音楽学	3	22	4	7.3	3	24	4	8.0	3	17	3	5.7
	合計		65	183	65	2.8	65	204	65	3.1	65	182	65	2.8

令和7年度入学者選抜要項などの請求について

「テレメール」または「モバっちょ」を利用して請求してください。また、本学でも配布しています。詳細は本学ウェブサイト「資料請求」をご覧ください。

▶ 入学者選抜要項は、令和６年7月上旬に発表する予定です。
- 大学入学共通テストで受験を要する教科、個別試験日程などを発表します。
- 音楽学部は、「副科ピアノ課題曲」も発表します。

▶ 学生募集要項は、令和６年11月に発表する予定です。
- 出願手続などを発表します。
- 音楽学部は、「各専攻実技課題」も発表します。

※インターネット出願を行うため、学部学生募集要項の印刷版冊子は作成しません。

▶〈大学院修士課程〉学生募集要項は、令和６年7月上旬に発表する予定です。

▶〈大学院博士（後期）課程〉学生募集要項は、令和６年11月上旬に発表する予定です。

（学生募集要項などは、いずれも京都芸大ウェブサイトに掲載します。）

※インターネット出願を行うため、大学院学生募集要項の印刷版冊子は作成しません。

申込先・入試に関する問合せ先

京都市立芸術大学 事務局 教務学生課 入試担当
〒600-8601 京都市下京区下之町57-1
Tel｜075-585-2005　Fax｜075-585-2019
Email｜nyushi@kcua.ac.jp

最新情報はこちら！

オープンキャンパス等
最新の入試情報は
こちらでご覧ください。

https://www.kcua.ac.jp/examinee/

進路一覧

CAREER AFTER GRADUATION

2020–2022年度の卒業生の進路（美術学部）

美術科

日本画専攻	油画専攻	彫刻専攻	版画専攻	構想設計専攻
制作活動（5名、6.3%） **進学・留学（26名、32.5%）** 本学大学院（25名） ロイヤル・カレッジ・オブ・アート **就職（26名、32.5%）** （福）青葉仁会 ㈱あかがね ㈱アクアスター ㈱アダストリア 池田市水月児童文化センター ㈱エスト ANYCOLOR㈱ ㈱エボルブ 絵本作家アシスタント 柿本商事㈱ （医）恭英会 村松歯科医院 ㈻京都黎明学院 ㈱コーエーテクモホールディングス ㈱コンセプトラボ 島村楽器㈱ ㈱修美 西宮市教育委員会 任天堂㈱（2名） ネイロ㈱ ㈱堀木エリ子アンドアソシエイツ ㈻明徳学園 ㈱モノリスソフト ㈱吉田生物研究所 企業名不詳（2名） **その他（23名、28.7%）**	**制作活動（5名、8.3%）** **進学・留学（21名、35.0%）** 本学大学院（21名） **就職（19名、31.7%）** ㈱APパートナーズ アバンテック㈱ ㈱アンティー・ファクトリー ㈱伊藤軒 大阪医科薬科大学 （福）京都福祉サービス協会 ㈱近創 ㈱グレッゾ ㈱TASAKI ㈱テレフィット 日本美術工芸㈱ 任天堂㈱ ㈱花恋人 ㈱阪急阪神百貨店 平井精密工業㈱ ポノス㈱ ㈱マツモト レクストホールディングス㈱ ㈱YTJ **その他（15名、25.0%）**	**制作活動（1名、5.3%）** **進学・留学（7名、36.8%）** 本学大学院（5名） HAL大阪 陶磁器意匠研究所 **就職（6名、31.6%）** ㈱オンリー 京都アニメーション ㈱バル・コーポレーション ㈱フクイ工務店 ㈱光岡自動車 ㈱洛北義肢 **その他（5名、26.3%）**	**制作活動（1名、5.3%）** **進学・留学（6名、31.6%）** 本学大学院（6名） **就職（10名、52.6%）** 株式会社SNK エバオン㈱ ㈱大阪シミズ サカイサイクル㈱ ㈱清栄コーポレーション 凸版印刷㈱ ㈱俄 ㈱フィル・エ・クチーレ ㈱メガハウス ㈱洛北義肢 **その他（2名、10.5%）**	**制作活動（1名、4.3%）** **進学・留学（9名、39.1%）** 本学大学院（9名） **就職（3名、13.1%）** 協和㈱ ㈱勝和 ㈱瀬戸内海放送 **その他（10名、43.5%）**
合計（80名）	合計（60名）	合計（19名）	合計（19名）	合計（23名）

デザイン科

ビジュアル・デザイン専攻	環境デザイン専攻	プロダクト・デザイン専攻
制作活動（1名、1.6%） **進学・留学（13名、21.0%）** 本学大学院（13名） **就職（36名、58.1%）** ㈱アイダ設計 ㈱アイレップ ㈱アナロジカル ALSOK京滋㈱ ㈱イグニッション・エム ㈱インテリジェントシステムズ ㈱WAVE（2名） ㈱エー・ティー・エー 大阪印刷㈱ ㈱カプコン ㈱京都アニメーション ㈱ケイ・ウノ 神戸市役所 ココネ㈱ ㈱GKダイナミックス ㈱JR西日本コミュニケーションズ ソニーグループ㈱ ㈱大伸社 ㈱太洋堂 ㈱チャーリー ㈱TBSアクト ㈱デコルテ ㈱日本経済社 任天堂㈱（2名） パナソニック㈱エレクトリックワークス社 パナソニックハウジングソリューションズ㈱ ハンワホームズ㈱ 藤浪小道具㈱ ㈱ブレーンセンター ㈱LITALICO ㈱ロースター ㈱ワールドパーティー 1−UPスタジオ㈱ 企業名不詳（3名） **その他（12名、19.3%）**	**進学・留学（1名、25.0%）** 本学大学院（1名） **就職（1名、25.0%）** 京都府庁 **その他（2名、50.0%）**	**制作活動（1名、5.3%）** **進学・留学（6名、31.6%）** 本学大学院（6名） **就職（9名、47.3%）** ㈱伊藤軒 ㈱木の家専門店 谷口工務店 ㈱壽屋 ㈱タカショーデジテック 傳来工房 ニプロ㈱ ㈱俄 ㈱乃村工藝社 ユニオングループ **その他（3名、15.8%）**
合計（62名）	合計（4名）	合計（19名）

工芸科

陶磁器専攻

制作活動(2名、9.5%)

進学・留学(6名、28.6%)
本学大学院（3名）
大阪府立大学
多治見意匠技術研究所（2名）

就職(7名、33.3%)
㈱オアシスライフスタイルグループ
㈱大畑窯業
㈱鏑木
光洋陶器㈱
シュンピン㈱
ハンワホームズ㈱
企業名不詳

その他(6名、28.6%)

合計（21名）

漆工専攻

制作活動(3名、9.1%)

進学・留学(12名、36.4%)
本学大学院（8名）
石川県立漆器産業技術センター
大阪アミューズメントメディア専門学校
八洲学園大学
ヤマハピアノテクニカルアカデミー

就職(11名、33.3%)
小倉美術印刷㈱
㈱魁力屋
kus
自衛隊兵庫地方協力本部
㈲島津漆彩色工房
㈱象彦
丸章工業㈱
㈱吉田生物研究所
㈱レオタニモト
㈱レッドバロン
企業名不詳

その他(7名、21.2%)

合計（33名）

染織専攻

制作活動(1名、3.2%)

進学・留学(9名、29.0%)
本学大学院（7名）
東京藝術大学大学院
文化服装学院服飾研究科

就職(17名、54.9%)
㈱アンティー・ファクトリー
㈱伊藤軒
㈱エーアンドエス
四国化成工業㈱
（同）森林堂
（同）スレッドルーツ MITTAN
㈱龍村美術織物
㈱TBSアクト
帝塚山学院中学校高等学校
日本アイ・ビー・エム㈱
任天堂㈱
兵庫県立赤穂高等学校
㈱プレスハウス
㈱ミナ
㈱ロフトマン
㈱ロマンス小杉
企業名不詳

その他(4名、12.9%)

合計（31名）

総合芸術学科

総合芸術学専攻

進学・留学(5名、41.7%)
本学大学院（5名）

就職(6名、50.0%)
㈱アートフロントギャラリー
㈱アウトソーシングテクノロジー
㈱エリッツホールディングス
（公財）美術院
㈱ユーシン精機
㈱リトルクリエイティブセンター

その他(1名、8.3%)

合計（12名）

2020–2022年度の卒業生の進路（音楽学部）

作曲専攻

音楽・演奏活動(2名、33.4%)

進学・留学(2名、33.3%)
本学大学院（3名）

その他(2名、33.3%)

合計（6名）

指揮専攻

音楽・演奏活動(1名、33.3%)

その他(2名、66.7%)

合計(3名)

ピアノ専攻

音楽・演奏活動(3名、7.2%)

進学・留学(22名、52.4%)
本学大学院（17名）
大阪音楽大学
桐朋学園大学院大学
ネブラスカ大学
海外留学（ドイツ）
留学（学校名不詳）

就職(3名、7.1%)
㈱河合楽器製作所
兵庫県教育委員会
企業名不詳

その他（14名、33.3%)

合計(42名)

弦楽専攻

音楽・演奏活動(9名、21.4%)

進学・留学(15名、35.7%)
本学大学院（6名）
ウィーン国立音楽大学
大阪保健医療大学
相愛大学　(3名)
東京音楽大学付属オーケストラ・アカデミー
東京藝術大学大学院
桐朋オーケストラアカデミー
マーストリヒト音楽学校

就職(5名、11.9%)
大橋こどもクリニック
天理大学
㈱阪急阪神百貨店
レバレジーズ㈱
高槻市内の小学校

その他(13名、31.0%)

合計(42名)

管・打楽専攻

音楽・演奏活動(7名、16.7%)

進学・留学(11名、26.2%)
本学大学院（5名）
大阪音楽大学
京都保健衛生専門学校
東京藝術大学
桐朋オーケストラ・アカデミー
吉田愛服飾専門学校
カールスルーエ音楽大学

就職(7名、16.7%)
京都市立芸術大学
自衛隊　(3名)
㈱スミヨシ
㈱ノア
㈱明屋書店

その他(17名、40.4%)

合計（42名）

声楽専攻

音楽・演奏活動(1名、2.9%)

進学・留学(18名、51.4%)
本学大学院（13名）
大阪音楽大学
武庫川女子大学（4名）

就職(4名、11.4%)
㈱一如社
大津市立伊香立中学校
山口歯科医院
企業名不詳

その他（12名、34.3%)

合計（35名）

音楽学専攻

進学・留学(4名、57.1%)
本学大学院（4名）

就職(2名、28.6%)
㈱グリーンズ
企業名不詳

その他（1名、14.3%)

合計（7名）

学費・奨学金

TUITION AND SCHOLARSHIPS

学費

区分	授業料(年額)	入学考査料	入学料	
			市内出身者	市外出身者
学部生	535,800 円	17,000 円	282,000 円	482,000 円
大学院生	535,800 円	17,000 円	282,000 円	482,000 円
研究留学生	535,800 円	―		84,600 円
科目等履修生および聴講生	1 単位につき 14,400 円	―		28,200 円

（参考） **美術学部**

- 美術教育後援会費　80,000円(学部４年間)
- 象の会(同窓会)入会費・終身会費　45,000円

音楽学部

- 音楽教育後援会会費　100,000円(学部４年間)
- 真声会(同窓会)入会金・終身会費　65,000円

保険料(学部４年間)

- 学生教育研究災害傷害保険料　3,300円
- 学研災付帯賠償責任保険料　1,360円

その他の費用

- 実習経費…実技実習に必要な器具・材料費など(専攻によって異なります。)
- 研修旅行費…そのつど実費徴収

奨学金制度

日本学生支援機構奨学金

日本学生支援機構の給付奨学金は、国の高等教育における修学支援新制度の一つとして、意欲と能力のある若者が経済的理由により進学および修学の継続を断念することのないよう、原則として返還義務のない奨学金を支給するものです。申し込みは大学または在学する高等学校などを通じて行います。支援対象者の要件は、原則として日本学生支援機構の定める学業などに係る基準や家計に係る基準などに該当する学部生のみが対象となります。

日本学生支援機構の貸与奨学金は、国の実施する制度の一つとして、勉学に励む意欲があり、またそれに相応しい能力を持った学生が経済的理由により修学をあきらめることのないよう支援することを目的として、国が奨学金を貸与するものです。申し込みは大学または在学する高等学校などを通じて行います。貸与奨学金には第一種(無利子)と第二種(有利子)の２種類があり、それぞれについて選考基準があります。

その他の奨学金

財団法人などの奨学金を随時情報提供しています。大学を通じて推薦する奨学金制度のうち、主なものは、右記の通りです。

給付奨学金

学部生

通学区分	基本の月額（円）
自宅通学	第Ⅰ区分（29,200）/ 第Ⅱ区分 (19,500)/ 第Ⅲ区分 (9,800)
自宅外通学	第Ⅰ区分（66,700）/ 第Ⅱ区分 (44,500)/ 第Ⅲ区分 (22,300)

貸与奨学金

学部生

種別		月額（円）
第一種（無利子）	自宅通学	20,000/30,000/45,000
	自宅外通学	20,000/30,000/40,000/51,000
第二種（有利子）		20,000 ～ 120,000（1 万円単位）

大学院生

種別		月額（円）
第一種（無利子）	修士課程	50,000/88,000
	博士（後期）課程	80,000/122,000
第二種（有利子）		50,000/80,000/100,000/130,000/150,000

私費留学生のみを対象とした奨学金

文部科学省外国人留学生学習奨励費
(公財) 加藤朝雄国際奨学財団奨学金
(一財) 橋本循記念会奨学金
(公財) 朝鮮奨学会奨学金
(公財) 平和中島財団奨学金
(公財) ロータリー米山記念奨学会奨学金
(公財) 京都市国際交流協会張鳳俊奨学基金
(公財) 関西・大阪21世紀協会

私費留学生以外を対象とした奨学金

(公財) 青山音楽財団奨学金
(公財) 明治安田クオリティオブライフ文化財団奨学金
(一財) 京信榊田喜三記念育英会奨学金
(公財) 香雪美術館奨学金
(公財) 中信育英会奨学金
(公財) 佐藤国際文化育英財団奨学金
(一財) 法華倶楽部四恩育英会奨学金

授業料減免制度

国による授業料の減免

国による授業料減免は、国の高等教育における修学支援新制度の一つとして、意欲と能力のある若者が経済的理由により進学および修学の継続を断念することのないよう、対象者の経済的状況に応じて授業料を減免するものです。対象者は、原則として国の定める学業などに係る基準や家計に係る基準などに該当する学部生です。

本学独自の授業料減免

本学独自の授業料減免は、入学後、日本学生支援機構の奨学金などを受給するなど、学資調達の努力をしてもなお経済的理由により授業料の納付が困難と認める者に対し、審査のうえ基準に適合した場合は、授業料を減免します。
減免の対象者は、原則として高等教育修学支援新制度の対象とならない学部生、大学院修士課程・博士（後期）課程の学生です。

《制度の概要》

①前期、後期それぞれの期の授業料について審査を行います。前期に減免適用を受けた者も、後期では改めて申請する必要があります。
②申請書などの配布および受付期間は、大学のメールや学務システムで前期は4月頃、後期は9月頃お知らせします。
③申請書類に基づいて、本学が定める減免適用のための家計基準、学業基準を満たしているかどうかを学内の委員会において審査し、減免適用者を決定します。減免の適用率は、５割または３割ですが、予算に余剰がある場合、５割とされた者のうち成績優秀者を全額または7割の減免率に引き上げることがあります。

MEMO

MEMO

本学へのアクセス

ACCESS

JR・地下鉄・近鉄電車

JR（京都線・琵琶湖線・
嵯峨野線・奈良線）、
地下鉄烏丸線、近鉄京都線

京都駅から徒歩約６分

※Ａ棟まで

市バス

4・南5・16・17・81・205系統

**塩小路高倉・京都市立
芸術大学前から下車すぐ**

※Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ棟まで

京阪電車

京阪本線

七条駅から徒歩約８分

※Ｊ・Ｉ棟まで

京都市立芸術大学

〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1
TEL　075-585-2000（代表）
FAX　075-585-2019（代表）
URL　https://www.kcua.ac.jp/

ウェブサイト　Facebook　X　Instagram

発行 / 2024 年 5 月
企画 / 公立大学法人 京都市立芸術大学 全学広報委員会
表紙写真 / 市川 靖史
撮影協力 / 加藤 菜々子　駒 優梨香
協力 / DORIAN NAKAGAWA（写真提供）
編集･作成 / 公立大学法人 京都市立芸術大学 事務局 広報センター

※本誌に掲載した情報は、2024 年 5 月 1 日現在に確認できたものです。

京都市立芸術大学
京都市下京区下之町 57-1
https://www.kcua.ac.jp/